
キバ・電王・ディケイドfeat.バース オールライダーViVid

バース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キバ・電王・ディケイドfeat. バース オールライダーV
iVid

【Nコード】

N1397X

【作者名】

バース

【あらすじ】

仮面ライダーダークキバ：登オトヤはある日友人のアインハルトと共に謎の怪人と遭遇。

苦戦している彼らの前に現れたライダー…ディケイドと電王との邂逅により、2人は過去に向かう事に。

何事も無かったかの様に元の時代に戻った2人を待っていたのは、『大ショッカー』と名乗る組織により支配されていた世界だった。更に、大ショッカーにより敵と化した全平成ライダー達。

絶望するオトヤの前に現れた仮面ライダーディエンドと仮面ライダーNEW電王の手により、彼は歴史を修復する為に再び過去へと向かう。

敵は仮面ライダー！！仲間はダークライダー達！！

ガタック時代の『オールライダーVivid』に新たに仮面ライダーバースを加えた新生オールライダー、誕生！！

プロローグ：イマジン

「変身！！」

「アステイオン！！セツトアップ！！」

『絶滅せよ！！！』

『にゃあ！』

夏の終わりの学校帰り：登オトヤとアインハルト・ストラトスの2人はそれぞれダキバットとアステイオンの相棒を構え、体の底から力を振り絞った。

するとオトヤの方は漆黒の帝王：仮面ライダーダークキバに、アインハルトの方は碧銀の霸王：イングヴァルトへと変身を遂げた。2人が戦っているのは、突如として現れた3体のモグラの怪人。街のシンボルとも言える『St. ヒルデスタジアム』の前で人々を襲っていた彼らを発見し、2人は変身して戦闘開始。

ダークキバはザンバットソードで、アインハルトは素手で怪人を攻撃。

「仮面ライダーだよお…？」

「仮面ライダーだよ！！」

「仮面ライダー！！仮面ライダー！！！！」

「あ？何だコイツら…？」

口々に『仮面ライダー』という単語を並べて騒ぐ3体の怪人達。
2体はダークキバへと襲い掛かり、もう1体はアインハルトの下へ。
アインハルトの方は一応生身で素手という事もありある程度苦戦しているが、ダークキバはさすがに怪人との戦いには慣れている。
ピンポイントで敵を切裂き、ネオロットへカードを挿入して追撃を繰り返す。

『ウインド』

『プラズマ』

「喰らえええ！！」

「「ぎゃっ！？」」

『ウインド』と『プラズマ』を組み合わせた斬撃で怪人2体を突き飛ばし、彼は苦戦しているアインハルトの下へと急いだ。
彼女を襲う怪人を蹴り飛ばし、ドッグのフェッスルをネオロットへと装着。

『ドッグ・プラズマ！！』

ダキバットがそう叫ぶと、彼は『プラズマタイプ』へと強化変身を遂げ、ダキバツガハンマーで怪人を叩き潰す。
しかし案外すばしっこく、避けられてしまった。

「アイン、ティオ！大丈夫！？」

「は…はい…オトヤ君アイツ、なんかおかしいです…。なんていうか、いつものネオっぽく無いです…。」

「ネオっぽく無い？」

確かにと、ダークキバは怪人達に目を向けた。

腕にドリルをくつつけた…変な仮面…青い体に意味不明な言葉使用…。

どれもライフエナジーを貪る為だけに人を殺すネオファンガイアには見られない特徴ばかりだ。

それに団体で行動しているというのも違和感を感じる。

彼は確信した、『コイツ等はネオファンガイアじゃ無い』と。

「でも、案外弱いし、行ける行ける！！決めるぞダキバット！！」

『うむ！！』

「へ？あ、ああちょっとオトヤ君！？ああ、もう！！行きますよティオ！」

『にゃあ！』

調子に乗って突っ込んでいくダークキバ、それを追うアインハルト。

しかし、怪人達は互いに顔を見合わせるとスタジアムから少しずつ離れ…そして、走って逃げ出した。

めっちゃくちゃ足が速い…少し負傷したアインハルトとプラズマタイプのダークキバでは中々追いつく事が出来なかった。

仕方なくダークキバはネオロットのからフェッスルを抜き取ってノーマルフォームである『キバタイプ』に戻り、アインハルトを追いつ越して怪人を追う。

しかしそれでも追いつかない。

「く…そっ…！」

プオオオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

「は？」

その時、ダークキバの頭上で奇妙な音が鳴り響いた。

見上げてみると…空に謎の穴が開いており、何故かそこから電車のレールの様な物が地面に向かって延びている。

再び先程と同じ音が聞こえると、今度はその穴から1台の電車が飛び出てきた。

『桃』をイメージした様な先頭車両が率いる、近未来的な外見の電車。

それは逃げようとする怪人達の前に停車すると、扉が開き…そこから2人の人影が姿を見せた。

「で、電王だよ!？」

「電王が着ちやったよ!？」

「電王!! 電王!!!!」

出てきた1人は、赤い桃の様な仮面を付けた怪人達から『電王』と呼ばれる桃太郎の様な仮面ライダー。

「ピンクだよ!？」

「ピンクのライダーだよ!？」

「ピンク!! バーコード!!!!」

もう1人はピンク：では無く、マゼンタ色のボディを持ったバーコードをモチーフした様な仮面ライダー。

2人は怪人達をマジマジと眺めると、ビシッと構えを取った。

「俺! 参上!!!!」

「誰がピンクでバーコードだ。コレはマゼンタで、俺はディケイド……通りすがりの仮面ライダーだ。」

「何だ……この人達……？」

突然の見た事無いライダーの出現に戸惑うダークキバ。

それはようやく駆けつけてきたアインハルトも同じで、予想外の光景に口をポカンと開けていた。

そんな彼らを見無視し、電王ともう1人のマゼンタのライダー……ディケイドは続ける。

「『イマジン』……やはり【キバの世界】に来てたか……どうだモモタロス、俺の言った通りだろ？」

「う、うるせえ……！ いばってんじゃねえ……！」

『モモタロス、ここは素直に士さんに感謝した方が……』

そう言うと、電王とディケイドはそれぞれ腰に装備している武器を取り外した。

デンガッシャーとライドブッカーだ。

2人は3体の怪人……『モールイマジン』に狙いを定めると、一気に走り出し、それぞれ自分に一番近いモールイマジンを切裂いた。

ダークキバのザンバットソードにすら耐えられたモールイマジンの顔が苦痛に歪む。

この一撃でダークキバは理解した……この2人は自分とは格が違う……と。

「決めるぞ。」

「俺に命令すんじゃないぞ!!」

『ファイナルアタックライド デイ・デイ・デイ・デイ・デイ』

『フルチャージ』

デイケイドはライドブッカードを腰に戻してそこから自分のライダーズクレストが刻まれたカードを取り出し、デイケイドライダーへと挿入。

電王はライダーパスをベルトにセタッチ。

すると電王の方はデンガッシャーの刃の先が分離し宙へと浮かび、デイケイドはモールイマジンとの間に10枚のカードのヴィジョンを浮かび上がらせる。

そのまま2人はモールイマジンへ突っ込み、各々の必殺技をモールイマジンに叩き込んだ。

「必殺!! 俺の必殺技あああああ!!!!!!」

「はあああああああああ!!!!!!」

『エクストリームスラッシュ』と『デイメンションキック』だ。

それはモールイマジン2体を正確に捉え、命中。

モールイマジンはそれを受けるとあえなく爆散し、跡形も無く砕け散った。

残った最後の1体は仲間が倒された事にうろたえたと、キヨロキヨロと辺りを見回す。

「す…凄い…。」

「はい…。」

そうしてモールイマジンが目を付けたのは…ディケイド達の戦いに驚いて呆けているダークキバとアインハルト。

正確には、アインハルト。

彼女に狙いを定めると…なんと、モールイマジンは彼女を縦から真っ二つに割り、その中へと入っていった。

「!?!? あ、アイン!!」

「あ、あれ…?」

しかし、その割にはアインハルトには傷が一切無く…モールイマジンが割って入った跡など全く残っていない。

ダークキバが心配して色々と聞いてくるが、彼女にもよくわかっていない…というかわかるはずも無い。

そんな2人を見て、ディケイドと電王が寄ってきた。

「イマジンに『過去を狙われた』な、お前。」

「おいおい…マジかよ…。」

「『過去?』」

ダークキバ、電王、ディケイド。

これはこの3人のライダーの邂逅により始まる…絆と歴史の物語

キバ・電王・ディケイドfeat. バース オールライダーV
iVid

1部：デンライナー

突然現れた『イマジン』と名乗る謎の怪人。
突如として空から舞い降りてきた謎の電車。

更に、その電車から降りてきた謎の2人の仮面ライダー：ディケイドと電王。

今まで見た事も無い謎のライダーの出現に、ダークキバもアインハルトも警戒していた。

そりゃそうだ：この世界にこんなライダーはいないし、イマジンなんてものもない。

それに空を飛ぶ電車も…。

あまりにも謎過ぎる彼らに対し、ダークキバはザンバットソードを構え、アインハルトを守る様に腕を広げた。

警戒しすぎているダークキバを気にしたのか、電王は少しうろたえ、自らのベルトを外し取った。

すると電王の体に装着されているオーラスキンのデンカメンが外れ落ち、スーツがパージ。

中から先程の荒々しい戦い方からは想像も出来ない程、優しく穏やかな顔をした青年が顔を見せ、彼はブンブンと手を振った。

「あ、えっと：僕らはその：怪しい者じゃ無いよ？」

「「ジーーーーッ。」」

『「ジーーーーっ。」』

『「にゃーーーーー。」』

必死に自分が怪しい者じゃ無いと言い張る電王の青年。

それに対し、『いやそれは嘘だろ?』的なまなざしで彼を睨むダークキバ(&ダキバット)とアインハルト(&ティオ)。

うろたえる彼を見かね、ディケイドが動いた。

彼は腰のディケイドライバーに手をかけると、バックルを開いて変身を解除した。

電王が態度からは想像もつかないほどおどした青年が出てきたのに対し、ディケイドの方は…予想通りの偉そうな青年だ。

首からマゼンタ色のトイカメラをぶら提げており、彼はそれでダークキバとアインハルトを一枚撮ると、ダークキバの腰からダキバットを無理やり奪り取った。

それによりダークキバの変身も解除され、オトヤの姿に。

それにあわせてアインハルトも魔法を解き、元の中学生の姿に戻った。

「おい野上、お前こんな餓鬼相手に何ビビってんだ?」

「び、ビビってなんか…無い、です…。」

「はあ…ったく、いいからとりあえずパス貸せ。」

そう言うど偉そうな青年は野上と呼ばれた気弱な青年のポケットから1枚のカードを抜き取ると、それをアインハルトに翳す。

いきなりの事に彼女は驚き、すばやくオトヤの後ろに隠れた。

「あ、おい餓鬼。逃げたらパス当てれないだろ?」

「ば、パス…?」

「あ…あの…貴方達なんなんですか？それにその…電車？みたいな
のって…？さっきの怪人、アインの中に入っちゃったけど大丈夫な
んですか？」

「…ったく、一片にいくつもいくつも質問しやがって…。とりあえ
ずお前の後ろに隠れてるソイツ、こっちに渡せ。」

アインハルトの事だ。

どうして彼は彼女を狙っているのだろうか？

ズケズケと物を言ってくる彼を押しつけ、今度は気弱な青年が事の
説明を始めた。

「うん、さっきの怪人は『イマジン』って言って…僕等の世界の怪
人なんだけど…何か時空の歪みとか何とかでこっちに来ちゃったみ
たいで…。」

「イマジンは人の記憶を利用して過去へ飛ぶ。そこで歴史を破壊す
るのが奴等の目的だ。そこのお嬢ちゃんはいマジンに過去を使われ
た…それを倒す為に俺達も過去へ飛ぶ。わかったらとつとそいつ
こっちに寄越せ。」

事情を説明してもらったので、アインハルトは戸惑いながらも青年
達の下へ。

額にパスを翳すと先程の怪人達の絵柄がパスに浮かび上がり、その
下には今から丁度12年前の日付が表示された。

「12年前…おい、お前今いくつだ？」

「ええっと…ちょっと前に13歳になりました。」

「つて事は1歳になったばっかりぐらいか…昔すぎるだろ…。」

「とりあえず行こうよ、士さん。」

「ああ、行くぞ野上。」

パスをポケットにしまい、2人の青年は電車の中へ。

ドアが閉まり、発進しようとする電車。

それを見ながらオトヤとアインハルトは顔を見合わせ……そして、こっそりと電車の後部車両に飛び乗った。

時の電車『デンライナー』に乗り込んだ2人の青年…門矢士と野上良太郎はテーブルに座り、とりあえずコーヒーを啜った。

これから彼らは先程の少女 アインハルトから得たパスで過去へと飛ぶ…その前の一服だ。

2人の周りでは良太郎の相棒である4人のイメージ達も、良太郎達とはまた違うコーヒーを飲んでいる。

「つたく…さっきの野郎あとちよつとで倒せたのによ！」

1人は先程良太郎に憑依して電王として戦っていた赤いイメージ…『モモタロス』

「先輩がうかうかしてるからじゃないの？相変わらず単細胞だね？」

1人はキザな言葉使いで喋る青いイメージ…『ウラタロス』

「やーい！モモタロスばーか！」

1人は子供っぽい口調で騒ぐ紫のイメージ：『リュウタロス』

「ぐおーぐおー……ZZZ」

1人は寝てる黄色いイメージ：『キンタロス』

この4人のイメージが良太郎に電王として戦う力を与えてくれる。

どれもこれも個性的で癖のある奴等ばかりだ。

「では…そろそろ、参りましょうか？」

「はーい！コーヒーおかわりいかがですか？」

そう言ってくるのはオーナーとナオミ。

オーナーとは、その名の通りデンライナーのオーナー。

ナオミはデンライナーの客室乗務員で、ここの厨房を任されている。とは言っても彼女の作る料理はともかく、コーヒーはあまりにも味が未来的過ぎてイメージ達の口にしか合わないようだが…。

「わかりました。モモタロス、行こうか？」

「よっしゃあー！！クライマックスで行くぜー！！」

「行くんだったらちやっちゃと行つてとつとと帰るぞ。何せ…今日の夕飯はハンバーグなんだからな…!!」

「「……。」」

どうやら士は今日の夕飯が楽しみで仕方ない様だ。

彼が暮らしている『光写真館』の館主の作る料理の味は一級品なのだ、無理も無いが…。

「で…そこで隠れてるガキ2人、良い加減出て来い。」

その時、士が立ち上がり、デンライナーの後部車両の陰に手を突っ込んだ。

そこあった2つの人影を取り出すと、彼はそれを前方車両の床に落とした。

オトヤとアインハルトだ。

「「いったく…!!」」

「おい…お前ら何で来てんだ…?」

『「じゃあ!」』

『うむ、私らも少しばかり先程の怪人の事が気になってな。』

頭を抑えて痛がる2人の代わりにダキバットが謝罪。

その間にナオミがオトヤとアインハルトの頭に絆創膏を一枚貼り付けていた。

「あー…着いてきちゃったんだ…。」

「すみません…でも、あの怪人がアインの過去に入ったって…それで…。」

「お、オトヤ君は悪くないです！私が行きたいって…。」

「あ、うんうん、大丈夫だよ。とりあえず座って？」

良太郎は士とは正反対で優しい性格で、オトヤ達2人をテーブルに着かせると、ナオミが作っていない方のコーヒーを差し出した。

ひとまずそれを飲ませて2人を落ち着かせると、士とオーナーの許可も取ってないにも関わらず良太郎は状況の説明を始める。

「まず僕は野上良太郎。さっきの『仮面ライダー電王』だよ。」

「登オトヤです…仮面ライダー…キバ…です…。」

「アインハルト・ストラトスと申します。」

「それであっちの人は門矢士さんって言って『仮面ライダーディケイド』。僕達はこの時の列車『デンライナー』でアインハルトちゃんの過去に行って、それでさっきのイマジンを倒すんだ。」

「私の過去ですか…？何か、少し恥ずかしいんですけど…。」

『にゃあ!』

「何一丁前に乙女ぶってんだ…ガキの癖に。」

せったくの良太郎の説明にちゃちゃを入れてくる士。

彼が口を挟んだ瞬間に彼をリュウタロスとウラタロス、更にナオミが囲み、彼を捕縛。

どっかへ持つて行った。

「え!?! い、イマジン!?!」

「あ、違う違う。あれは僕等の仲間のイマジンだよ。僕が電王に変身した時に僕に力を貸してくれるんだ。」

「んで、さっき良太郎が変身してた時は俺がコイツん中に入ってたってわけだ!」

そう言いながら良太郎の肩を掴んでやけに親しげに割って入って来た赤いイマジン。

モモタロスだった。

この声に口調…成る程と、アインハルトは理解した。

電王は変身した時に力を貸したイマジンが主人格なのだと。

オトヤはいまいち理解出来ていない様なので後で教えてやろうと思いい、とりあえず忘れないようにメモっておく。

一応状況の把握と彼らの正体は理解出来たので、一安心。

その時、オトヤとアインハルトが座る席の間…というか、2人の顔の間からオーナーが顔を出し、2人は驚きのあまり少し悲鳴をあげた。

「いけませんね……非常にいけませんよ……?」

「い……いけない……何がですか……?」

「このデンライナーには、乗車パスの無い者は決して乗るべからずというルールがあるので……君達2人のどちらか1人でも、乗車パスをお持ちなんですか……?」

「「……無いです……。」」

『同じく。』

『にやにやにやにや。』

そう、このデンライナーは一見ふざけた者達ばかりいるのでおちゃらけ電車と思いがちだが……実はルールは非常に厳しい。

士も色んな仮面ライダー達を見てきたらしいが、その中でもトップレベルに厳しいようだ。

乗車パスの無い者はいかなる理由があろうとも全力で排除する……それが決まり。

勿論【キバの世界】で電王関連の物が手に入るはずも無い。
すなわち、パスなんか持っているはずが無い。

このままでは降ろされる……だが、自分達の過去が狙われているのに黙っている事も出来ない……。

しゅん、と落ち込んでいると……捕縛を振り切った士が現れ、パスをオーナーに見せた。

「：何の真似ですか土君？」

「俺のパスをこいつ等と共有する。」

「「『へ？』」」

『にやう？』

突然どうしたのだろうかとうとう頭を傾ける2人。
彼らを見捨て土は続ける。

「俺のゴールドパスなら俺が承認すれば何人とも共有できたはずだ。」

「ええ、確かにそうですが：こういう風の吹き回しで？」

「追い返しても聞かないだろ、ガキなんだからな。だったら素直に連れてって、納得させてから帰せば良い。安心しろ、怪我なんかさせないから。」

どうやら連れて行ってくれる許可は出たようだが、相変わらず馬鹿にはされているらしい。

それに対し少しムツとするアインハルトだったが、オトヤが宥めて

士に一礼。

「あ、ありがとうございます。えっと…士さんでしたよね？」

「ああ。で？お前名前からするに…ワタルと高町んとこのガキか？」

「父さんと母さん知ってるんですか？」

「当然だ、ワタルほど手のかかるガキなんか見た事無いからな。」

「え…士さんの方が年下に見えるんですけど…？」

父親は23歳、士は見た感じ二十歳ぐらい。

精神年齢的にもどう見ても士の方が年下だが…もうその辺は面倒くさいので気にしないで置く事にする。

先人はありがたいお言葉を残して逝った…『神の味噌汁』だ。

「オトヤ君オトヤ君、『神のみぞ知る』ですよ…？」

「!!!!」

「……成る程、頭は相当弱いと見た。」

一瞬で自分がどういう人間（ファンガイアだけど）なのか知られてしまった。

「……帰ったらまた国語の勉強しましょうね…？」

『馬鹿が。』

『にゃぷっ。』

「Orz」

かなり落ち込むオトヤは放っておき、そろそろデンライナーは過去へ向かう準備を開始。

まず良太郎が腰に電王のベルトを巻き付け、赤いボタンを押す。するとベルトから軽快なメロディが流れ出し、彼の隣にモモタロスが並ぶと、良太郎は叫びと共にパスをベルトにセタッチした。

「変身！」

『ソード、フォーム』

電子音と共に良太郎の体は電王のスーツに包まれた。更にそこにモモタロスが憑依し、赤いオーラスキンが電王に装着。基本形態『プラットフォーム』から強化形態である『ソードフォーム』へと変身を遂げた電王は両手をビシッと伸ばし、高らかに言った。

「俺！参上！！」

「決めポーズはいいからさっさとしろモモタロス。」

「コケッ!? てめえなあゝノッポ! 人がせつかくかつつこよく決めたつてのに、気が抜ける様な事言ってんじゃねえ!! それと、命令すんな!!」

文句は垂れながらも電王はパスを持って操舵室へ。

そこに設置されている電王の専用バイクである『デンバード』に跨ると、電王はデンバードにパスを挿入しハンドルを捻った。

するとデンバードの上のモニターに今から12年前の日付が表示。これが今から向かう先：アインハルト・ストラトス満1歳の頃。

「よっしゃあ!! クライマックスでかつとばすぜー!!」

電王率いる時の列車デンライナーは、過去へ向けてレールを伸ばし始めた。

2部…12年前

12年前…、

夏が終わり、秋が始まるこの日……ストラトス婦人はわが子を背負いながら隣町まで買い物に出ていた。

普通に買い物だけなら近所のスーパーで間に合うが、今日は隣のスーパーの特売日：勿論今時の主婦がそれを見逃すはずも無い。車の免許を持っていないので歩いてきた。

丁度娘も退屈してただろうと思ったのでタイミング的には良かった。娘：アインハルトはこの間一歳になったばかり。

父親譲りの虹彩異色と、自分譲りの碧眼の長髪が特徴的な子だった。『将来はお前に似て美人になるぞ！』が最近の夫の口癖。

それなりに金持ちの割には、それを自慢げに話したりしない夫の今一番の楽しみは娘の生い立ち。

心優しい両親に囲まれている事をアインハルトが自覚するのは、あと何年先なのだろう？

フフと笑いながら、母はアインハルトを抱きなおして帰路に戻った。今日の夕飯は夫の好きな山菜の天ぷらにしようと思いつながら、鼻歌を歌う。

その時だった。

「うひょ～～～？」

「え？き……きゃああ！！？？」

娘の体を割り、モールイマジンが姿を現したのは。

モールイマジンは赤子のアインハルトの体から姿を見せると、片手のドリルからビームを放ち、近くに掛かっていた渡り橋を破壊。

もう片方の手についた鉤爪をワキワキとさせながら：モールイマジンはアインハルトの母に迫って来た。

イマジンは過去に来た際、邪魔にならないように利用した人間を消す：つまり、アインハルトを消すという事。

当然子供だけ殺して親だけ逃がすなんて真似はしない。

殺るならば母子もろとも：：：そう考えながらモールイマジンはアインハルトの母にジリジリと迫る。

「い：：やあああああ！：：！！！」

「逃がさないよ？逃がさないよ？」

買い物袋を投げ捨てると、彼女は娘をしっかりと抱きしめて走り出した。

モールイマジンもそれを追う。

彼女自身は覇王の系統では無い為身体能力は人並み：それでも一応学生時代に陸上をやっていたので足には自信がある。

それでも埋らない差：それが人間と怪人。

あっという間に追いつかれ、彼女は娘を抱えたまま座り込んでしまった。

「い：：：：いや：：助けて：：！！」

「無理だよ？むりりだくよく？アハハハハ！」

「お願いします！！この子：アインだけは助けて！！私はどうなっ

てもいいですから!!」

「無理無理! あひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ!」

『フォームライド ファイズ アクセル』

アインハルトの母に迫るモールイマジンの耳に、聞きなれないそんな音が聞こえた。

何事かと考えた一瞬…その一瞬の間にモールイマジンは右手に違和感を覚えた。

……右手が無い…。

振り返ると、そこには機械的な仮面ライダーと桃の様な仮面をつけた仮面ライダーの2人が立っており、機械ライダーの手の中にはモールイマジンの右手が。

「俺！再び参上！！」

「何だ…最近のイマジンは赤ん坊も襲うんだな？」

仮面ライダー電王…それと仮面ライダーディケイドだった。

ディケイドは『仮面ライダーファイズ』の力を借りた『仮面ライダーDCDファイズ』へと変身を遂げており、更にはその強化形態である『アクセルフォーム』に。

この姿でいられるのは10秒が限界……それを過ぎ、彼は元のディケイドの姿へと戻った。

「お前が好き勝手やれるのもそこまでだ。覚悟しろモグラ野郎。」

「へへへ…それじゃあクライマックスで行くぜええええええ!!」

ライドブツカーとデンガツシャーを構えて走り出す2人。

その隙に停車していたデンライナーからオトヤとアインハルトが駆け出し、アインハルトの母親を保護した。

「お、お母さん!! 大丈夫!? 怪我無い!?」

「え……？ え、ええ……。」

「しっ！アイン、この時代じゃこの人はまだ君の事を知らないよ！それにオーナーさんも言っちゃないか。」

『乗車は許可いたしますが……過去への介入だけはぜ……つたいに許しませんよ?』

「あんまり余計な事言わない方がいいよ?」

「あ……はい、ごめんなさい……。」

オトヤがアインハルトを注意している間に、ディケイドと電王の方はモールイマジン相手にそこそこ苦戦していた。

本来個人戦が得意な2人だけに、お互いがお互いを干渉しあって上手く戦えていない。

ダークキバに変身して参戦しようにも、過去への介入が出来ないのでこれ以上の事をやるわけにも行かず……オトヤとアインハルトは固唾を吞んでディケイド達を見守った。

「おいモモタロス!! お前好き放題暴れるな!! 戦いづらい!!」

「うるへえ!! コイツあ俺の獲物だ!!」

この2人……仲が良いのだから悪いのだから……。

一応電王は良太郎の人格でも戦えるが、途轍も無く弱いのでそれはほとんどやらない。

しかし、とうとうそれを見かねた良太郎がモモタロスの人格を乗っ

取り、電王の主導権を奪った。
ベルトの青いボタンを押し、パスをセタツチする。

『ロッド、フォーム』

「お、おい良太郎!？」

『ゴメンねモモタロス…でも、士さんに迷惑かけるわけにもいかな
いから…。』

『そゆこと♪ごめんねえ先輩?』

電王からモモタロスが排出され、代わりに青いイマジン…ウラタロ
スが電王に憑依した。

すると電王の装甲が一度全て取り外され、それらは青いカメの甲羅
の様に組み変わると、再び電王に装着。

最後に複眼がオレンジ色に光り、電王はウラタロスを主格とした『
ロッドフォーム』へと姿を変えた。

それにあわせてディケイドもライドブッカーからカードを一枚引き
抜き、ディケイドライバーへと装填。

『フォームライド アギト ストーム』

バックルを閉じると同時にディケイドの体に渦の様な物が巻き起こ
り、彼は『仮面ライダーDCDアギト ストームフォーム』へ変身。
2人はストームハルバードとデンガツシャー（ロッドモード）を構

える。

「お前、僕に釣られて見る？」

「行くぞ野上、ウラタロス。」

『フル、チャージ』

『ファイナルアタックライド ア・ア・ア・アギト』

それぞれの必殺技の体制に入る電王とDCDアギト。

まず、DCDアギトがストームハルバードでモルイマジンを連続で攻撃し、少しずつダメージを蓄積させていく。

彼がモルイマジンを突き飛ばすと、その上から電王の『デンライダーキック』が炸裂。

DCDアギトによってダメージを与えられていた為逃げる余裕の無かったモルイマジンは当然の如く電王の必殺技を喰らい、爆発。爆風が発生し、アインハルトは母親と幼い自分が飛ばされぬよう、オトヤはそんな彼女が飛ばされない様に身構えた。

オトヤ達の知っているネオファンガイアとは違い、イマジンは倒されてもその場に何も残さない。

跡形も無く消し飛ばされ、イマジンがいた跡など綺麗さっぱり消えていた。

イマジンの撃破を確認すると、オトヤ達はホッと胸を撫で下ろし、アインハルトの母親を逃がす。

「誰だかわかりませんが、本当にありがとうございました！」

『気にするな、行け。』

去っていく母を見ながら、アインハルトはだらしなくその場に座り込み、フウと溜息をつく。

「はぁ〜…お母さん、無事で良かった…。」

「うん、そうだね、よかったよk、」

「いいわけあるか。」

ゴスツ！

「「いたっ!?!」」

いつの間にか変身を解除していた士の鉄拳が2人の頭に鋭く突き刺さった。

しかも頭の丁度真ん中…いわゆるつむじの辺り。

壮絶な痛み表情を歪ませながら、2人とも蹲る。

「お前等な…あれほどデンライナーから降りるなって言っただろうが? どうして降りてきた?」

「……………だってお母さんが…、」

「『だってお母さんが…』じゃねえよ。あんな奴俺と野上に任せてたらずぐに倒せる。お前等は黙って車窓でも眺めてれば良いんだよ。」

「……最初てこづってたじゃ無いですか…。」

「モモタロスのせいだ。」

怒る士と頭を抑えて涙目のアインハルト。

そこへ同じく変身を解除した良太郎とウラタロスが駆け寄り、2人を宥めた。

「全くもう…女の子を泣かせるなんて、美しく無いよディケイド？」

「大丈夫？ほら、これで涙拭いて。オトヤ君も大丈夫だね？さ、デンライナーに戻ろうか？」

「…はい。」

士と違い人の出来ている良太郎に連れられ、2人は再びデンライナーへと戻る。

とりあえずこれでこの時代でやるべき事は終わった、あとは元の時代に帰るだけ。

そう言えば今日は2学期の中間テストに備えて勉強会をするんだっと思った出し、鞆の中を覗いて見た。

幸い、あれほどの戦いだったにも関わらず教科書もノートも筆記用具も全部ある。

カードケースの中にもちゃんとネオカードが入っている。これで帰る準備は完璧だ。

「じゃあ、君達は12年後のスタジアムの前で降ろすけど、それでいいかな？」

「あ、はい。お願いします。」

「つたく…ようやくガキのお守りから解放されるぜ。」

こうして12年後の時代へ向けて走り出すデンライナー。
もはやこの時代で思い残す事は何も無い。

そう…先の爆風でアインハルトのポケットから最強のネオカード『フェニックス』のカードが落ちた事以外は……、

「イー！」

「イー？」

「イー！イー……ッ！！！！」

「どうしたのだ？」

デンライナーが去った約1時間後…この場所を訪れる数人の人影があった。

ほとんどはガイコツの様な全身タイツに身を包んでおり、見分けが体型以外はつかない。

1人だけ黒い鎧を被っている男…彼がこの軍団のリーダーだ。

どうやらガイコツの1人が何かを発見したようだ。

彼はそれを拾い上げると、早速鎧の下へと持っていく。

鎧はそれを受け取り、ニヤリと笑った。

「これは凄い力だ……これを『大ショッカー』本部の死神博士の下へと持ってゆけば、最強のショッカー怪人が生まれるであろう……これでこのブラック將軍の株もますますあがるというものだ……!!」

3部：大ショッカー

プオオオオオオオオオオン！！

S t. ヒルデスタジアム前に鳴り響く汽笛。

その音と共に、スタジアム上空の空に裂け目が生まれた。

見た感じ電車一台通れそうな程大きな穴：更にそこから伸びてくる、一本の線路。

それはスタジアム前の広場へと降りてくると、その車線を伝いながら一台の電車が空から降りてきた。

『時の列車デンライナー』が現代の【キバの世界】へと帰ってきたのだ。

この時間の住人であるオトヤとアインハルト、それぞれそれぞれの相棒であるダキバットとティオを乗せた時の列車は地面へと降りてくると、一旦停車。

ハッチが開き、そこからオトヤとアインハルトがゆっくりと下車してきた。

帰っていく2人に対し、良太郎とナオミ、それとイメージズ（未だに寝ているキンタロスと不貞寝してるモモタロス除く）が手を振り、士は腕を組んで外の景色を眺めていた。

2人はまず、一番お世話になった良太郎にお礼を言おうと、続いて士に。

士もお礼を言われた事に対しては反応し、手をスッとあげると再び降ろす。

きっと彼なりの別れの挨拶なのだろうと解釈すると、オトヤとアインハルトの2人は相棒達と共にデンライナーから一定の距離を取った。

するとデンライナーは再び汽笛を鳴らし、そのまま新たな時間へと

消えていく。

2人はそれが完全に消えるまで見送ると、ふう、と溜息をついた。

「行っちゃったねー……。」

「そうですね…まさか、過去に行くなんて…思っても見ませんでした…。」

『にやう。』

『アイン嬢がお父上とお母上に愛されているというのが良く分かる日だったな。』

／／／

例の如く、この後ダキバットはアインハルトから殴られた。

ついでにオトヤからも殴られた後、ティオに噛まれた。

痛みのあまりにのた打ち回っていると、更に電柱に体をぶつけて地面に落ちた。

「くくほ、ほらっ！早く帰って勉強しますよ！赤点取って補習なんかになったら私達も困るんですから！！」

「べ、別にそんなに急がなくても…あっ、痛い！手！痛い手！」

顔を真っ赤にしてオトヤの手を無理やり引っ張るアインハルト。

本来彼にとっては嬉しいシチュエーションのはずだが、手が痛すぎてそれどころではない。

ようやく正気に戻ったアインハルトがオトヤの手を離れた時には、彼の手はしばらくは使い物にならないであろう程まで腫れ上がって

いた…。

「ふうー！ふうー！いつつつつ…。」

「すみません！本当にすみません！」

「あー、いいいいいよ、気にしないで…：ねえアイン？」

「はい？」

急に、オトヤは真顔になってアインハルトに問いかけた。
改まって言ってくるものだから思わずアインハルトは驚き、あどずさる。

それでも構わずに、オトヤは続けた。

「あのさ…何か妙な感じしない？」

「妙な感じ？」

「うん…何て言うかさ…。」

静か過ぎる。

この辺は平日の昼間でも割りと人は通る場所。
それなのにこんな時間にも関わらず、この場にはオトヤ達以外誰も
おらず、デンライナーが来る前からあったはずのクレープの屋台も

消えている。

いや、それだけならばまだ良かっただろう…まだ気になる程度で済む。

それ以上に異様だったのは、周りの建物。

先まであったはずのビル等は全く別の建造物に変わり、公園だった場所がビルになったり。

更にその建物全てに『DCD』と書かれた鷲のマークが刻まれていた。

こんな物今まで見た事なんか無い…突然の出来事に、2人とも困惑しだす。

「ど、どうなってるんですかコレ…私達の街が…！？オトヤ君！」

「ぼ、僕にわかるわけ…！！ダキバット！」

『い、いや私もしらねえよ！？ティオ！』

『がぶっ。』

「『いだぁぁぁぁぁ！！！』」

痛い…夢じゃない。

これは現実の様だ。

辺りを少し見てみるが、やはり…地形以外は全くの別物と化した町並み。

いや、全く…という程でも無いか…少しは面影がある様に見えなくも無い。

しかしそれでもここが2人の知る街とは変わってしまった事には変わりない。

一体何が…そう思っているその時だった。

「ねえ。」

「「？」」

突然、ポンポンとオトヤの肩を叩く人物が。

ボロボロの衣服とズタズタの帽子を纏った小さな少女だった。

彼らは彼女に見覚えがある…何故なら彼女は…、

「ヴィヴィオ！？」

「ヴィヴィオさん！？」

間違いない…ヴィヴィオ…オトヤの妹だ。

いつも元気なアインハルトの格闘技仲間でもなる。

ガラッと変わってしまったこの世界で、少し希望が見えた様な気がした。

「おいヴィヴィオ!! この街どうなったの!?! 建物とかさ!?!」

「そ、それよりどうしたんですかその格好!?! 可愛そうに……確か私の鞆の中に体操服が……」

「ふんっ!」

「きゃあ!?!」

なんと、突然ヴィヴィオがアインハルトを突き飛ばした。

すると彼女はアインハルトの鞆を奪い取り、それを持ったまま走り去って行ってしまった。

しばらくの間面食らう2人……数秒して、何が起きたのか理解し、叫んだ。

「「『ええええええええええ!?!?!?』」」

『にゃあ?』

一瞬何が起きたのか理解できなかったの……ひとまず状況を整理してみる事に。

デンライナーで過去に行った↓過去で母親を助けた↓現代に戻ったら何かすんごい事になってた↓ヴィヴィオ登場↓アインハルトの鞆（貴重品入ってる）盗まれた。

：考えても意味がわからない。

どうしてヴィヴィオがそんな事をするのか：考えるよりも行動した方が早い。

ひとまずヴィヴィオを追いかける事にし、2人はそれぞれの相棒を連れて走り出した。

逃げるヴィヴィオ：2人…。

身体能力はどっこいどっこいのはずなのに、何故か追いつけない。

オトヤは仕方が無いとして、ヴィヴィオよりも強いはずのアインハルトが追いつけないのはおかしい：明らかに彼らの知っているヴィヴィオの身体能力を大きく上回っている。

それでもティオとダキバットならギリギリ追いつけそう：惜しい所で追いつけなかったりするが…。

しばらくそうやって追いかけて続いていると、3人はとあるジヤンク街へと迷い込んだ。

確かここは本来、レストラン『ACE』があった付近だ：今はボロボロの小屋みたいなのが建て並んでいるが…。

ヴィヴィオはそんな小屋の間をすり抜けながら逃げ惑う、オトヤ達はそれを追う。

そしたら、急に小屋の影から飛び出してきた警察官に、オトヤはぶつかってしまった。

「あ…す、すいません…。」

「……………」

謝っているのに無反応な警官。

すると彼はオトヤの腕を掴み、そのまま彼を動けないようにガッツリと取り押さえた。

その隙にヴィヴィオはまた逃げ出し、『任せろ』と言ってダキバットとティオがヴィヴィオを再び追跡開始。

アインハルトはオトヤを助け出そうと警官へ懇願する。

「あの、すいません！後でまた謝り来ますから、今だけは見逃してください！」

「本当に！！ほんと～～～にすみません！！でも、ちょっと今は…、」

カチッ！

オトヤ達が謝っている間に、警官はポケットから奇妙な形をしたスイッチを取り出した。

彼がそのスイッチを押すと、彼の体にオリオン座が現れ：警官の姿が徐々に変わっていく。

オリオン座モチーフの怪人：『オリオンゾディアーツ』だった。

「「！？」」

『ふうふうふう…うおおおおおお！！！！』

腕に持った棍棒を振り上げ、オトヤを攻撃するオリオンゾディアーツ。

だが彼も仮面ライダー…そのぐらいの攻撃は見切れる。

オトヤが逃げ出した後もオリオンゾディアーツは棍棒を振り回し、暴れまわる。

「か、怪人！？ネオでもイマジンでも無い！？」

「お、オトヤ君！！とりあえず逃げましょう！！」

「う、うん…！行こう！！」

アインハルトの手を引き、オトヤはオリオンゾディアーツが余所見をしている隙に退却。

ダキバット達が消えていった方角へ全力で走って行き、オリオンゾディアーツの姿が見えなくなった辺りで立ち止まり、一休憩。

見た事も無い怪人の出現に2人ともただただ困惑するだけ。

「はあ…はあ…あ、アイン…大丈夫…？」

「は…はい…何なんですかアレ…？ネオにもイマジンにも見えませんでしたよ…？」

「僕にわかるわけ…はあ…はあ…無いだろ…。」

『オトヤ！！アイン嬢！！』

『にゃあ！！』

その時、ダキバットとティオが向こう側から姿を現した。

どうやらヴィヴィオがアインハルトの鞆を持って行った先が見つかったらしい。

先程の謎の怪人の事も気になるが、ひとまず今はヴィヴィオ。普段の彼女からは想像もつかない行動…その意味を知る事が今の2人のすべき最優先事項だ。

ダキバット達が2人を案内したのは…終戦後の日本を思わせる程ロボロになった小学校の様な建物。

元々ここにはオトヤ達も通っていた『St. ヒルデ魔法学院』があったはず。

道順もはっきりと覚えている…なのにそこにある建物だけが違う。この時点で2人は確信した……。

『自分達が過去に行っている間に何かが起きた』と。

とりあえず中に入ってみると…そこにはアインハルトの鞆を囲んで見ているヴィヴィオ…と、彼女の友達のリオとコロナの姿があった。彼女はオトヤ達に気付くと、ハッと声を上げて後ずさり、ポシエツトから1本のナイフを取り出して構えた。

「なっ!?! あ、あんた達!?!」

「ヴィヴィオ探したぞ…お前どういうつもりだよ!?! いきなりアインの荷物盗って行ったりして!!」

「うるさい!! 『大ショッカー』のくせに!!」

「『大ショッカー?』」

これまた聞きなれない単語だ。

ショッカー…ならば歴史の授業で聞いた事があるが、『大ショッカー』

なんてものは聞いた事は無い。
それにヴィヴィオはどうやら自分達の事を知らない様だ…そこも気になる。

「大シヨッカーって何だよヴィヴィオ…？」

「しらばっk、」

「どうしたのヴィヴィオ？」

「…ママ！」

その時、明かりの無い廊下の左記から1人の女性と男が姿を見せた。
男は短髪髭面に革ジャンという井手達、女の方はTシャツにマシンガン、首下には赤いペンダントという格好。

男の方は見た事無いが女の方は見た事がある……というかつい最近までほぼ毎日見ていた。

彼女は…、

「母さん…?」

登なのは…オトヤとヴィヴィオの母親だった。

しかしその姿は彼らが知る彼女とは全く違っていた。

いつもは家庭的で笑顔の似合う女性のなのは…だが今の彼女は母と言うよりも『兵士』と言う方がしっくりくる様な格好をしている。

目も腐った河の様に濁っており、髪もいつものサイドポニーでは無くボサボサのストレート、レイジングハートを身につけてはいるが、それ以上に目を引く大きなマシンガン…。

オトヤの知る『登なのは』の姿はそこには無く、ただただ戦う事だけを目的にした様な女がそこにいた。

「はいママ、今日の獲物。」

「ああ、偉いわヴィヴィオ…で、この子達は?」

「多分、大シヨッカーの手先だよ…早く閉じ込めないと!!」

「おいおいヴィヴィオちゃん…まだそうと決まったわけじゃねえだろ?」

「明は黙ってなさい。」

「…はい。」

どうやら男の方は『明』という名前らしい。

そのままオトや達はなのは達に連行され、恐らく元々は校長室だったであろう場所へと連れて行かれた。

校長室に到着するまでの間に、色んな人とすれ違った。

その誰もが大人で、誰も彼も目が血走っており、まるで戦場に放り込まれたような感覚に襲われる。

さしずめここは『アジト』と言ったところか……いや、実際そうなのだろう。

先にヴィヴィオが口にした『大ショックー』という単語と何かしら関係があるのだろうか……？

「まず最初に聞きたい事……貴方達は何者？」

「あ、あn」

「正直に答えなさい。」

そう言いながらなのはが実の息子に向けてくるのは……マシンガン。しかも目が本気だ……下手したら本当に殺られるかもしれない……。

ここは正直にありのままを話すのではなく、とりあえず自己紹介だけで済ませておこうとアインハルトとアイキヤッチ。

「えっと……登オトヤ……です……。」

『ダキバットだ。』

「アインハルト・ストラトスと申します……。」

『にゃあ！』

「こっちは私のデバイスのアステイオン…ティオです。」

「高町なのは。」

名前だけきっぱりと言うと、なのははオトヤに銃を突きつけたまま更に次の質問に。

「大シヨツカーの手先というのは本当かしら？」

「な！？何言ってるんだよ母さん！！そもそも僕らは大シヨツカーなんてものしr、」

「オトヤ君ストップ！」

突然オトヤの口を押さえるアインハルト。

彼が余計な事を言わない様にする為の措置だ。

彼に代わりアインハルトが答える。

「私達は大シヨツカーではありません…信じてください。」

「信じる…？無理ね、その服…学生でしょ？学校なんて裏切り者の子供達しか通えない施設だもの。」

「まあまあなのちゃん。そんなコエえ顔すんなって。子供の扱いなら俺のがうめえからさ…お前は向こういって休んでろ。今日だって結構無茶してんだからよ。」

「……私に指図するの？」

「心配してやってんだよ。いいから休め。」

「……逃がすんじゃないわよ……」

虫を嘔み潰したかのように苦い顔を見ると、なのはは校長室を出て行く。

どうやらこの男が苦手の様だ。

確かに見た感じ人を信用出来なさそうな彼女と、見た感じ思いやりのありそうなこの男……相性は悪そうだ。

元の世界のなのはなら、もしかしたら仲良く出来たのかもしれない。男はヌツと身を乗り出して2人（十ダキバット&ティオ）の目を覗き込むと、フツと笑い、2人の頭をワシヤワシヤと撫で回した。

「ハハハ！ 違うなあ……お前らは大シヨッカーじゃ無い。と言うより、『この世界』の人間じゃあ無さそうだ。」

「あ……あの……」

「おっと、わりい。俺あ伊達明。ここで医者やってんだ。ま、よろしくな！」

男……伊達は見立て通り、良い人だった。

しかも眼力も半端じゃない……一発で2人をこの時代の人間じゃ無いと見破った。

とりあえず、なのはやヴィヴィオよりも話が通じそうなので、オトや達は分からない事をどんどん質問していく事に。

「あの……大シヨッカーって何なんですか……？ それにここ……」

「ああ……」

『大シヨッカー』と呟きながら後ろを向く伊達。
いや、後ろを見たわけではない：後ろの壁に飾られている写真を見ているのだ。

「大シヨッカーって言うのは『世界中』の悪の組織を結集させた秘密結社だ。シヨッカー、デストロン、GOD機関、クライシス、ミュージアム、財団X、グリード……その他にも組織や怪人を集結させた悪の大組織：世界征服を目的とし、逆らう者達は皆殺しにする……それが……」

「大：シヨッカー……？」

「そうだ。」

確かに昔歴史の授業で『シヨッカー』という悪の組織の事は勉強したが：まさかそれ以外にも悪の組織がいたとは……

伊達の話では大シヨッカーには計28世界の組織や怪人が集まっているらしく、今後増えていく可能性が極めて高いと言う。

大シヨッカーの猛威はこの【キバの世界】だけに留まらず、すでに各世界に進出していているらしい。

伊達本人も元々は『オーズの世界』と呼ばれる世界の出身で、大シヨッカーによってここに飛ばされたそうだ。

その辺で死に掛けているところをこの『レジスタンス』のリーダーであるのはに拾われ、その恩返しとして元の世界で行っていた医業を営んでいる。

「俺の仲間もすでにやられた。一緒に来たアンコ……ああ、俺の仲間ね。アイツもどこ行っちゃったのか……」

「伊達さん……」

「……お前等もわけありなんだろうが、聞くのは止めとくわ。話したくねえだろうし。」

『すまぬな、伊達殿。』

「気にすんな。お、そうだ！」

ポンツと手を叩くと、伊達は鍋を取り出し、校長室においてある冷蔵庫から少しばかりの食料と調味料を準備。
小さいコンロをテーブルに置くと、ニカツと笑い、2人に言った。

「おでん、喰うか？」

「何してるのよ明？」

「おっ、なのちゃん。」

伊達が話しをしてきている間に、なののはが戻ってきた。
その頃にはすでに伊達が自慢のおでんを拵えており、オトヤとアインハルトと一緒に食べていた。
巾着を頬張りながら、なののはの分を装い彼女に渡す。

「お前もどう？」

「ふざけないで。偵察の時間よ。さっさと立ちなさい。」

「…手厳しいねえ…じゃ、2人とも、俺あ行つて来る。んじやな。」

なのはと共に去っていく伊達。

数十分後：正直おでんを食べていたのは実質伊達1人だけなのでどうしようかと思うが：勿体無いので皆に持っていこうと言う結論になり、2人は鍋を持ち上げて立ち上がった。

……その時だった。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

「!？」

「なんだ!？」

『にやっ!？』

途轍もない爆音が校舎の外で鳴り響いた。

姿が。

いや、それだけでは無い：他にも沢山の怪人達の姿がある：。大量のショッカー戦闘員やマスカレイド・ドーパント：他にもワーム、ヤミー、グロンギなど：数々の世界の怪人が：。大ショッカーに間違いないだろう。

「あ：あいつ等が：！！」

「オトヤ君！！ヴィヴィオさん達の所へ行きましょう！！」

「う、うん！！」

アインハルトに言われてヴィヴィオ達がいる教室へと向かう。来て見れば、やはり彼女達も窓の外を見つめ、ガタガタと震えていた。

「何で：どうしてアジトがばれたの：！！？」

「そりゃもうここに身を隠して3年だもん：見つかるのは時間の問題だったんだ：！！」

「どうしよう：戦える大人の人は皆いないよ！？私達だけでどうするの！？」

困惑するヴィヴィオ達：そして、それを放っておけないのが兄貴として性分だ。

アインハルトの肩をポンツと叩くと、オトヤはゆっくりと外へと出て行く。

「オトヤ君何を！？」

「アインはヴィヴィオ達を守って……行こうダキバット…。」

『うむ。』

アインハルトの静止を無視し、オトヤはグランドへと行ってしまった。

目の前には数十体の怪人の群れ…ダークキバー1人で勝てるかどうかわからない…。

それでも戦わない事には始まらない…そう思い、オトヤはダキバットを手に噛ませた。

それと同時に襲い掛かってくる怪人の群れ……急いで変身を試みるが、ダキバットを『フォーゼの世界』の怪人 オリオンゾディアーツに弾かれてしまった。

宙を舞うダキバットを掴もうと手を伸ばすが、その腕を掴み、オトヤを宙に投げ飛ばす『オーズの世界』の怪人 オウムヤミィ。

地面に落とされる直前で、今度は【響鬼の世界】の怪人 赤鬼に殴り飛ばされ、オトヤは地面をゴロゴロと転がった。それでも立ち上がり、ダキバットを呼ぶ。

「はぁ…はぁ…だ…ダキバット…!!」

『うむ…この先にはいけません…いけませんぞ…!!』

「「「きゃあああああ!…!!」」」

「『なっ!?!』」

なんと、アジトの方にも大ショッカーの魔の手が。

校舎の方を振り返ると、何とまた新たな怪人達がヴィヴィオやインハルトを襲っており、彼女等は悲鳴を上げてる…。

しかも彼女等に気を取られている間に自分も敵に囲まれてしまった。まさに絶体絶命…その時だった。

ドカツ!! バコツ!! ババババン!!!

「…へ？」

何と、ショッカー戦闘員の1人が、シアン色の銃を持ってオトヤの周りの怪人達を攻撃した。

勿論、他の怪人達もそれに黙っているはずが無い。

一斉にその戦闘員に振り返る。

「情けないねえ…たった1人の子供に、こんな大人数で襲い掛かってさ？」

『我々大ショッカーに逆らう者は何人たりとも逃がしはしない…いかなる手段を持ってしても排除するのだ…貴様も大ショッカーの戦闘員ならばわかるだろう?』

オウムやミーの言葉に戦闘員はクククと笑うと、自らのマスクを投げ捨てた。

中から出てきたのはその不細工なマスクから出てきたとは到底思え

ないほど爽やかな…所謂2枚目な青年。
さらに戦闘員服を脱ぎ捨てると、彼はオトヤとダキバットの前に出てきた。

「わからないねえ…だって僕、」

ニコツと笑い、青年は銃を構える。

「大ショッカーじゃ無いから♪」

『貴様…何者だ…?』

「そうだね…あえて言うなら…、」

そう言うのと、青年は懐から1枚のカードを取り出した。
オトヤはこのカードに見覚えがある…確かディケイド、士が使っていたカード。

青の戦士が刻まれているカードを手につつ銃…ディエンドライバーへ挿入すると、彼はそれを上に上げた。

「通りすがりの仮面ライダーっていう所かな?」

『カメンライド』

「変身ッ!!!」

『ディエンド』

ディケイドと同じ様な電子音が鳴り響き…青年の姿が変わっていく…。

シアンの体色、バーコードモチーフのボディ…手に持った変身銃デ
イエンドライバー…。

謎のライダー…仮面ライダーディエンドは変身が完了すると、大シ
ョッカーの怪人の群れに向かって行った。

3部：大ショッカー（後書き）

感想待ってます。

4部：敵はライダー

苦戦していたオトヤの前に突然現れた謎の仮面ライダー…ディエンド。

ショッカー戦闘員の1人が変身した仮面ライダーで、どうやら大ショッカーの敵の様だ。

仮面ライダーなのだから大ショッカーの敵なのは当たり前なのだろうが…いかんせん、素性が一切不明。

素顔がチラッと見えたぐらい。

しかしディエンドはオトヤの目の前に立ち、何体もの怪人の群れと向き合う。

『アタックライド』

「少年…こんな所でぐずぐずしてていいのかい？」

「え？」

オトヤの方を向かずに言うディエンド。

すると彼はクイツと右手の親指で後ろを指し、オトヤに後ろを向く様に指示。

その先に見えたのは…：…新たな大ショッカーの刺客達。

「あ…まずい…：…アインツ！！」

「さっさと行きたまえ、君がいては足手まといだ。」

『スラッシュ』

そう言うとき、ディエンドはディエンドライバーに挿入したカードをライド。

『アタックライド スラッシュ』の音声と共にディエンドライバーはソードモードに変形。

刃を撫でる様に構え、そのままディエンドは怪人達の群れに突き進んでいった。

オリオンゾディアーツ達が容赦無くディエンドに攻撃をしかけるが、彼はそんな事気にはしない。

華麗すぎる動きでそれを次々と交わしていき、的確に斬り込んで行く。

「早く行くんだ、でないと大変な事になるよ？」

「あゝは、はい！誰だからかもしれませんが、ありがとうございます！！行くぞダキバット！！」

『うむ！！』

この場合はディエンドに任せ、アインハルト達の下に向かったオトヤ。得体の知れない謎のライダーだが、何故か信じてもいいような気がした。

根拠は無いが、きっと大丈夫。そう信じて彼は相棒と共に校舎へと向かった。

「霸王断空拳!!」

その頃校舎…もとい、アジトの中では攻め入ってきた大シヨツカーの戦闘員達とアインハルトが戦っていた。

ティオをセットアップし全身を強化した彼女ならば負けるはずが無い……というのは『対人戦』の時の話し。

彼女が今日にしている敵は人間などではない…『改造人間』達だ。その証拠にアインハルトの『断空』はほとんど効いて無いように見える。

やはりライダー関係の戦いには彼女は向かない…しかし、それでもやるしかない。

そう思いながら戦闘員1人を持ち上げ、恐らくこの中でのリーダー格と思われるエナジー・ドーパントへと投げつけた。

エナジー・ドーパントは投げられた戦闘員を叩き落として踏みつけると、右手に大きな電撃を溜め、アインハルトへと放電。

彼女は体中を防御系魔法で覆い、何とかそれを受けきるが…すでに体はボロボロ。

膝をついたと同時にエナジー・ドーパントに髪の毛を掴まれ、そのまま後ろに隠れていたヴィヴィオ達の下へと投げ飛ばされた。

「きゃっ…!!」

「あ…あの…大丈夫ですか…?」

彼女から少し離れた位置でリオとコロナが声を掛けるが近寄ろうとはしない。

しかもヴィヴィオは彼女から目を反らし、戦いを見てすらいなかった。

ヴィヴィオがアインハルトから目を反らしていると、彼女の後ろに今度はクライシス戦闘員達が。

クライシス戦闘員とショッカー戦闘員がヴィヴィオ達の腕を掴み、襲う。

それを見たアインハルトは何とか立ち上がり、戦闘員達を殴りつけた。

「ヴィヴィオさん達から離れなさい!!」

『にゃあ!!』

拳を構えるアインハルトだが、すぐに後ろからエナジー・ドープン
トに襟を掴まれ、ヴィヴィオ達とは魔逆の方向へ投げられてしまっ
た。

そしてとうとう変身解除。

元の子供の姿に戻り、頭から血を流しながら床にひれ伏す。

「ヴい…ヴィオ…さ…くっ!」

「は、離して!! 離しなさい!!」

『解放軍リーダー、高町なのはの娘…大ショッカーに逆らった罪…
…その命を持って償え!!!!』

「ヴィヴィオから離れろ おおおおおおおおおお
お……………」

その時、何者かがヴィヴィオを掴んでいるクライシス戦闘員を後ろから蹴り飛ばした。
オトヤだ。

彼は着地すると今度は彼女の周りのショッカー戦闘員達を殴り飛ばし、ヴィヴィオを後ろに下がらせる。
相手がひるんだ隙にアインハルトの手を引き、彼女もヴィヴィオ達と同じ所まで下がらせた。

「お…オト…いたっ！」

「アイン大丈夫！？…ごめん…すぐに片付けるから…ダキバツト…！」

『うむ!!大シヨツカー共:絶滅せよ!!ガブリ!!』

ダキバツトを掴み、オトヤは自分の手を噛ませる。

すると彼の顔にステンドグラスの様な奇妙な模様が浮かび上がり、体中からメキメキという音が鳴った。

続いて彼の腰に鎖が何重にも巻き付き、それは徐々に形状を変えてベルトの形を形成。

ダキバットを斜め上に構え、彼は少し後ろを振り返るとまたすぐに正面を向き、思いつきり叫んだ。

「变身！！」

[illegible]

…というガラスが砕け散る様な鋭い音が辺りに響き、登オトやはその姿を変えた。

その姿はまるで：吸血鬼の様に：。

頭部に蝙蝠の羽、ワインレッドとメタリックブラックのボディ、灰色のマント。

1。邪悪な姿に正義の心も持つ：『帝王』と呼ぶに相応しい仮面ライダー

「あ……あれは……!？」

「キバだよ……仮面ライダー、
ダークキバ。」

そのライダー…仮面ライダーダークキバはザンバットソードを右手で握り締めると、左手を怪人達に向け、こう叫んだ。

「光栄に思え!!!絶滅タイムだ!!!」

その言葉を合図に、ダークキバも怪人達も一斉に走り出した。相手はほとんどが戦闘員ばかり…ダークキバの敵ではない。

ショッカー戦闘員達を左手で、クライシス戦闘員をザンバットソードで殴り倒していき、リーダー格であるエナジー・ドーパントへと突き進んでいく。

「オトヤさんが…仮面ライダー…!?!」

「で、でもオトヤさんはヴィヴィオを助けてくれたよ!?!きっとダークキバは私達の味方なんだよ!!!ね、ヴィヴィオ!」

「……。」

リオの言葉に、ヴィヴィオは全く答えない。

それを心配そうに見つめるアインハルトだったが、今はそれよりもダークキバ。

ヴィヴィオとダークキバを交互に見渡している。

『ウェイクアップ5!!! オトヤ!!! 一気に決めるぞ!!!』

「よし来た!!! 皆危ないから離れてて!!!」

ダキバットの叫びと共に、辺りが暗闇に包まれる。

彼が今から何をしようとしているのか理解したアインハルトはヴィ
ヴィオ達を連れて少し離れた。

彼女達が離れた事を確認すると、ダークキバは全身の力を振り絞り、
ザンバットソードを振り下げた。

「絶滅!!! ザンバット斬!!!!!!」

『絶滅・ザンバット斬』：ダークキバの最強必殺技。

辺りが暗闇に包まれると同時に出現する無数のザンバットソードの
幻影が雨の様に敵に降り注ぐ奥義中の奥義だ。

当然戦闘員ごときがそんな物に耐えられるはずも無く、一瞬の内に
消滅した。

しかしエナジー・ドーパントは生き残っており…それも倒すのは時
間の問題だろう。

ダークキバがジリジリとエナジー・ドーパントに詰め寄ったその時
…、

ブオオオオオオオオオン…!!!

どこからともなくバイク音が響いた。
その音を聞き、全員が後ろを振り返る。
そこにいたのは……、

「仮面ライダーダブル……仮面ライダーアクセル……!!」

「よう！」

『助けに来たよ?』

「さあ…振り切るぜ!!」

左右で色の違うライダー…仮面ライダーダブルと、自身がバイクに変形する能力を持ったライダー…仮面ライダーアクセルだった。彼らはバイクから降りると、ゆっくりとダークキバの下へ。

「仮面ライダー……っていう事は味方か…?」

『助けに来た』……と言っているからきつとそうなのだろう。
そう言えば伊達が『28の世界が融合した』と言っていたから、恐らくは別世界の仮面ライダー。
彼らはエナジー・ドーパントとダークキバの間まで歩み寄ると、拳

を振り上げ…、

「ぐあっ!?!」

ダークキバを殴り飛ばした。

「お、オトヤ君!!」

「な…なんで…!?!」

驚くダークキバとアインハルト…その隣ではリオとコロナが悲しそうな表情をし、ヴィヴィオは怒りに震えていた。

そんな彼らに構わずにダブルは素手で、アクセルはエンジンブレードでダークキバを攻撃。

何度も何度も殴り、蹴り、斬り、ダークキバを圧倒的実力差で追い詰める。

倒れてもダブルに引き起こされ、間髪入れずにアクセルにボディを切裂かれ…ダークキバは変身こそ解けないもののすでに満足に戦える状態では無かった。

地面に叩きつけられた彼の下にアインハルトが駆け寄り、必死に呼びかける。

「オトヤ君!! オトヤくうん!!!! しっかりして下さい!!! 返事して!!!!」

「ぐう……がはっ……」

「何で……どうして仮面ライダーが……!?」

彼女には理解できなかった。

【キバの世界】では古来より仮面ライダーは『正義の象徴』と言われ、魔力を使用しない質量兵器で唯一合法で認められている存在。そのライダーが……まさかライダーに襲い掛かるとは……彼女で無くとも、誰でも驚くだろう。

するとヴィヴィオが拳を握り締め、ダブルとアクセルを指差した。

「ダメだよ……仮面ライダーは全員……大ショッカーの仲間なんだから……!!」

「……え？」

今のは聞き違いだろうか？

仮面ライダーが大ショッカーの仲間……いや、そんな事はいえない。

ありえるはずは無い。

しかしそんなアインハルトの希望をぶち壊すように、ヴィヴィオは更に続けた。

「そうだよ！！全部の平成ライダー達は全員大ショッカーの手先なんだよ！！！！対抗する為に昭和ライダー達が頑張ってくれたけど…数で勝てなくて…だから、生き残ってるライダーは全員敵なの！！ライダーなんか信じない…私達の仲間を沢山殺した奴等なんか！！！！」

『ライダーが敵』

それはこのどうしようも無い世界でかすかにあった希望を全て打ち壊す言葉だった。

『嘘』だと言いついて聞かせたいが、それが真実である事は目の前に立ち塞ぐダブルとアクセルが証明している。

呆然とするアインハルトの腕をダブルが掴み、両腕を後ろに回して動きを封じた。

「きゃっ!?!」

「あ…アイン…！！！」

「悪いなあ坊主…こんなこたあやりたくねえが…これも大ショッカーの命令でな？」

『君の事はすでに検索済みさ。彼女に惚れているんだろ？残念だったね…その想いは永遠に届く事は無いよ。』

「絶望がお前達のゴールだ。」

「き……さまらあ……っ！！」

ダブルとアクセルが…仮面ライダーがこんな卑怯なマネをするなんて……しかしそれでも抵抗しないわけにはいかない。

何とか右手を動かしてアインハルトへと手を伸ばすが、すぐにアクセルに踏まれて身動きが取れなくなる。

『絶体絶命』とはまさにこの事だろう。

仮面の下で悔しさに悶えながら、ダークキバはギリギリと拳を握った……………その時だった。

プ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オン！！！！！！！！

突然空が破れ：そこから一台の電車が降りて来た。桃の様な先頭車両に近未来的な外見：これは：

「デ……ン、ライナ……！？」

時の列車デンライナーに間違いは無かった。
デンライナーはダブル達とダークキバの間に入ると、停車。
扉が開き…そこから見覚えの無い金髪の男と紺色の怪人が姿を見せた。

「君!! 大丈夫か!？」

『酷い怪我だ…それに、ダブルとアクセルまで大ショッカーの魔の手…!!』

良く見ると男の腰には良太郎が持っていた電王のベルトと同じ物が巻かれてる。
彼はダークキバに肩を貸して担ぎ上げると、その辺の瓦礫の上に座らせた。
ポケットから電王と同じパスを取り出すと、ダブルとアクセルの前に立つ。

「その子を離せ!!」

「ああ? んだお前…?」

『邪魔すると言うのなら、容赦はしないよ?』

「……上等だよ…テディ!!」

『了解だ幸太郎!!』

男…幸太郎はパスを構えると、ダークキバの前に立ち、叫んだ。

「変身!」

『ストライク、フォーム』

パスをベルトにセタッチすると、幸太郎の体を紺色のスーツが包み込んだ。

その上からオーラスキンアーマーが装着される…良太郎の変身した時よりも鋭い形状のアーマーだ。

最後に紺色の怪人…テディが専用剣『マチェーテディ』に変身すると、彼はそれを掴む。

「お前…?」

「俺は電王。仮面ライダー…NEW電王。」

NEW電王…どうやらそれがこのライダーの名前らしい。

確かに良太郎の変身した電王よりも未来的な姿をしている為、『NEW』の名に相応しい。

何度か指をパチパチと鳴らすと、NEW電王はゆっくりと…まずはアクセルへと歩み寄った。

そして、勢い良くマチェーテディを振り下げてアクセルを切り倒し、そのままその奥にいるダブルへと蹴りかかる。

勢い余ってダブルはアインハルトを離してしまい、それをよろよろと立ち上がったダークキバが抱き寄せ、ザンバットソードをダブル達に向けてN E W電王の隣に並んだ。

「あ…アンタは…？」

「俺もライダー。アンタは…ダークキバだっけ？安心して、俺はあんた達の味方だからさ。」

これで形勢逆転。

どうやらこのN E W電王という仮面ライダー、戦闘経験豊富らしく一目見ただけでダブル達よりも強いのがわかる。

アインハルトも戦えるので、実質3対1…これなら勝てる。

そう思っていると…、

「何をしているダブル、アクセル。」

「お？なんだ、まーだいやがったのか。」

今度はダークキバ達の後ろから新たな仮面ライダーが3人現れた。1人は機械的なアーマーを纏い、1人は紫色の装甲に恐竜の様な尻尾と翼を持ち、1人は宇宙飛行士の様な姿をしている。

彼らは…

「オーズ…バース…フォーゼ…!?!」

仮面ライダーオーズ プティラコンボ、仮面ライダーバース、仮面ライダーフォーゼ ベースステイツの3人。
数いる平成ライダー達の中でも最新のライダー達であり、実力も未知数。

一気に3人も増えた事で、状況は更に最悪になってしまった。

「そんな…まだ大ショッカーのライダー達が…!?!」

「……ッ…!」

せめてアインハルト達だけでも守る。

ダークキバは抱き寄せているアインハルトの肩をギュッと握り締め、左腕のネオロットを構えた。

この状況を打破する方法は一つ……ダークキバ最強形態。

アレを使えば確かに現状は切り抜けられるだろうが…理性を保っていられるか分からない…。

「ダメですよオトヤ君…あれは…。」

「わかってる……わかってるけど……でも…!!」

ダークキバの複眼が白く光り、ネオロットが青く光った。

アインハルトが必死に止めようとするが、ダークキバはそれを聞こうとはしない。

「何…それ、そんなにヤバイの？」

「あ、はい……あれだけは絶対に…！」

良く見ると、アインハルトの手がガタガタと震えていた。

一体何が起こるのか…NEW電王には想像もつかない。

しかし白い目のダークキバには何の感情も籠もって無い様に見える、初見でも恐怖を覚える程。

このまま彼を最強形態にしてもいいのか…そう思ったその時、何故か急にライダー達が撤退を始めた。

どうやらバース達はダブル達を連れ戻しに來ただけの様だ。

オーズだけは……『紫のメダル』の力で暴走している様でダークキバ達に襲い掛かろうとしているが。

「ウオオオオオオオオオ！！！！クロス！！！！クロスッ！！！！ガアアアアアアア！！！！！！！！！！」

「落ち着けオーズ、もうすぐ日没だ。そろそろ本部に戻るぞ。」

バースに諭されてオーズは大人しくなり、バイクに乗って立ち去っていく大ショッカーのライダー達。

それを見て一気に力が抜けたのかダークキバは変身が解けて膝をつき、はあはあと息を切らす。

それにあわせてNEW電王も変身を解除し、アインハルトと一緒に倒れこむオトヤを抱きかかえた。

「お、おい！しっかりしろ！！ダークキバ…！」

「酷い怪我…！！オトヤ君…！！オトヤ君…！！」

「騒がしいねえ…。」

「「!？」」

2人がオトヤに呼びかけていると、今度は目の前にまた新たな人物が。

いや、新たな人物……と言うわけでも無い、彼は先程ディエンドに変身していた青年だ。

「そんな寒いところで話なんてしてないで、もっと暖かい場所の話そうよ？」

くいッと親指を立てると、ディエンドの青年は隣にあるデンライナ―を指差す。

ニヤリと笑い、オトヤ達に対してこう言い放った。

「コイツの中で……ゆっくりお茶でも飲みながらね？」

4部：敵はライダー（後書き）

感想とか色々待ってます。

5部：真相

「なによコレ……!?!」

大ショッカーの仮面ライダーによる人類殲滅作戦の執行から約20分後：なのはと伊達の2人は偵察から戻り、アジトへと入って来た。そこで見たのは、山の様に積み上げられた仲間の死体とズタズタに引き裂かれたアジトの無残な姿。

鮮血を散らして真っ赤に染まった『我が家』に、彼女はただただ絶望して頭を抑えた。

こんな事があっていいのか……? そうだ……ヴィヴィオはどうしただろう……?

世界中で何よりも大切な我が子は一体どこに……?

「ヴィヴィオ……ヴィヴィオお!!」

必死に名前を呼ぶが、返事はない……それでもなのはは諦めずに娘の名を呼ぶ。

「ヴィヴィオ!! 返事をしてヴィヴィオ!! ヴィヴィオーー!!」
「!」

「な、なのちゃん……」

「ヴィヴィオ!! ヴィヴィオおおお!!……!! お願いだから……返事をしてえええええ!!……!! うわあああああん!!……!! うわああああああ!!……!!」

とうとう見つからず、なのははその場に座り込んで子供の様に泣き出してしまった。

あまりにも痛々しいその姿を見ていられず、伊達は1人でその辺を歩いて見る。

すると彼の目に薄い紫色の少女が瓦礫の下でもがいている姿が映り、急いでそちらへと向かった。

手に握ったバースバスターで瓦礫を弾き飛ばし、下でもがいている少女…ルーテシアを救出した。

「お、おい大丈夫か！？ルーちゃん！！」

「あ……だ、伊達さん…ええ、何とかね…。」

意識はあるが、少し朦朧としている。

だが怪我も酷いが命に別状は無さそうだ。

それでも心配なので伊達は急いでルーテシアに治療を施し、その間に彼女が見たこの悲惨な光景の正体を聞いた。

伊達達が去ったすぐ後に襲来した大ショッカーの怪人達。

それい対抗すべくあの少年…オトヤが謎の仮面ライダーに変身した事、更に彼がヴィヴィオ達を守った事。

その後ダブルとアクセルが出現し、オトヤの変身したライダーが敗れた事。

ルーテシアはそこで気を失い、目が覚めた時にはすでに全てが終わっていた為顛末は知らない。

だがあの様子からして勝ったという事は考えづらいだろう。

大事そうに形見は成さず持っていたトランクを抱きしめ、ルーテシアはなのはの方をチラリと見た。

怒りに震えたその顔は、まさに『悪魔』と表現するに相応しい。それほどまでに彼女は心の底から怒り震えていたのだ。

「……してやる…。」

「え?」

「殺してやる……殺してやる……!! 私達から平和とヴィヴィオを奪った憎き大ショッカー共……そして憎き仮面ライダー共全員……全員纏めてブチ殺してやる……!! 絶対に逃がさない!! 地の果てまで追いかけて、この身を捨ててでも……必ずあいつ等殺してやる……うううううううううう!!……!!」

それは彼女の心からの叫びだった。

もはやなのはの中にはヴィヴィオを奪った大ショッカーや仮面ライダー達に対する『憎悪』と『殺意』しかない。

そんな彼女を見たルーテシアは、大事そうに抱えていたトランクを彼女に渡した。

最初不思議そうな表情でなのはそれを受け取ったが、すぐに怒りの表情に変わり、それを地面に叩きつけた。

「ルーテシア……なんなのよこれは……!!」

「……『バスター』です。」

トランクの中身……それは一本のベルトと一丁の銃、それとフェッス

ルがいくつか。

間違いなく、『仮面ライダーへの変身ツール』だった。
こんな物を見せられて、なのはが怒らないわけが無い。

それでもルーテシアはそれを彼女に突きつけた。

「私が開発した対大ショッカー用兵器：仮面ライダーバスター：これを使えば魔法が通用しないライダー相手でも互角以上に渡り合えるはずです。」

「何：私にライダーになれっていうの：？ふざけないで！！！！誰があいつ等と同じ姿なんかに：！！！」

「今はそんな事言っている場合じゃ無いでしょう！？今優先すべきなのは私情じゃない：アナタほどの方ならわかるでしょう：！！？」

「ルーちゃんの言うとおりでござなのちゃん。本当にヴィヴィオちゃん達の仇うちてえってんなら：んな事言ってる場合じゃねえはずだ：！！」

2人に諭され、少しなのはは落ち着いたのか、肩の力を抜いてその場に座り込んだ。

ルーテシアの持つバスターへの変身ツールをしばらく見つめると、彼女はそれをもぎ取る様に奪い取り、すっと立ち上がった。

「わかったわ：：：やってやろうじゃ無い：：：大ショッカーも仮面ライダーも全部私がぶちのめす：この力で！！！！！！」

デンライナー内

オトヤとアインハルトの2人と、ヴィヴィオ、リオ、コロナの3人は幸太郎とその相棒のイマジン『デディ』に導かれ、デンライナーの中へとやって来た。

ここへ来るのはオトヤ達はこれで2回目、ヴィヴィオ達は初めて。デンライナーの中には以前と同じ様に良太郎の相棒である4人のイマジン通称『タロウズ』と客室乗務員のナオミ、ここの大ボスであるオーナーがいるが：前と決定的に違う所が2つある。

まず1つ：士と良太郎の姿がどこにも見当たらない。

普通ならトイレかどこか行ったのだろうと思うところだが、その予想は2つ目の相違点のおかげで消えうせる事となる。

2つ目の違い：全員の雰囲気だ。

いつも喧しいイマジン達や元気一杯のナオミが言葉を一言も発さずに、ただ座っているだけだ。

あのイマジン達がここまで静かになり：士と良太郎がいない：。

この2つに何らかの関係性があると見て間違い無いだろう。

『こっち』と幸太郎に言われてオトヤとアインハルトはデンライナー食堂の一席に座り、いよいよ幸太郎からこの時代に関して説明が始まった。

「まず自己紹介。俺は野上幸太郎。未来から来た良太郎爺ちゃんの孫で、仮面ライダーNEW電王。あ、『NEW』ってのは正式名称じゃ無くて爺ちゃんのと区別する為に使ってるから普通に『電王』でいいから。」

『私は幸太郎の契約イメージで、テディ。今回私と幸太郎はこの事態を收拾すべく、電王として未来からオーナーに呼ばれてやって来た。』

「あ：僕は登オトヤです。仮面ライダーダークキバです。」

「アインハルト・ストラトスと申します：こっちはデバイスのテイオです。」

『にゃあ！』

『私はダキバットだ。よろしく。』

これで一応は自己紹介終了。

おどおどしているリオとコロナ、不貞腐れているヴィヴィオの事は彼女等に代わって元の時代で彼女等を良く知るアインハルトが紹介した。

ディエンドに変身していた青年だけは自己紹介しようとはせず、腕を組んで壁に寄りかかっているだけだ。

「俺達がこの時代に呼ばれた理由……君達も見ての通り、歴史は大きく変わってしまった……。全ての世界の怪人達を統合した大組織『大ショッカー』が世界全土を支配してしまったんだ。」

『大ショッカーが独自の技術で開発した怪人『ショッカーネオ』：コイツだけでは本来何も起こらないはずだった。しかし、今から12年前：大ショッカーはなんらかの方法で『フェニックスネオ』のカードを入手し、その結果誕生した『ショッカーレジェンドルガ』：彼はその圧倒的すぎる力で当時の仮面ライダー：クウガを倒し、アギト、龍騎、ファイズと……その後に生まれた仮面ライダー達は全

て倒されてしまった。』

「『フェニックスネオ!?!?』」

「? 知ってるのか!?!?」

テディの言葉に、オトヤとアインハルトは思わず声を上げて驚いてしまった。

その後すぐにアインハルトは制服中のポケットをあさくり、何かを探す。

特に何も無い事を確認すると、彼女は力無く床に膝をついてしまった。

「……………無い…。」

『フェニックスネオ』…それは、ダークキバの持つ中でも最強の力を持ったネオカード。

その能力は『灼熱』…どんなものでも焼き尽くす虹色の業火を司る。そして…その強力すぎる力ゆえに…、

「アイン…?!?」

「……………無いです…カード…。」

アインハルトがオトヤに代わり管理していた。
それが今、無い。

大ショックが力をつけたのは12年前、使用したカードは『フェニックスネオ』、そして今手元にそのカードが無い。

となれば行き着く結論は1つ：以前過去に行った時、落とした。

多分、爆風が起きた時に落としたのだろう。

つまり……、

この事態になったのはアインハルトのせい

という事になる。

あまりにも残酷な事実には、アインハルトはガタガタと振るえ、目から恐怖の涙が流れ出す。

「そんな…私が……私のせいで……!!」

「何か知ってるのかアインハルト？知ってるなら教えてくれないか？」

「あ、アインのせいじゃ無いよ！落としたのなんて偶然じゃ無いか！」

「でも…でも！」

「悪いのは全部大ショックなんだ!! 幸太郎、この後どうするの

!？」

「あ、ああ……今から12年前に行って歴史を修復する。」

「僕も行くよ! 1人よりも2人の方がいいでしょ!？」

「いや、歴史を修復できるのは電王だけだ。俺は特異点って言って、歴史の改変による影響を受けない。俺なら歴史に介入しても何の問題も無い。悪いけど……君達は……」

「良いんじゃないかな？」

そう言ってきたのは、今まで黙っていた男……ディエンドの青年だった。

彼はオトヤと幸太郎の間に割ってはいると、幸太郎がまだ手をつけていない『普通のコーヒー（アインハルトが淹れたヤツ）』を飲み干し、カップをモモタロスに投げつける。
とりあえずナイスキャッチ。

「いいじゃん、来なよ。」

「い、いいんですか!？」

「おい、勝手に決めるな。」

「なんだい？文句あるのかなお孫君？」

にらみ合う青年と幸太郎。

幸太郎が青年を見る目は、どこか憎憎しげだった。

「幸太郎…この人の事知ってるの？」

「ああ：仮面ライダーディエンド、海東大樹。世界を股に駆けて『宝』と定めた物を奪っていく：言うなれば泥棒さ。ライダー界では少し名が知れててな、かつてはこのデンライナーも奪おうとしたとんでもないヤツさ。」

「フフ、お褒めに預かり光栄だね。」

「褒めてない！！」

この青年：海東は泥棒。

オトヤには信じられなかった、最初見た感じではそんな様な人では無かったが…？

だが本人も本人なりに認めているので、これが事実である事は間違いない様だ。

「電王しか歴史は修復出来ない！！キバが介入したら、それこそ歴史がどうなるかわからないんだ！」

「でもこうなった責任はこのダークキバと霸王っ子君にあるんだ。罪はきっちりと償わないとね？」

「ぐう…！だ、だいたいお前みたいな奴がオトヤ達を助けたって言うのが信用出来ない！何を企んでるんだ！？」

「別に？12年前でどうしても手に入れたいお宝があるんだ。そいつを頂ければすぐに退散するよ。」

「ッ…やっぱり…！！ダメだ！！今すぐ降りろ！！」

「幸太郎、少し落ち着んだ。」

「そうだよ？美しく無いよ？」

「テディとウラタロスに諭されて幸太郎は少し落ち着いたのか、『悪い』と言って席に座った。」

「相変わらず海東は飄々としており、アインハルトが抱えていたティオを何故か持っていた猫じゃらしであやしている。」

「そしてオトヤとダキバットには懐かないのに海東には懐くティオ…。」

「そう言えばあと1つ…まだ明らかになっていない問題がある。」

「何故仮面ライダー達が敵になっているのか？」

「幸太郎とテディもその理由はわからないらしく、口を噤んでいるが…そこで再び海東が口を開いた。」

「それは僕が説明しよう。『大ショッカー』の目的はただ1つ…世界征服さ。『世界』というお宝を手に入れる目的において、彼らが最も邪険に思う存在…それは何でしょうダークキバ君？」

「えっ？えっと…か、仮面ライダーですか？」

「ザッツライト、その通り。仮面ライダー…それは世界征服という

目的を持つ大ショッカーにとって、一番迷惑な存在なんだよ。彼らの力はまさに『脅威』、でも：言い換えればそれは『とても強い力』という事になる。そこで：大ショッカーが用意したのがショッカーレジェンドルガさ。」

ショッカーレジェンドルガは『フェニックス』のカードを使って生まれた大ショッカー最強の怪人。

元々フェニックスネオはダークキバが戦った中で最も強かったネオファンガイアだ。

もしもそれが大ショッカーによって改造され、レジェンドルガ以上の力を手にしてしまったなら……？

「ショッカーレジェンドルガはその驚異的な力でまず同時にライダー……クウガを倒し、アギト、龍騎、ファイズと：平成の世を守っていたライダー……通称『平成ライダー』達を次々に潰して行った。特にファズ以降に生まれた仮面ライダー達は誕生した時点ですでに大ショッカーの手中にある……たとえそれが『世界の破壊者』だろうが『欲望の王』だろうが、問答無用でね？」

遥訳すれば、『クウガ〜フォーゼまでの全ライダーは皆敵』……という事だ。

しかもヴィヴィオの話では洗脳されてなかった昭和ライダー達すでに倒されており、戦う術は無い。

幸太郎が味方でいられるのは時間改変による影響を受けない電王だから……だが、そうするとまだまだ疑問が増える。

「でも…だったら良太郎さんは？あの人も電王だから大ショッカーじゃ無いんじゃない？」

「ああ…あの野郎共…良太郎を時間変えて洗脳出来ないってわかると、直接洗脳しやがったんだよ!!」

「俺は間一髪でオーナーに救われたから難を逃れているんだ。」

何でもモモタロスの話によると、電王を洗脳する為に大ショッカーが一度攻めてきたそうだ。

奴等は電王に変身する良太郎は勿論、そのフォームチェンジに必要なイマジン達も洗脳しようとしたが…その時良太郎が単独変身用最強形態である『ライナーフォーム』に変身し、皆を救ったらしい。

しかしその代償として電王は敗れ、そのまま大ショッカーに連れ去られて以後消息不明。

なるほど、モモタロス達のイライラの原因はそれだったのか…と、オトヤもアインハルトも胸の前で拳を握った。

「じゃあ海東さんは？」

「こいつ等のおかげさ。」

次はデイエンドこと海東。

電王でも無い彼が何故正気でいられるのか…その理由を明かすため、彼は懐から8枚のカードを取り出した。

『G4』、『リュウガ』、『オーガ』、『グレイブ』、『歌舞鬼』、『コーカサス』、『アーク』、『スカル』と書かれたそのカードをテーブルに並べると、彼は再び腕を組む。

「彼らは通称『ダークライダー』、その名の通り『悪のライダー』

達さ。元々悪の力を持つライダーは大ショッカーによる『悪の歴史の改変』の影響を受けない。簡単に言えば悪い方向限定の特異点みたいなものだね。そしてディエンドは正義のライダーの力を受け継ぐディケイドとは対象的に、そのダークライダーの力を受け継ぐライダー…彼らの加護のおかげで僕はこうしていられるってわけさ。君も同じさ、登オトヤ。」

「え？僕もですか？」

「君の変身するキバの正式名称は『仮面ライダーダークキバ』、【キバの世界】のダークライダーさ。元々『悪人』なんだから、今更悪になn」

「…そう言う言い方無いんじゃないんですか…？」

「？」

反論したのはアインハルト。

彼女は海東に詰め寄ると、少し怒ったような表情で彼に言った。

「オトヤ君は悪人なんかじゃありません！何度も私達を助けてくれました！！訂正してください！！」

「訂正するも何も、事実なんだから仕方無いじゃ無いか？それに…今はそんな偉そうな事言えた立場かな覇王っ子君？」

「うっ…。」

「まっ、何にせよ僕等が大ショックカーの手に堕ちる事が無いのは事実だ。つまり…、」

「戦えるのは…僕等しかない…って事ですか？」

「…だ、だけど歴史の修正は電王にしか出来ない！！」

「ディエンドなら歴史に介入しても問題は無い。それに…僕にはどうしても過去に行かないといけない理由があるんだ。それならついでにオトや達も…って事で♪」

「ふざけるな！！」

言い争う幸太郎と海東。

一体、海東は何故そこまでして過去へ行きたいのか？

幸太郎に任せればいいのに…一緒に行かないと不安な事があるのか？

幸太郎が海東の胸倉を掴んだ時、彼のポケットから1枚の写真が落ちてきた。

それに気付いたアインハルトは写真を拾い上げ、それを見る。

映っているのは海東の他に…、

「これ…士さん？それにこの人達…？」

ディケイドの変身する士、それと活発で優しそうな顔をした青年と、黒い長髪がとても綺麗な女性。

どこかの写真館で撮ったと思われる4人の写真…アインハルトに続き、今度はオトややモモタロス、ウラタロスも覗き込んできた。

「あー！ー！ー！！！！コイツ…あの時俺の事蹴りやがったライダー野郎！！！」

「この人が映ってる写真家にあるよ？確か小さい頃の父さんと一緒に映ってた。」

「あれ？これクウガじゃ無い？ほら、前に先輩が色々と迷惑かけた…。」

「俺かけたんじゃないやねえ！！俺が掛けられたんだ！！！」

クウガ？

確か仮面ライダークウガは大シヨッカーに最初に倒されたライダー。それに士ことディケイド…彼も大シヨッカーにより倒されている。笑っている4人の写真…倒されたクウガとディケイド…海東がどうしても過去に行きたい理由…。

バラバラで見れば繋がり無い様な単語が次々に噛み合い、1つの結論が生まれた。

「返したまえ。」

「あの…もしかして海東さんが過去に行っても手に入れない『お宝』って…。」

「…………。」

「仲間…ですか？だから私達を助けてデンライナーに乗り込もうと…。」

「わかった様な口を聞かないでくれないか!!??」

突然大声を上げ、海東はディエンドライバーをアインハルトへと突きつけた。

彼女が短く悲鳴をあげると同時にオトヤがダキバットからザンバットソードだけ出してもらい、それを海東の首元に突きつける。

海東はオトヤとアインハルトを交互に見ると、そのままゆっくりとディエンドライバーを下に降ろした。

彼が銃を完全に降ろすと、オトヤもザンバットソードを下ろす。

「……………そう言う事か……わかった、海東。お前とオトヤ達と一緒に連れてく事を許可するよ。ただし、余計な真似だけは絶対に止めてくれよ。」

「……………わかってるさ。」

これで幸太郎から正式に許可が出た。

どうやらオーナーは最初からこうなる事がわかっていたらしく、満足顔でステッキをクルクルと回す。

過去に行く事が決まると、今度は今まで黙っていたリオとコロナがオドオドと口を開いた。

「歴史が修復されれば…大ショックはいなくなるの?」

「ああ、正しい歴史では仮面ライダーが倒してしまったからね。」

「じゃあ、私達普通に暮らせるの？もういつ襲ってくるかわからない恐怖に怯えなくていいの！？」

「勿論だ。」

「「やったー！」」

「何で信じるの2人とも！！！」

そう叫んだのはヴィヴィオだった。

どうやら彼女はデディが2人に言った事が信じられないらしく、地団駄を踏みながらリオとコロナに言う。

「こいつ等仮面ライダーなんだよ！？私達の敵なんだよ！？忘れたの！？リオやコロナのパパとママも皆仮面ライダーに殺されたんだよ！？そんな奴等の言う事なんで信じるの！？私にはわかんないよ2人とも！！！！」

リオとコロナとは和解できたが…ヴィヴィオと和解するのはまだまだ難しそうだ。

何せ彼女は『あの』なのはの娘だ。

本来の歴史では2人とも平和的で良く笑う人達だったが、こっちの歴史では2人とも人を簡単に信じられないぐらい心が荒んでいる。目の前で何人も仲間が殺されている光景を見ているので無理も無いが、それでも本来の彼女とあまりにも違いすぎるその態度に、見ているオトヤもアインハルトも胸が痛くなった。

するとオトヤが先程海東に突きつけたザンバットソードを再び握り、ヴィヴィオの下へ。

何をするのかと思ったら、彼はザンバットソードの刃にデンライナ―食堂車のテーブルクロスを巻き付け、ヴィヴィオに手渡した。

「な…何…？」

「少しの間、預かってってくれるかな？」

「え？」

「オトヤ君！？何を…それは…。」

「アインごめん、ちょっと黙ってて。…君が僕の事を信用してくれるまでの間。僕が君達を裏切る様な真似をせず…最後まで君達の味方であり続けるって事が確信できたら、この剣を返して欲しい。それまでの間預かっててくれないかな？」

「……。」

「この剣は僕が父さんから貰った大切な物なんだ。これが無いと戦いは一気に厳しくなるし、険しいものになる。僕を信じてくれたんなら、この剣を僕に渡して。」

「……アナタが裏切る様な事をしたり、最後まで信じる事が出来な

かったら…?」

「その剣で僕を斬るなり、そのまま見殺しにするなり好きにすればいいさ。だから…、」

ニコツと笑い、オトやはザンバットソードをヴィヴィオの手に収めた。

彼女の小さい体には大きすぎる剣だが…剣の重さとはまた別の重さがあった。

ヴィヴィオはそれを受け取ると、少しの間黙り込み…オトヤやアインハルトがジツと見ている事に気が付くとハツとなって剣をもぎ取るように奪った。

「す、少しでも怪しいと思ったらすぐにでも殺してやる!! それまでは…預かつとく…。」

「うん、頼むよヴィヴィオ。じゃあ幸太郎、いこうk、」

「『行こうか』じゃ無いですよもう!! 何考えてるんですかアナタは!?! 剣渡してしまつて…これじゃ丸腰じゃ無いですか!?!」

「まだカードもフェッスルもあるし、いざとなったら見よう見まねのストライクアーツもあるし、大丈夫だよ。」

「そういう問題では…アナタって人は本当に…もう慣れましたけど…。」

何かアインハルトが心の底から脱力しきっているが、特に気にしない。

ともかく、これで本当に出発する準備は出来た。

海東、幸太郎、そしてオトヤ。

3人の仮面ライダー達を乗せた時の列車は、オーナーの合図と共に再び12年前へ向けて動き始めた。

「それでは、最初に行った12年前の…さらに1分前へ…レッツラ、
ゴッう。」

6部：助っ人

現代：アジト跡

あれから約半日：再び大ショッカー達が攻めてきた。

しかも今度は怪人では無く、大ショッカー選りすぐりのライダー部隊。

行動隊長であるクウガとバースを筆頭に、大勢の仮面ライダーが攻め込んできたのだ。

クウガは最強形態であるアルティメットフォーム（黒目）、彼の部隊にはアギトやカブトといった実力派のライダーが揃っており、バースの部隊にはフォーゼやブレイド、オーズなどの特殊能力を駆使するライダーが勢ぞろい。

彼らを援護する様にポツポツと怪人や戦闘員の姿が見れるが：それが目立たないぐらいライダーばかりだった。

それに対抗するのは、数でも力でも圧倒的に負けている解放軍：いや、魔導士達。

リーダーである高町なのははすでにレイジングハートを展開し、更に自分の追加装備『フォートレス』を装備しており、殺気立った目でライダー達を睨みつける。

変わり果ててしまった元親友に不安を隠せないフェイトとはやて：そして、伊達。

伊達に関してはなのはも心配だが：もう一つ不安要素が。目の前のライダー：：：オーズとバース。

伊達は元々彼らと同じ『オーズの世界』の住人だ、つまりこの2人は彼の友人：。

「火野：：：後藤ちゃん：：：。」

「？ ……貴様、どこかで見た事あるな…？何者だ？」

「…後藤ちゃん俺だ！！伊達だ！！覚えてんだろ！？火野！！お前…世界中の人達に手を伸ばすんじゃ無かったのかよ！？おい！！2人とも！！！！」

ババババババババババババン！！！！！！

彼の必死の呼びかけを遮り、バースが彼の足元を撃った。

幸い伊達自身には一発も当たっていないが、それはバースがわざと外したから。

これは警告なのだ…バースからの…いや、『大ショッカー』からの…。

戦うしかない…そう思い、伊達も渋々バースバスターを握る。

すると、彼の前になのはが姿を出し、彼を含む仲間達全員を下がらせた。

「な…なのちゃん…？」

「明…フェイト達を連れて下がちなさい…ライダーは…、」

そう言うのと、なのはは腰に一本のベルトを巻きつけた。

バスターバックル…更にレイジングハートを捨て、彼女はバスタードライバーを構える。

腰からフェッスルを抜き取ると、それをバスタードライバーに挿入し…、

『バスターフェッスル セット』

「私が1人残らずぶっ殺す!!!!!! 変身!!!!!!」

引き金を弾いた。

『バスターモード トランスフォーム』

12年前…、

汽笛の音と共に、デンライナーは再びこの時代を訪れた。

オーナーの宣言通り、やって来たのは最初訪れた時間の1分前。

1分前でも過去は過去…まだ『こっちの』デンライナーがやって来るまで少し時間がある。

士達が乗るデンライナーが来る前にオトヤ、海東、幸太郎&少女ズはデンライナーを降り、こっちのデンライナーが停まる位置から死角になる場所へ。

死角に隠れ終わると同時に士、良太郎を乗せたデンライナーが空か

ら姿を見せ、待ってましたと言わんばかりにこの時代のアインハルト（赤ん坊）からモールイマジンが出現した。

「うわぁ…登場の仕方グロイなぁ…アイン？」

「……………」

『そっとしておいてやれオトヤ、アイン嬢も辛いのだ。』

確かに、最初にこの時代に来た理由も、2回目に来た理由もアインハルトだ。

一応デンライナーの中では明るく振舞おうとしていたが、実際に来てみるとやはり辛さが違う。

しかし彼女はオトヤが自分の事を心配してくれていると気付くと、ぎこちない笑顔を作って彼に『心配無い』と言った。

あまりにも痛々しすぎて、オトヤはそれ以降彼女に話しかけず。

仕方ないので彼は目の前で今まさに繰り広げられているディケイドと電王の戦いを見る事に。

海東がギリギリと拳を握っている事には、隣にいたアインハルトだけが気付いた。

「……………！！」

「あ…………あの、海東さん…？」

「…なんだい霸王っ子君？」

「頑張っ……………下さいね…？」

その言葉に、海東はキョトンとしてしまった。

この子は自分も辛いはずなのに……彼はプツと笑うと、アインハルトの頭に手を置き…、

「お子ちゃまに心配されるようじゃ…僕もまだまだって所かな？」

「なっ！？お…お子ちゃまって…！わ、私もう中学生ですよ…！」

「僕にとっちゃまだまだお子様だね？…元氣出たかい？」

「あ…。」

海東がわざと気の立つ事を言っって自分の元氣付けようとしてくれた事に気付くのに、そんなに時間は掛からなかった。

どうやら根は優しい人の様だ。

そうこうしているとディケイドと電王によりモールイマジンが撃破され、爆風が発生。

その時に向こうのアインハルトのポケットからカードが一枚吹き飛ばされ、そこで戦闘は終了。

向こうのデンライナーが立ち去った事を確認すると、幸太郎と海東、テディが一齐に出て行きカードを確保。

これで歴史の修正は完了だ。

「よしっ、これでミッション完了だなテディ。」

「ああ。すぐにデンライナーに戻ろう幸太郎！」

「……………いや、まだだ。」

「「え？」」

1人だけ、浮かない顔をする海東はディエンドライバーを誰もいない方向へと構えた。

すると…そこから徐々に人影が見えてき、その姿が明らかになってくる。

1人ではない…相当な数がいる…。

大ショッカー戦闘員達だ。

そして、それを引き連れている黒い鎧を被った1人の男…。

「ほう？これはこれは……………ネズミが5匹も…？」

「…ブラック将軍か…。」

『ブラック将軍』…大ショッカーの幹部にして、歴史を変えた重要人物。

何故なら彼がフェニックスネオのカードを回収し、ショットカーレジェンドルガを作った張本人である死神博士に渡したからだ。

彼がアインハルトの落としたフェニックスネオを拾うかどうかで、歴史は大きく変わってくる。

ブラック将軍が今回ここに来たのは大ショットカーがネオカードの気配を感知し、派遣されたから。

つまり元々このカードを奪う為に来たのだ。

「このカード……絶対に前等には渡さない……!!」

「悪いけど、このお宝は僕が貰うよ？ 君達には……似合わない。」

『カメンライド』

幸太郎はデンオウベルトを腰に巻き付け、海東はディエンドライバーにカードを挿入。

パスと銃をそれぞれ構えると、2人は同時に叫んだ。

「変身!!」

『ストライク、フォーム』

『ディエンド』

電子音が鳴り響くと同時に、2人の体は強化アーマーに包まれる。

幸太郎は紺色のスーツにオーラアーマーを纏い、仮面ライダーNEW電王へ。

海東は黒いスーツにライドプレートを纏うと全身がシアンに染まり、仮面ライダーディエンドへ。

2人の仮面ライダーは剣と銃を構え、ブラック將軍に向かい合った。

「ほう？クウガ以外に仮面ライダーがいたとはな？」

「仮面ライダー電王、俺は最初っからクライマックス…ってね？」

「俺の台詞取るんじゃないっ！」

戦いが始まると聞き、デンライナーからモモタロスも降りてきた。ディエンドはディエンドライバーを、NEW電王はマチェーデディを、モモタロスはモモタロスオードを構えると、ブラック將軍へ一斉に襲い掛かった。

だがブラック將軍は老人とは思え無い程の俊敏な動きでディエンド達の攻撃をかわしていき、戦闘員達へ指示。

すると大ショッカー戦闘員達がディエンドやNEW電王の腕、脚、体を雁字搦めにして動きを封じ、ゆっくりと近付いてきたブラック將軍がNEW電王の持つフェニックスネオのカードを奪い取った。これで彼らはもう用済み、戦闘員達はNEW電王達を突き飛ばすとブラック將軍と共に退却準備。

「なっ…か、返せ！！」

「ふん…これさえあればライダーなど敵ではない…！退却するぞ！」

「「「イーーーーッ！！」」」

逃げようとするブラック將軍達。

それを追おうとするNEW電王達…しかし、そんな彼らに、更なる脅威が現れた。

プオオオオオオオオ………オオオオオオオ———ン!!!!!!!!!!

「何…っ!?!」

なんと…空からデンライナーと対を成すもう一つの時の列車…『ゼロライナー』が姿を現したのだ。

ゼロライナーはブラック將軍とNEW電王達を阻むように停車し、数秒すると再び発車。

それ自身は特別何かしたわけでは無い……ただ、そこに2人の仮面ライダーを残して行っただけ…。

「仮面ライダーディエンド、仮面ライダーNEW電王、大ショッカの命により…貴様等を破壊する。」

「じゃあ、始め様か？」

残ったライダーは2人…1人はマゼンタのボディに凶悪な瞳を持ったライダー。

もう1人は電王を強化したような姿をしたライダー。

「士…。」

「爺ちゃん…!?!」

「良太郎!!!!」

仮面ライダーディケイド激情態と仮面ライダー電王ライナーフォームに間違い無かった。

やはりこの2人も大ショッカーの魔の手に…わかってはいたが、実際に目の当たりにするとやはり胸を締め付けられるような感覚に襲われる…。

心配してオトヤとアインハルトが出てきたが、ディエンドが2人がディケイド達から見えない様に位置を変え、小声で唱えた。

「2人とも…: ヴィヴィオ達と一緒にブラック將軍を追うんだ…。」

「え…? で、でも…。」

「改変された歴史のヴィヴィオ達に戦う術は無い…君が守るんだ…それに、あのカードを大ショッカーに渡してはならない、絶対に…!!」

「……わかりました…: 行こう、アイン!」

「は、はい!」

ディケイド達にばれぬ様、オトヤとアインハルトはヴィヴィオ達を引き連れてブラック將軍を追う。

彼らを心配し、本当は電王LFを引き戻したい想いを堪えてウラタロス、キンタロス、リュウタロスもオトヤ達の下へ。

その間にオーナーとナオミを乗せたデンライナーは移動を始め、とうとうこの場に味方はNEW電王とディエンド、それとモモタロス

の3人だけになってしまった。
しかし彼らはそれで構わない。

この問題は…自分達でケリをつけなければならないからだ…。
モモタロスはデンライナーを降りる時にオーナーから預かったデン
オウベルトを腰に巻き付け、ライダーパスを構える。

「良太郎…：今、助けてやるからな…！！変身ッ！！」

『ソード、フォーム』

ベルトにパスをセタッチし、モモタロスは赤いオーラを纏う。

するとモモタロスは良太郎と違いプラットフォームを介さず、直接
『ソードフォーム』へと変身を遂げた。

デングァッシャーをソードモードに組み立てると、電王SFはNEW
電王とディエンドの隣に並んだ。

「ほお…：たった3人で俺と電王を相手にするつもりか？」

「ハハハ、僕等も舐められた物だね？」

「良太郎…：ぜつつつたいに連れ戻す…！！行くぜ幸太郎…！！
泥棒野郎…！！」

「おう…！！」

「その呼び方は気に入らないけど…：文句は後で言う事にするよ…！！」

電王SFの声を合図に、5人の仮面ライダーは一斉に走り出した。
まずは電王LF対電王SF&NEW電王。

3人とも剣を得意とするライダーだ…戦術は大体似るはず。

しかし、圧倒的に違うのが武器の差だ。

電王S Fのデンガッシャーは確かに万能武器だが形状を固定してしまえばただの剣。

NEW電王のマチエーテデイも威力が高く飛び道具にもなるが戦術は読みやすい。

それに対して電王L Fの持つデンカメンソードは電王の最強武器。

普段の良太郎からは想像もつかないぐらい華麗な動きで2人の電王の攻撃をかわしていくと、デンカメンソードで2人を斬りつけ、更に蹴り飛ばす。

『幸太郎!!何をやっているんだ!!』

「テデイ…悪い…少し調子悪いみたい…。」

「心配すんな天井!すくくぐに良太郎の奴元に戻して…オトや達追いかけるからよおおおおお!!!!!!」

起き上がり、電王S FはNEW電王のマチエーテデイを手にとって電王L F目掛けて走り出した。

スピードはS Fの方が上…対応出来ずに、電王L Fはその場で固まってしまう。

S Fのパワーとマチエーテデイのパワーを合わせれば確実にL Fを倒せる。

これで終わる…そう思って電王S Fはマチエーテデイを振り上げた。

だが…それはL Fに当たる寸前に、止められた。

別に電王L Fが止めたわけでも…デイケイドが止めたわけでも無い…。

電王S Fが自ら止めたのだ。

なぜならば目の前の相手は……、

「……りよ……良太郎……!!」

『モモタロス!?何をやっているんだ!?』

「うるせえ!!……やっぱ出来ねえよ……俺には……!!」

出来るわけが無い。

今まで共に戦ってきた仲間なのだ……こんな事、出来るはずが無いのだ。

しかし、その考えが電王SFの命取りとなった。

すぐさま電王SFは電王LFに殴り飛ばされ、NEW電王に激突。それにより2人とも変身が解けてしまい、地面にゴロゴロと転がる。一方でディケイドとディエンドの対決。

現在は2人とも『アタックライド ブラスト』でお互いを撃ち合い、互角の勝負を続けている。

いや、銃撃専門のディエンドの方が一本上手といって所だろう。

仮面の下でディケイドも苦い表情を浮かべ、ディケイドライバーに新たなカードを装填。

『アタックライド ランチャー』

電子音が鳴り響くと、ディケイドの足に仮面ライダーフォーゼ専用ユニットである『ランチャーレグ』が装着。

それでディエンドを撃ち彼の動きを封じると、続いて新たなカードを装填していく。

『アタックライド ドリルアーム クレーンアーム キャタピラレッグ』

3枚のカードの力を同時に纏い、ディケイドは仮面ライダーバース専用ユニット『CLAWS』を装備し、ディエンドに格闘戦を仕掛けてきた。

クレーンとドリルのコンボでディエンドを後ろの壁に張り付けにし、ディケイドは更に自身を強化していく。

『アタックライド ショベルアーム カッターウイング ブレストキャノン』

とうとうバースのユニットを完全装備し、ディケイドは『DCDバース・デイ』へと変身。

ブレストキャノンをディエンドに押し付けると、『ファイナルアタックライド』のカードをディケイド雷バーに押し当てた。

「くっ…っ…かさ…!!」

「終わりだ。死ね。」

『クロガネ!! マキシマムドライブ!!』

その時、突然ディケイドと電王LFが幸太郎とモモタロス、ディエンドから引き離された。

見ると、2人とも攻撃をしようとはしているが…何故か身動きが取れないでいる。

まるで見えない何か…例えば『重力』に押し潰されている様に。

更に、驚く3人の間の空間に亀裂が入り、そこから1人の仮面ライダーが姿を現した。

「大丈夫ですか？」

『ここは私達が何とかするよ!』

「…君は…?」

突如現れたライダー。

姿は仮面ライダージョーカーをベースに所々に黒と白の装甲が纏わり付き、体中に赤いラインが走っている。

特に目を引くのは頭の先から股にかけて中心に入っている鋼色のセントラルパーテーションで、まるで左右で別々の存在である様な感覚を与えている。

それに合わせる様にこのライダーからは少年と少女、2つの声が聞こえ…特に少女の声が聞こえる時は左目が点灯していた。

「ダメだ…土は僕が…くう…！」

『あーあー…ダメですよそんな体で無理したら。』

「今貴方達がやるべき事はダークキバ達を守り、歴史を元に戻す事のはずです。2人を取戻すのはそれからでも遅くは無い…行ってください。」

「へっ！だあれだか知んねえけど…確かにその通りだな…。行くぜ幸太郎、天井。」

「あ…ああ…。ありがとう！後は任せた！」

「…くっ！」

『アタックライド インビジブル』

ディエンドのカードの効果でその場から姿を消す一同。
その場には黒いライダーだけが取り残され、彼…いや、彼らはディケイドと電王に向き合い背中に抱えた剣を掴み取る。

「さてと……それじゃあ、面倒臭いから一気に片、つけようか操緒？」

『だね！それじゃ…行くよ〜トモ！』

現代

仮面ライダーバスター…その力は圧倒的だった。

瞬く間にバース、フォーゼ、ファイズ、ブレイド、響鬼、ダブルを取り押さえ、バスタードライバーで今度はアギトへと襲い掛かる。平成主役ライダー全員を1人で倒す勢いだ…彼女はフェッスルをバツクルにセットし、バスターウェポンを展開。

『ジェットフェッスル セット ジェット・イグニッション』

背中のアーマーが変形し、バスターの背にはまるで飛行機の羽の様な『ジェットウイング』が装備される。

それで煙を撒き散らしながら宙へと浮かぶと、また新たなフェッスルを使って装備を増やしていく。

『ブラスト ランチャー プロテクトフェッスル セット ブラスト・ランチャー・プロテクト・イグニッション』

それがオーズ プトティラコンボだと気付くには少し時間が掛かったようで：バスターはあっさりと押し倒されてしまった。
メダガブリューにセルメダルを6枚投入し、それをバズーカモードに変形させると、オーズはそれをバスターの胸元に押し当てた。

「ウガアアアアアアアアアア！！！！！！！！！」

「お、おい止めろ火野！！！！火野おおおおお！！！！！！！！」

『プット！ティラノ！ヒッサッ！！！』

伊達の叫びも虚しく、放たれる『ストレインドウム』

何せ0距離：当然、バスターにオーズの最強形態の最強必殺技を0距離から喰らって耐えられる程の耐久力は備わっておらず：大きな爆発を引き起こしてしまった。

煙が晴れる頃にはオーズが血だらけのなのはの髪を掴んで首下にアックスモードのメダガブリューを押し当てている姿が見え、伊達は必死に叫んだ。

「な：なのちゃああああああああん！！！！！！！！火野テメ：デメエなんて事をおおおおおおお！！！！！！！！」

思わず伊達はオーズにタックルを仕掛け、なのはを救出。

彼女の体を抱きかかえ、逃げようとするが：：：それを仮面ライダーキバ エンペラーフォームに阻まれた。

「その女をこっちに渡せ：さもなくば、斬る。」

「お前：：：よくもそんな口が聞けるな：！！この子はお前の！！！！」

「俺の…なんだ？」

ブンツとガルルセイバーを振り上げるキバ。

すると伊達の頬に赤い筋が一本入り、そこから血が少し滴り落ちる。オトヤとアインハルトから『キバは本来の時間軸でのなのはの夫』と聞いていただけに…伊達は心が引き裂かれる様な気持ちになった。実の夫婦でこんな殺し合いが出来るなんて考えられない…絶対、この2人を争わせてはいけない。

それは、あの時…オトヤ達とも誓ったから…。

伊達は拳をギギギと握り締めると、背負っていたミルク缶となのはを地面に降ろす。

ミルク缶から一本のベルトを取り出すと、伊達はそれを巻き付け、バースバスターをギュツと握り締めた。

「……………わりいね火野…後藤ちゃん…。俺、お前らの事助けたいんだけどさ……………同じくらい、こいつ等の事守りてえんだ…。だから…、」

ミルク缶から取り出したセルメダルを親指で弾くと、それを再び右手でキャッチし、腰のベルト…『プロトバースドライブ』へと装填した。

「ここは……………絶対に負けられない!!!!!!」

『カポーンッ!』

12年前

折角海東達が行かせてくれたのに……コレは予想外だった。
ブラック將軍を追っていたオトヤ達の前に、なんとまた新たに未来の大ショッカーが姿を見せたのだ。

今度は怪人だけなので割りと戦いやすいか……そう思って安心したのが間違いだった。

敵は『ダブルの世界』のミュージアムで、大量のマスカレイド・ドーパントに加え、Rナスカ・ドーパントやクレイドール・エクストリームまでいる。

その奥にはこの集団のリーダーと思わしき白服の男が淡白な顔でこちらを睨んでおり、とても不気味。

とりあえずアインハルトにヴィヴィオ達を下がらせ、オトヤはダキバットとイマジンズと共に並び立つ。

『ガブリ!!』

「…楽しんで通れそうな道じゃ無いな……行こう皆!!」

「お前達、僕に釣られてみる？」

「俺の強さに、お前が泣いた!!」

「お前等…倒すけど良いよね？答え聞かないけど？」

「変身！！！」

ダキバットを腰のベルトに取り付け、オトヤは仮面ライダーダークキバに姿を変えた。

変身すると同時に彼はすでにRナスカ・ドーパントへと接近戦を仕掛け、残りのイマジンズはクレイドール・エクストリームに。

マスカレイドはどうやらアインハルトだけでも何とかなりそうだ。

Rナスカは動きは俊敏だが、どうやら格闘技馴れはしていない様で戦いやすい。

クレイドール・エクストリームも確かに強いが大きいので攻撃が外れる事はまずありえない。

「くっ…この…！」

「一気に沈め！！ダキバット…絶滅行くぞ！！！」

『ウェイクアップ！！2！！』

Rナスカの剣をしゃがんで避けると、そのままダークキバはRナスカの顎を蹴り上げた。

宙へ浮かぶRナスカ目掛け…彼は上に向けて必殺キック『キングスバーストエンド』を叩き込む。

あえなく爆発して変身していたと思われる女性が落ちてくるとダークキバは彼女を地面にゆっくりと降ろした。

「…………。」

「「すごい……。」」

「かっこいいでしょ？あれが仮面ライダーなんです……どうですかヴィヴィオさん？」

「……。」

やはりヴィヴィオは何も答えない。

その間にイマジンズもクレイドル・エクストリームのメモリブレイクに成功したようで、4人は揃ってリーダー格の男に向けて構えた。

男は懐から自身のガイアメモリを取り出すと、それを鳴らして腰のベルトへと挿入。

『ユートピア！』

ゴゴゴと怪しげな音が鳴ると、徐々に男の姿は貴公子の様な姿の怪人……ユートピア・ドールパントへと変わった。

新たに出現したステッキを軽く振るうと、何故かウラタロスの体が宙へ浮き……、

「「いだっ!?!」」

リュウタロスにぶつかった。

「いたーい！亀ちゃん何すんのさー!」

「ごめんごめん……でも僕じゃないよ!?!」

「なにやっとなのや亀の地!?!」

「だから僕じゃ無いって!?!」

言い争っている間に、今度はキンタロスが持ち上がってウラタロスに激突。

続いてはダークキバがキンタロスに、リュウタロスがダークキバにという感じで次々とぶつかっていく。

これがユートピアの力……魔術的な力で相手を操る事が出来る。

何とか立ち上がり、ダークキバはユートピアに殴りかかるがすぐに止められ、いとも簡単に弾き返された。

今度はユートピアはヴィヴィオ達を守っているアインハルトを引き寄せると、彼女の首を掴んでまるで盾にする様に突きつけた。

「これでもうあなた方は抵抗出来ません。このまま引き返すのであればこの少女をお返しいたしますが……これ以上やると言うのなら彼女をこの場で理想郷に導いてあげましょう。」

「アイン!!! 貴様……彼女を離せ!!!」

「ダメです。もしも力尽くでやろうと言うならば……」

そこまで言うと、ユートピアは超能力でアインハルトの首をギリギリと締め付けた。

彼女はカハッ!と苦しそうに息を漏らし、ジダバタともがく。

「アイン!!!!!!」

「私の事は良いですから……早く……ぐううッ!!!!」

「随分と卑怯な手を使うんだな?…気に入らない…。」

その時、どこからか声がした。

と、思うと今度は上からコンバットナイフが飛来し、それに対応できなかったユートピアの手の甲に刺さる。

痛みのあまり思わず彼はアインハルトを離してしまい、彼女は急いでダークキバへと駆け寄った。

「アイン大丈夫!？」

「は…はい…あれは…？」

上を見上げてみると、何と建物の屋根の上に1人の男が立っていた。彼は下まで飛び降りると、ユートピアの手に刺さったナイフを抜き取り、ユートピアを蹴り飛ばす。

その男の顔を見た瞬間ユートピアの表情は余裕から焦りに変わり、思わず1歩2歩後ずさりしてしまった。

「お……お前は…!!」

「ダメだなあ…ぜんっぜんダメだ…。人質なんざ……邪道だ。『悪人』のする事じゃ無い…。」

「な…に…い…!？」

「さしずめお前は『悪人』っていうより『卑怯者』って感じだな…。ハハハ、笑える。教えてやるよ…俺が…。」

男の腰に、赤く光る物が見えた。

仮面ライダーダブルがつけていた物と同じデザインだがメモリスロットが片方しかないベルト…『ロストドライバー』だ。

『エターナル!』

「本当の『悪』って奴を…。」

男は鳴らしたガイアメモリをスロットに入れると…ニヤリと笑い、それを勢い良く倒した。

「大道…：克己い…！！！」

「変…身…！」

『エターナル！』

こうして現れたのは白い悪魔。

ダークキバと同じ『ダブルの世界』のダークライダーにして、世界一の『悪人』

揺らめくマントは、彼の心を映したかのように漆黒に染まっていた。

男…大道克己が変身したライダー、『永遠の悪魔^{エターナル}』はユートピアに向けてサムズダウンすると彼に言い渡す。

そう…、

「さあ…地獄を楽しみな…！！！」

死刑宣告を。

6部：助っ人（後書き）

次回からとうとう未知の領域（新規話）に突入だ！！！！

7部：ダークライダー

白き姿に黒いマントを羽織った『ダブルの世界』のダークライダー
：仮面ライダーエターナル。
かつて：自らの世界で大犯罪を起こし、街の人間達を絶望の底に陥
れ、そして…、

『そうだ：それが『死』だ。大道：克己…!!』
『久しぶりだなあ：『死ぬ』のは…。』

仮面ライダーダブル サイクロンジョーカーゴールドエクストリー
ムに処刑された悲劇の男。

消えていった昨日の代わりに明日を追い求め続けた結果、身も心も
『悪』に染まり切ってしまった存在だ。

それが今、オトヤ達を『卑怯者』であるユートピアから救い出し、
彼らの代わりに戦う様に立っている。

エターナルエッジを右手に持ち、マントをはためかせるエターナル。
ゴキゴキと首を鳴らすと、彼は少しずつユートピアに歩み寄り、少
しずつ加速。

段々スピードが着いて来るとその場で飛び上がり、ユートピアにパ
ンチを叩き込んだ。

苦痛的な声を上げるユートピア：しかしエターナルは止まらない。
パンチ、キック、パンチ、パンチ、キック…。

目にも止まらぬ猛攻撃がユートピアを正確に捉えていき、ついにユ
ートピアを殴り飛ばす事に成功。

「くう……だ……大道お……!!」

「どうした？その程度か大ショッカーっていののは？これなら地獄にいた方がまだ退屈しなかったぜ。」

「凄い……。」

この戦いを見ていたオトやは、もはやそれしか言葉が出なかった。同じライダー……それも同じダークライダーでここまで実力の差があるなんて……。

自分はイマジン3人と手を組んでも負けたのに……悔しさのあまり、彼は拳を握りしめた。

「お前、弱くなったな？」

「ま……まだだ……まだだあああああ……!!」

飛び上がるユートピア……必殺キックの構えと見て間違い無いだろう。しかし、それを見てもエターナルは余裕を崩さない……いや、寧ろ退屈していると言った感じにも見える。

フンッと鼻で笑うと、エターナルはロストドライバーからエターナルメモリを抜き取り、それをエターナルエッジに挿入した。

すぐさまエッジのスイッチを入れ、エッジをユートピアへと向ける。

『エターナル！マキシマムドライブ……!!』

「さあ……死神のパーティータイムだ……!!」

その言葉……それが放たれた瞬間、ユートピアは地面に落下。もがいていると体が光り、変身が解けて彼は元の人間の姿に。

エターナル…それはガイアメモリの王者。

一度マキシマムを発動させれば、他のメモリの効力を『永遠に』無効化させる事が出来る。

勝った…オトヤ達はそう思って胸を撫で下ろすが、エターナル当の本人はまだそう思っていない。

彼にとつての勝利とは、相手の息の根を完全に止めてこそ実現する。ユートピアだった男の頭を掴み上げると、男を宙に放り投げ…、

「なっ！？や、止めろ！！」

「死ねえ！！！」

バゴンッ！！

男の腹を蹴り飛ばした。

そのまま男は真っ直ぐに吹っ飛ばされ、近くの電柱に激突。

少しの間痙攣するとやがて全く動かなくなり、その瞬間、エターナルは『自分が勝った』という実感を得た。

あまりにも惨すぎる光景にイマジン達は啞然とし、アインハルトとリオとコロナはエターナルに恐怖し、ヴィヴィオはワナワナと振るえ、オトヤは絶句していた。

『あ…あの男…戦えない人間を…。』

「ひ…酷い…。」

「あ…あ、アンタなんて事するんだ！！」

さすがにコレにはオトヤも腹が立ち、エターナルへと詰め寄っている。

オトヤが近付いてくるのに気付くと彼はロストドライバーのスロットを元に戻してメモリを引き抜き変身解除。
中からは30歳過ぎぐらいの男が姿を見せた。

「何だ？何か問題でもあるのか？」

「当たり前だろ！？アンタ：あの人はもう戦えなかったんだ！！それを……殺すなんて……！！」

「別にお前等にとって何の損も無い。寧ろ得した方だろ？」

「損得の問題じゃない！！人間を殺したっていうところが問題なんだ！！いくら大ショッカーでも殺す事はないだろ！？それに生かしておけばアジトの場所だ、」

「奴はお前等を殺そうとした。そしてソイツは俺に敗れて俺に殺された：自然の摂理さ。お前、食物連鎖って知ってるか？弱い奴は強い奴のエサでしか無い……。それに、奴は人間じゃあ無い……。」

そう言って男はクイツと先程の死体を指差した。

なんと、死体がジュワジュワと音を立てて消滅している。
まるで元々そこに誰もいなかったかの様に……。

「何アレ……？」

「『NEVER』：生きる死体だ。ネクロオーバー技術によって甦った不死身の兵士。最も、ライダーの攻撃を喰らえば塵に還るがな。」

「それって…ぞ、ゾンビ…？」

ホラー系大嫌いなアインハルトの顔が真っ青にとりあえずコイツは無視して大丈夫。

「何なんだアンタ…？」

「大道克己、俺も『死体』だ。」

「何で僕等を助けてくれた…：…んです、か…？」

「気に入らないんだよ。『卑怯者』が『悪』を名乗るのがなあ。」

『卑怯者』と『悪』がどう違うのか？

アインハルトに聞いてみるが、彼女にもわからない様だ。

だが、彼は海東が言っていた洗脳されていない数少ないライダーの1人。

となれば…、

「あの…僕たちに力を貸してもらえませんか…？」

「あ？」

「僕達、未来から大ショッカーを倒す為にやってきたんです！未来じゃ人類が大ショッカーに支配されて、全ての仮面ライダーも敵

になってしまってるんです…だからこの時代で大ショッカーを倒さないと!!」

「……知るか。俺には関係無い話だ。」

「わ、私からもお願いします!!」

オトヤと共にアインハルトも男に克己に頼み込んできた。

しかし、克己にとって彼らに協力するメリットなど一つも無い。

殺意の籠もった目で克己はオトヤを睨み、ナイフを彼の首下に突きつけた。

ペロと舌なめずりをすると、克己は突きつけたナイフの刃をスッと立てる。

「いいかがき共？俺は確かにライダーだが、『正義の味方』じゃあ無い。大ショッカーは気にいらないが…正義の味方気でそんな連中に挑んでたった一つの命を粗末にする奴の方が…はるかに気に入らない。そんなに死にたいんならあ…俺が殺してやるよ？」

「「!!」」

克己がオトヤの首を切裂こうとしたのと同時にイマジン3人は克己にそれぞれの武器を向けた。

アインハルトも拳を構えるが、オトヤは克己に一切怯えず、自分に突きつけられたナイフの『刃』を握り締め、それを奪い取って克己に向ける。

「!!」

「どうしても…僕等に協力しないつもりですか…？」

「ああ、どうしてもだ。」

「なら、大シヨッカーに加わる気なんですか…?」

「……それもいいかもなあ?」

克己がそう言った瞬間、オトヤはナイフを躊躇無く克己に振り下ろす。

しかし彼は元々それを読んでいた様で、簡単にかわし、オトヤから一定の距離を取った。

「だったらアンタは僕等の敵だ!!この場で倒す!!これ以上大シヨッカーのライダーは増やさせない!!ダキバット!!」

『ガブリ!!』

ダキバットを手に噛ませて戦闘体制に入るオトヤ。

同時に克己もエターナルメモリを構え、ロストドライバーに手をかける。

沈黙する2人…やがて、その沈黙を克己が破った。

何と彼は、突然笑い出したのだ。

再びオトヤに近付くと、彼は突然オトヤの頭を掴み、笑いを止めた。

「気に入った。」

「は?」

「いい目をしてやがる…純粹で凶悪で狂氣的な目…『悪の目』だ。」

「お、オトヤ君は悪なんかじゃ…」

「いいよアイン、黙ってて。」

「お前、名は？」

「登オトヤ…仮面ライダーダークキバ。」

「大道克己…仮面ライダーエターナル。気に入ったぜ小僧。いいだろう、お前に協力いてやる。ただし…」

「全部終わったら勝負しろ…ですか？」

「物分りがいいな。」

「あ…き、ら…？」

ライダー郡に捉えられてしまった高町なのは。

彼女が朦朧とした意識の中で見たのは、今まで仲間であった伊達明が仮面ライダーに変身するという光景だった。

姿かたちは敵である仮面ライダーバースと全く同じ。

しかし、体中の至るところに赤いラインが引かれており、バースとは違い頭部は緑色に発光している。

『仮面ライダーバース・プロトタイプ』

通称プロトバース：それが彼のライダーたる名だ。

元々はバースの試験用として初期の段階で開発された物であり、スベックはバースと同等。

しかし装備品は少なく、バース特有の換装装備もバースが6つに対し、プロトバースは2つしか無い。

それでも、無いよりはマシだった。

プロトバースは拳を鳴らすと、なのはを掴んでいるオーズへとタツクルを仕掛ける。

その勢いに押されてオーズは思わずなのはを放してしまい、そこへバースは次々に連続攻撃を仕掛けた。

「あ……明が……ライダー……？」

「わりいね、なのちゃん……そう、俺ライダー。仮面ライダープロトバース。大ショッカーの洗脳が始まってから生まれたからちゃんと、お前等の味方だぜ？」

『カポーンッ！クレーンアーム』

プロトバースは右腕に『クレーンアーム』を装備すると、近くにいたクウガを掴み上げて次に近い響鬼へとぶつけた。

そのまま今度はブレイドとキバを押しつけ、今度は左手で龍騎とフアイズを殴り飛ばした。

『マ・グ・ネ・ツ・ト／オ・ン』

『カポーンッ！カッターウイング』

『ゴックン！』

フォーゼ、バース、オーズが今度は仕掛けてくる。

さすがにプロトバースも連戦に次ぐ連戦で体力が持たない。

それでも諦めるわけにはいかず、攻めてきたフォーゼを受け止める
と、それをバースへと投げ返す。

フォーゼとバースが墮ちると、いよいよオーズとカブトだけだ。

「はあ……はあ……さすがにまじいな……。おっと!？」

「ちっ。」

殴りかかってくるカブト、それをクレーンアームで受け止めるとプロトバースはカブトの腹部にバースバスターをセルバーストモードで押し当てた。

至近距離からのセルバースト……どれほど自分に反動が来るかわからない……。

（でも……後藤ちゃんがやってる無茶に比べたら……屁でも無いでしょ！！）

『セルバースト』

バ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ン
!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!

強力な『ガーディアンシュート』の一撃がカブトを襲う。

それによりカブトは一撃で沈み、プロトバースは壊れて使い物にならなくなったバースバスターとクレインアームを投げ捨てた。

新たにセルメダルをベルトへ投入し、ハンドルを回す。

『セルバースト』

『プット！ティラノ！ヒッサッ！』

電子音と同時に、オーズとプロトバースの最強必殺技がぶつかった。爆風が辺りの瓦礫を全て吹き飛ばし、地面を抉る。

『ブレストキャノンシュート』と『ストレインドウム』の激しいぶつかり合い：それは長くは続かなかった。

何故ならば、プロトバースが力負けしたから。

ブレストキャノンは押し返され、威力は落ちたもののストレインドウムの直撃を喰らったプロトバース。

それによりプロトバースドライバーは完全に破壊されてしまい、伊達の姿に戻って地面を転がった。

メダガブリューを再びアクスモードに戻したオーズがゆっくりとこちらに迫ってくる。

もうダメだ……そう思ったその時だった。

『ファイナルベント』

『エクシードチャージ』

「「はあああああああああああああああ！！！！！！」」

どこからとも無く、2つの黒い影が現れオーズを蹴り飛ばした。
吹っ飛ばされたオーズは元アジトだった場所に激突し、瓦礫の下敷きに。

それを確認すると思い2つの影は人間の姿に変わり、伊達となのはに駆け寄った。

「大丈夫ですか!？」

「酷い怪我だ……もう大丈夫、俺達は貴方達の味方です。」

「お、お前等は……？」

良く見ると2人とも少年だ。

1人はオトヤより少し年上に見え、もう1人は高校生か大学生ぐらいで少し大人びた印象がある。

2人は伊達となのはを安全な場所に隠すと再び前線に顔を出し、ライダー達の目の前に立った。

未だに戦えるのはクウガ アルティメットフォーム、ファイズ ブラストフォーム、龍騎サバイブ、バース、そして再び姿を現した

オーズ プトティラコンボの5人だ。

「兄ちゃん……今、俺が救ってやる……!!」

「タクミも、すぐに元に戻してやるからな。」

「貴様等、何者だ？」

代表してバースが聞く。

すると、背の低い方の少年は黒いカードデッキを構え、もう1人は黒いベルトを腰に巻きつけた。

「俺達？俺は辰巳歩……、」

「俺は駒場ユウジ、そして……、」

『0…0…0…スタンディング・バイ』

「『仮面ライダーだ……!!変身……!!』」

『コンプリート』

デッキの少年……歩は黒いデッキをベルトに、もう1人のユウジは『オーガフォン』をベルトに装着した。

すると歩の方は黒い虚像を体に重ね、ユウジの方は黄金のフォトンブラッドを体に纏う。

そして出てきたのは2人の仮面ライダー……いや、ダークライダー。歩が変身したのは『黒き龍の戦士 仮面ライダーリュウガ』

ユウジが変身したのは『黒き帝王 仮面ライダーオーガ』

【龍騎の世界】と【ファイズの世界】のダークライダーにして、数少ない人間側の仮面ライダー。

スペックは決して最強フォームになったライダー達にも劣らない。

2人は顔を見合わせ、専用剣を握り、ライダーの群れへと突っ込んでいった。

「行くぜ駒場さん!!」

「ああ、歩!!」

ドラグセイバーを巧に操り、龍騎とクウガを翻弄するリュウガ。

スペックだけならクウガの方が圧倒的に上だが、リュウガには覚悟がある。

何故なら今戦っている龍騎はリュウガの実の兄……彼の目的は……

「兄ちゃん……いい加減目え覚ませええええええ!!!!!!」

一方でオーガが相手をするのはファイズとオーズ。

暴走を続けるオーズの攻撃を読む事は難しいが、単純なので攻撃自体はかわしやすい。

それにオーガの変身者である駒場ユウジは【ファイズの世界】の怪人 オルフェノク。

人間以上の鋭い感覚を研ぎ澄ませ、正確にオーズとファイズの弱所を突いていく。

「タクミ!!! 戻ってこおおおい!!!!!!」

『ストライクベント』

『エクシードチャージ』

『昇竜突破』と『グランインパクト』が同時にそれぞれの相手に直撃。

4人のライダーは威力のあまり全員基本形態まで戻り、地面を転がっていく。

それを見ていた伊達は…、

「へえーやるねえ……。でも、子供だけに戦わせるほどお兄さん、堕ちぶれちゃいないのよ!」

良く見ると伊達の腰にはプロトバーストライバーでは無いベルトが装着されていた。

なのははコレに見覚えがある…『バスターバックル』だ。

「明それ…、」

「ちょっと借りるわ。わりいね♪」

『バスターフェッスル セット』

バスタードライバーに変身用フェッスルをセット。
ドライバーの銃口に変身用の展開図が出現し、伊達はそれを上に上

げた。

「変身!!」

『バスターモード トランスフォーム』

展開図が伊達の体に纏わり付き、彼は今度は仮面ライダーバスターへと姿を変えた。

バスターに変身した伊達はかつての相棒であった仮面ライダーバースに向かい合うと、モードチェンジ用のフェッスルを手取る。

バスターとバース……2人のライダーは一定の距離を取ると、一気に走り出した。

「行くぜ後藤ちゃん!!」

「……ッ!!」

『コンバインフェッスル セット フルバーストモード アップグレード』

『カポーンッ! ドリルアーム クレーンアーム ショベルアーム
キャタピラレッグ カッターウイング ブレストキャノン』

しばらくして、オトヤ達は一つの工場跡地にやって来た。

すでにブラック將軍は見失ってしまった：当ても無く歩いていても仕方が無い。

だから、克己がここに案内したのだ。

ここには大量の重火器が貯蔵されており、克己がしばらくの間身を隠していた場所でもある。

彼がバズーカの銃口の中から取り出したのは一枚の地図。
この辺の街の見取り図だ。

「大道さんコレは？」

「ココ……この印のところが大ショッカー共のアジトだ。」

「え？ どうしてそんな事わかるんですか？」

「前に奴等と戦った時に発信機を取り付けさせて貰った。俺一人なら分からなかったが……これだけの大人数なら奴等を壊滅させるやもしれん。」

「な、なるほど！！」

「さすがはエターナル、悪だね？」

「ありがとよ、最高の褒め言葉だぜ。」

ウラタロスの嫌味に冷静に返すその姿勢はもう流石としか言えない。すっかりリオもコロナも（ついでにリュウタロスも）克己に懷いてしまった、どうやら子供の扱いは上手いらしい。しかしヴィヴィオだけはライダーが増えるのが納得いか無いのか、ずっとムツとしている。

「ヴィヴィオさん、大丈夫ですか？」

「……大丈夫。ねえ、アインハルトさんは何でライダーなんかと一緒にいるの？」

「オトヤ君の事ですか？……そうですね、簡単に言うと……『友達だから』ですかね？」

「友達？ライダーが？」

「はい。引っ込み思案でずっと一人ぼっちだった私に、普通に接してくれて……格闘技ばかりやってるの私をちゃんと女の子扱いしてくれて……一番のお友達です。」

「それって単に無神経なだけじゃ無いの？」

「うっ……。」

『にゃー……。』

言い返せないので悲しいものだ。

当の本人には聞こえていないので良い事にしよう。

一通り自分達の事を話すとヴィヴィオは『ふーん』と頷き、ずっと抱いていたザンバットソードを横に置く。

「ま…とりあえず、あんた達見て分かった。」

「ん？」

「ライダーって悪い奴ばかりじゃない…、」

「ヴい、ヴィヴィオさん…！」

「『バカ』もいるって。」

「ヴい、ヴィヴィオさあ…ん…。」

「アハハ！」

笑うヴィヴィオ。

思えばこの時代に来てからヴィヴィオの笑顔を初めて見た様な気がする…というか初めて見た。

その表情は本来の時代となんら変わらず、見た者に元気を与えてくれる。

2人がしばらく話していると、突然克己が立ち上がった。

それに合わせて全員が立ち上がり、克己の持つ地図の印を見る。

「さあ…行くぞ、大ショッカー共のアジトに。」

8部：総本山

克己と合流したオトヤ達一行。

彼らはネオカード『フェニックス』を奪い去っていったブラック將軍を倒し、再びカードを奪い返すために現在、克己のアジトに待機中。

待機する理由は一つ：これから『大ショックカーのアジトへ乗り込む』のだ。

そのための充電期間というわけでは無いが、敵は全世界の怪人のオンパレード：一筋縄でいくはずが無い。

しかし、結構ビクついている少女組に対し、克己、オトヤ、そしてイマジン3人は恐れをなさずに作戦会議中。

おそらくオトヤの場合はビビってても仕方無いという感じだろうが、克己達は本気で余裕の顔だった。

これが歴戦の漢の顔なのだろうと：リオとコロナはある意味尊敬の眼差しを向けていた。

「どうした？ お前ら？」

「あ、いえ！ 克己さん凄いなあ〜って思っただけ。」

「そうそう！ 普通なら怖いはずなのに…。」

「怖いならそれはそれでいい。長生きする。」

何故だかわからないが、彼の言葉にはズシつとした重みがある。

ぶっくら棒にそう言う克己に対し、ウラタロスが彼の肩を叩いて耳元で呟いた。

「コラコラ、女の子にそういう言葉使いしちゃ駄目でしょ？もっと紳士的に紳士的に。」

「うるさい、殺すぞ。」

「おっと…暴力反対…。」

ナイフを押さえつけるウラタロス…こいつら本当に仲悪いな…。
ちなみに仲が悪い理由は、ウラタロス曰く『イケメン』だから…だから何だというのか…。

そして作戦会議中にキンタロス寝るな、リュウタロスは蝶々追いかけるな。

こんな調子で大丈夫なのだろうか…？そう思いながらオトヤはあ、とため息をつく。

そうしているとウラタロスにナイフを突きつけながら克己が作戦を説明。

作戦はまず、イマジン3人が仲間の振りをして大ショッカーアジトに潜入。

内部を混乱させると続いてオトヤと克己が侵入し、一気に内部から叩く。

運がよければ海東や幸太郎が駆けつけてくれるかもしれない。

これで確実にフェニックスのカードを取り戻し、あわよくばそのまま大ショッカー壊滅だ。

克己の情報では大ショッカーが作ろうとしている『ショッカーレジエンドルガ』の完成にはまだもう少し時間が掛かるらしい。

そこへ一気に飛び込み、大ショッカーとショッカーネオを壊滅させる。

上手くいく保障はどこにも無いが、それでもやるしか無い…。

「勝とう……絶対に……!!」

「当然だ。あんな連中の好きにさせて溜まるか。」

そう言って立ち上がった2人のダークライダーの目には、今までに無いほどの闘志が漲っていた。

彼らに釣られて他のメンバー達も立ち上がり、コクリと頷くとアジトの外へ。

ここから大ショッカーの本部までは歩いておよそ3時間……今から出れば日没までには着くはず。

デンライナーがあれば移動も早いが、今はそういうわけにもいかない……意を固めると、ダークライダー一行はどうとう、大ショッカーの総本山へ向けての一步を踏み出した。

しかし……現実はその甘くは無い……。

大ショッカーのアジトは町はずれの鉱山、そのすぐ傍の湖の底にあった。

やはりというか何と言うか、大ショッカーも彼等が来ることを見通しており、本部までもう少しといったところで怪人達が待ち構えていた。

克己の作戦は大ショッカーの隙を突くためのものだったので、これではもう作戦は役に立たない。

怪人の数はざっと見積もっても100体以上……骨が折れる事は目に見えていた。

エターナルやダークキバの必殺技ならば簡単に倒せるだろうが、そこは大ショッカー本部でやつらを壊滅させるために温存しておきたいところ。

となれば、普通に戦うしかない。
しかもエターナルはまだいいが、ダークキバの場合は丸腰。

「ちっ…読まれてたか…。やつらもそれなりに頭が切れるってところ…か？」

「これぐらいの事態、想定できたんじゃないの？エターナル？こんな連中相手…。」

「何や亀の字？怖いんかあ？」

「冗談。疲れる事はあんまりやりたく無いだけだよ。ま…良太郎の為ならしょうがないね。」

「よーし！僕頑張っちゃうもんねー！」

「みんな！！行きましよう！！」

『ガブリ！！』

意を決し、オトやはダキバットを手に噛ませた。

克己もロストドライバーを巻きつけ、メモリを取出す。

それと同時にアインハルトはヴィヴィオ達を下がらせ、隠れやすそうな場所を探す。

しかし、その時ウラタロスがオトヤ達に変身するのを止め、すっと手を出した。

「ウラタロス？」

「ここは、僕達に任せてよ？」

「え！？そ、そんな…、」

「平気や平気や！俺の強さは…フンッ！（ゴキッ！、泣けるでえ！）」

「僕も最近全然暴れてないから思う存分やりたーい！」

やる気満々のイマジン3人。

本当は良太郎の為に誰よりも大ショッカー本部に行きたいはずなのに…おそらく、ショッカーネオ達に勝つには仮面ライダーでなければ不可能だと思ったのだろう。

確かに相手は下級怪人がほとんどだが、まれに上級怪人も混じっている。

3人だけで大丈夫であろうか…？

そう思うオトヤの肩を克己がポンッ叩き、彼を無理やり引きずって行こうとする。

「だ、大道さん何を！？」

「こいつ等にはこいつ等なりの覚悟つてもんがある。それを無駄にするな、行くぞ。」

「え、あつ、ちょっと……皆、絶対に生きてまた！！」

「ん。」

「フンッ！！当然やで！！」

「まったね☆」

覚悟を無駄にしない。

克己のその言葉でオトヤは折れ、しぶしぶイマジン達を置いていく事を決断した。

去り際にアインハルト、リオ、コロナの順で3人にペコリと頭を下げ、ヴィヴィオは彼らを少し心配そな表情で見つめている。

オトヤ達の姿が見えなくなると、3人は各々の武器を構え、怪人達に向かい合った。

「さあ：じゃあ、はじめ様か？」

これが開戦の合図。

ウラタロスの言葉と同時に大ショック怪人達が一斉に攻め込み、3人もそれに突っ込んでいく。

ウラタロスが対峙する怪人達の大半はショック怪人で構成されているが、それを率いているのは平成怪人のコーカサスアンドレッド。

不死身の生命体であるそれはウラタロスの攻撃をわざと受けながら反撃のチャンスをうかがう。

何せ死なないのだ：ダメージがあろうと無かろうと結果は同じ。

結局倒す事は不可能であり、ウラタロスはどうとう反撃の為の剣の直撃を喰らい、地面に転がる。

再び攻め込んでくるコーカサスアンドレッドに何とか竿を伸ばし、釣り糸が引っかったコーカサスアンドレッドは戦闘員達の群れに投げ飛ばされた。

その近くで戦うキンタロスはゴルゴムとクライシス帝国の怪人を千切っては投げ千切っては投げ、そして飛び上がり斧を一気に振り下ろす。

彼らはアンデットと違い死なないと言うことは無いのであっけなく爆散し、キンタロスはゴキッ！と首を鳴らした。

「ダイナミックチョップ……生っ！！」

「わー！熊ちゃんすごー！よーし、じゃ、僕も！」

キンタロスの戦いに目を輝かせるのはリュウタロス。

何故か彼の周りには上級怪人ばかり……ン・ガミオ・ゼタ、バッファローロード、タイガーオルフェノク、大蛇。

しかしたじろぐどころかリュウタロスは余計に楽しそうに跳び回り、専用銃の引き金を弾いた。

いくつもの銃弾が怪人達を襲い、更に敵が怯んだ隙に得意のダンスを模した独特の拳法でガミオ、バッファローの順で殴り倒していく。実力的には決して劣ってはいない……しかし、それでも戦えば戦うほど戦況は悪化していく。

理由は一つ、数だ。

大ショッカー側は数百体もいるのに対し、自分達はたったの3人。

これでは勝てるはずも無い、必ずどこかで敗北する。

だがここで負ければ良太郎達はもちろん、本部へ向かったオトヤ達や良太郎と戦っている幸太郎達にも申し訳無い。

どうにかしなければ……そう思っていたその時だった。

ブオオオオオオオオオオオオオオオオ………!!

「あれは…?」

突然聞こえてくるバイク音。

それも数が多い……聞いただけでも4つ以上…。

ウラタロスもキンタロスもリュウタロスも、大シヨツカーの怪人達も辺りをキヨロキヨロと見回す。

すると上の崖から黒い影が2つ姿を見せ、その影は崖を飛び降り…怪人を殴り飛ばした。

「「ライダアアアアアアアアアアアアアアアアンチツツツ!!
!!!!!!」」

「「い、いーー!?」」

殴り飛ばされ、消滅する戦闘員。

影はウラタロス達の前に来ると、彼らを守る様に拳を構えた。

「君達!!!大丈夫か!?!」

「もう大丈夫だ、私達も協力しよう!!」

「君達は……!!」

「行くぞ!! 2号!!」

「おう!! 1号!!」

その影の正体……それは伝説と語り継がれる仮面ライダー……仮面ライダー1号と仮面ライダー2号。
更に先ほどから聞こえていたバイク音もだんだんと近づいてくる……その数は全部で5つ。

「すまない皆、待たせたな。」

「さあ、力を合わせよう!」

「大ショッカーの野望は、必ず食い止めるんだ!!」

「アマゾン、皆、大ショッカー、倒す!!」

「うむ! さあ、行くぞ!!」

仮面ライダーV3、ライダーマン、仮面ライダーX、仮面ライダーアマゾン、そして仮面ライダーストロンガー…。かつて、昭和の世を守ってきた『栄光の7人ライダー』達だった。そう言えばと、ウラタロスは思い出す。

この『クウガの時代』ではかつての仮面ライダー達は改造人間である事を隠しながら、それぞれ日常を歩んでいた…。その彼等が、大ショッカーの復活を聞きつけ再び集結したのだ。世界の平和を守るために。

「まさか昭和ライダーが…それも『7人ライダー』が駆けつけてくれるなんてね…。…光栄かな?」

「この強さ…。泣けるでえ!!!!」

「ウラタロス君にキンタロス君にリユタロス君だったね? 俺は仮面ライダー1号、君達と同じ、正義を愛し悪を憎む者だ!!」

「『彼』から事情は聞いた、さあ、共に戦おう!!」

『彼』?

一体誰だろうと思いつながらも、3人のイマジンは昭和ライダー達の真ん中に並んだ。

昭和ライダー達のほとんどは武器などには頼らない。
己の肉体こそが唯一の武器にして、最強の武器なのだ。

「さあ…行くぞ!!!!!!!!!!!!!!」

「」「」「おう!!!!!!!!!!!!!!」

「どうなってやがる…?」

本部に辿り着き、克己が最初に口にした言葉がそれだった。
確かに、とオトヤ達もその言葉に頷く。

ここは大ショッカーの総本山…本来は怪人達で溢れかえっているはず。

それなのに…、

「誰もいません…ね…。」

『にやう?』

アインハルトの言うとおり、『誰もいない』

ブラック將軍や大首領はおろか、戦闘員達すらいなかった。

場所を間違えたかと思うが、克己の分析は完璧であり、その証拠にこのアジトの外は見張りの怪人達がうじゃうじゃとおり、ここを守っている。

一体何故……全員がそう思っていると、突然壁にかかっているモニターが光り、そこにブラック將軍の顔がアップで表示された。

『フハハハハ！！残念だったな仮面ライダー諸君！！君達が攻めてくる事はすでに予測していたよ！我々は先ほどすでに、このアジトを脱出している。ここにはちょっとした細工を仕掛けさせてもらったよ。』

「仕掛け……？仕掛けて……」

「！！……まずい……おい！！逃げるぞ！！！！」

「え？大道さん！？」

克己が何かに気付いたようで、オトヤが振り返った時にはすでにリオとコロナを抱えていた。

オトヤにも何故彼がこんなに慌てているのかその理由に気が付き、顔を真っ青にしてヴィヴィオを背負う。

『爆弾』だ。

「アイン！！ダキバット！！急いで逃げよう！！」

これで勝った…ブラック將軍は元アジトを崖の上から見下ろしながら勝利の実感を味わう。

味わうはずだった。

いくらなんでも普通の人間達（一部例外除く）があれ程巨大な爆発を食らって生きて入れるはずが無い……。

しかし…、

「あ、あれ…？」

「私たち…生きてるの…？」

「なにっ!？」

なんと、いつの間にかオトヤ達が湖の畔に打ち上げられており、その中心には金色の仮面ライダーの姿が。

そのライダーの姿がスウと消えると、彼らの後ろから新たに3つの影が姿を見せた。

「どうやら…間に合ったみたいだね？」

「「海東さん!」」

「幸太郎！」

「あ、赤鬼。」

「モモタロスだこの野郎！！」

仮面ライダーNEW電王、仮面ライダー電王、そして仮面ライダー
ディエンドの3人だった。

そして戻ってきてそうそうヴィヴィオの『赤鬼』発言に律儀に突っ
込んでいる電王…。

先ほど電王LFとディケイドと交戦していたが、突如乱入してきた
謎のライダーのおかげでこちらに駆けつける事が出来たようだ。

先ほどオトヤ達を助けたのはディエンドの『アタックライド ゲキ
ジョウバン』により召喚された『仮面ライダーコーカサス』

彼の持つ『ハイパークロックアップ』の力で爆発する前にオトヤ達
を救い出した。

「小癪なあゝ…！！」

「ここに来る途中で昭和ライダー達と出会えたのは嬉しい誤算だっ
たよ。」

「あの人達に事情を説明したら快く協力してくれた！もう終わりだ、
大ショッカー！！」

「果たしてそうかな？」

その時、突然上から無数の銃弾がディエンド達に降り注いだ。
何とか全員それをかわすと、銃弾が放たれた方向に顔を向ける。
そこには執事服姿の初老の男の姿があり、その隣には小さい翼をも
った灰色の怪人の姿が見える。

「だ、大首領様！！」

「何…あれが？」

男に向かって跪くブラック將軍。

そして彼に向かって言った、『大首領』と。

という事はあの男が大ショッカーの頭…隣にいるのはおそらく未来
での歴史改変の原因たる…、

「ショッカーネオか…！！！」

「ブラック將軍、いつも言っているだろう？私の事は大首領では無

く、なんと呼べと言った？」

「も、申し訳ございません、『創生王シャドームーン』様!!」

「まあいいだろう。仮面ライダー諸君、私こそが大ショッカーの大首領にして『創生王』たる男、月影ノブヒコことシャドームーン!!!!!!そして……、」

男：月影の手にはブラック將軍から受け取ったと思われるカード：『フェニックス』が。

ニヤリと笑うと、それを隣にいたショッカーネオへと当てる。

それをショッカーネオは受け取ると、体中が黒い光に包まれた。

あまりにも邪悪な闇の光：目を開ける事すら許されないその光を纏い、ショッカーネオの姿が変化していく…。

大ショッカーのシンボルマークである『ワシ』を模した頭部に、仮面ライダーディケイドと仮面ライダーキバの意表を受け継いだかのようなボディ。

大きい灰色の翼が出現し、とうとうオトヤ達の前にこの世界最大の脅威が姿を見せた。

「ショオオオオオツカアアアアアアア!!!!!!」

『ショッカーレジェンドルガ』

ネオファンガイアと大ショッカーが『レジェンドルガ』という形で融合した最凶最悪の怪人だ。

その力は、全ての平成ライダーを屈服させるほど…とてつもなく強大だ。

しかし、それでもやるしかない…こいつを倒さなければ、未来は無いのだ。

「いくぞダキバット…ここで全てを終わらせる!!」

『うむ!!ガブリ!!』

「さあ…死神のパーティータイムだ!!」

『エターナル!』

「変身!!」

『絶滅せよ!』

『エターナル!』

オトヤの克己はそれぞれのベルトにダキバットとメモリを取り付け、仮面ライダーダークキバと仮面ライダーエターナルに変身。

その隣にディエンドとNEW電王、そして電王が並び、全員武器を構える。

ダークキバだけは武器が無いので素手で構え、5人一斉にショッカーレジェンドルガに襲い掛かった。

エターナルとダークキバの拳がショッカーレジェンドルガに当たる

が、大して効果が見られない：そのままエターナルは腕を掴まれてしまいい、ディエンドの下へと投げ飛ばされてしまう。

攻撃直後で無防備になってしまったダークキバを蹴り飛ばし、電王のベルトをはぎ取る。

モモタロスの姿に戻ってしまった彼はショッカーレジェンドルガに頭をつかまれ、NEW電王に向かって投げられた。

たった数秒なのに、ここまで実力の差が開いているとわかり……したくも無いのに絶望してしまった。

それでも、諦めるわけにはいかず……ダークキバ達は再び立ち上がる。しかし、先のダメージがあまりにも大きすぎて、全員変身強制解除。もはや成す術無しだった。

だが……

プ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
ン
!
!
!
!
!
!
!
!
!
!

ん?

「で、デンライナー!!」

何と、『時の列車デンライナー』が上空から出現し、幸太郎達とシヨッカーレジェンドルガを裂く様に停車してきた。

中から見張りの怪人たちを倒したウラタロス達が現れ、さらにそれ

に続いて彼らの仲間……昭和ライダー達も姿を見せる。

「カメ!! 熊!! 小僧!!」

「やあ先輩♪」

「皆!! 大丈夫か!!」

「昭和ライダー……!!」

「ありがとう海東君、野上君。君たちのおかげで……とうとう28年に及ぶ大ショッカーとの因縁にケリをつけられそうだ!!」

そう言って、2号は海東達の手を引いて彼らを引き上げた。

彼らを1号に託すと、1号は全員をデンライナーの中へと連れて行く。

そこで海東が出会った者は……

「小野寺君?」

「だ、大丈夫ですか!?!」

真っ赤なボディにクワガタのような頭部……平成1号ライダー、仮面ライダークウガ。

海東の仲間であった『小野寺ユウスケ』が変身するライダーで、スベックは数いるライダー達の中でも最高の部類に入る猛者だ。

「驚いたでしょう？来る途中で丁度グロンギと交戦中の彼を見つけてましてねえ…協力を申し出てみたら快く了承してくれましたよ。」

ニヤリと笑いながらオーナーが隣で囁いた。

そういえば忘れがちだが、ここは『アインハルトの記憶の12年前』であると同時に、『仮面ライダークウガが戦っていた時代』でもあるのだ。

もう2度と会う事の無いと思っていた仲間との再会…海東は体の底から込み上げてくるものをグツと抑え、1号に連れられて席に座った。

オトヤや幸太郎も中に戻った時点で1号とクウガは顔を見合わせ、外へと出る。

「行くぞ、平成1号ライダークウガ!!」

「はい、本郷教授…じゃ、無くって…1号!!」

『どこからでもかかって来い!!貴様らを悪の前に跪かせてやる!!』

その言葉を皮切りに、昭和ライダー&クウガと、大ショッカーとの最終決戦が幕を開けた。

月影が新たに呼び寄せた怪人達と、V3〜ストロンガーまでの5人が戦い、ショッカーレジェンドルガとは1号・2号・クウガの伝説ライダートリオが交戦。

その間にデンライナーは徐々に動き始め、少しずつ地面を離れていく。

「この時代の事は、この時代の仮面ライダー達にお任せしましょう。」

」

「だな。とりあえず…昭和ライダーとクウガならきつと…!!」

「チッ、まさかこの俺が逃げる羽目になるとはなあ…。」

「まあまあ、大道さん。」

「……。」

やはり、克己はこの結果に満足していない様子。
だがこれedyやく全てが終わる……そう思った。

いや、そう思ったかつ…。

『はあっ!!!!』

「「「ぐあっ!!!!」」」

デンライナーの外を見ると…なんと、1号と2号、それにクウガがショッカーレジェンドルガに圧倒されていた。

自分の戦っていた相手を倒した他のライダーが駆けつけても、それでも勝てない。

奴に勝つにはこれだけの力じゃまだ足りないというのか…?
心配そうに窓の外を見つめ拳を握るオトヤとアインハルト。

そこで、彼らはあるものを発見した。
それは…

「海東さん!?!」

何と、いつの間にか海東がデンライナーから降りていた。

彼はライダー達と戦うショッカーレジェンドルガを睨みながら、デ
イエンドライバーを握る手に力を込める。

一体何故彼が車外に…幸太郎と克己もドアから顔を出し、海東へと
呼びかける。

「海東!! お前何考えてるんだ!!」

「お前、死ぬ気か?」

「早く戻れ泥棒野郎!! おい!!!!」

「僕の旅の行先は…僕だけが決める。」

幸太郎達の言葉にそう答えると、海東はクウガを見つめた。ずっと取り戻したかった仲間……それが今、目の前にある。手が届くお宝に手を伸ばさないのは、自分の主義に反する。必ず取り戻す……。

「海東さん!!! 早くデンライナーへ!!!」

「早くしないと!!! オーナーさん!!! デンライナー止めてください!!!」

「出来ません。このままではデンライナーも奴らにやられてしまいます。」

「そんな……海東さん!!!! 早く!!!!!!」

「オトヤあ!!」

徐々に視界から離れていく海東。

しかし、クルリと振り返ったその表情だけは、オトヤにはちゃんと見えた。

それは初めて会った時と同じ、澄ましていて何でも見透かしているようなキザな表情。

彼は右手で銃の形を作るとそれでオトヤを挿し、徐々にずらしてその指をアインハルトへと向けこう言った。

「君だけのさいっこのお宝、しっかり守ってみせてくれたまえ？」

『カメンライド』

「い……嫌だ……嫌だ海東さん……！行っちゃダメだ……！海東さああああん……！！！」

「海東さん……！早く戻って来て下さい……！死んじゃダメえええええ……！！！」

「海東おおおおおおお!!! お前、生きてディケイド達にまた会うんじゃない無かったのか!!!! おい!!!! うおおおおおい!!!!!!!」

オトヤ、アインハルト、幸太郎が叫ぶが海東はそれに答えない。

いつもの自分らしく無いと自虐の笑みを浮かべると、海東は少しずつショッカーレジェンドルガへ向けて歩み寄っていく。

その足は徐々に速くなり、最終的には走り始めると、彼はディエンドライバーを正面に向けて走りながら叫んだ。

「変身!!」

『ディエンド』

それが、この時代でオトヤ達が聞いた最後の言葉。

海東不在のデンライナーはもはや地上には戻れないほど上昇……時の狭間へと消えていく。

「海東さあああああああああああああああああん!!!!!!!」

オトヤの叫びが聞き終わらないうちに、海東はディエンドへの変身を完了させ、そのまま勢いを落とさずにショッカーレジェンドルガを蹴り飛ばした。

それに驚き、クウガはディエンドへと尋ねる。

「あ、あんたは……?」

「いつか出会っさ、また……生きて未来でね。」

「未来？」

そして、ディエンドを中心に、左右4人ずつ仮面ライダー達が並ぶ、右側にはクウガ、2号、ライダーマン、ストロンガー。

左側には1号、V3、X、アマゾン。

勝てないかもしれない、負けるかもしれない、死ぬかもしれない。だが、それは仮面ライダーが戦わない理由にはならない。

『命ある限り戦う』

それこそが仮面ライダー……正義の味方なのだ。

「行くよ、みんな。」

「「「おう!!!!!!!!!!」」」

過去に残されたディエンドを筆頭に、再びショッカーレジェンドルが相手に仮面ライダー達の勝ち目無き戦いの火蓋が切って降ろされた。

8部：総本山（後書き）

さらば、海東！！

次回は旧ダキバかフォーゼマガカ投稿します…後者の方が確率高いかな…？

9部..絶滅タイム

プオオオオオオオオオオオン!!!!!!

大きい汽笛と共に、オトや達を乗せたデンライナーは再び現代へと姿を現した。

しかし車体は過去で大シヨツカーの怪人共から攻撃を受け続けてロボロになっており、亀裂から炎が上がっている。

このままではいずれ爆発：しかも勢いを殺さずに地面に落下し続けているので酸素量が増加し、爆発の危険性はさらに高まっている。

まずい……そう感じたオトヤ、幸太郎、克己の3人は自分のベルトを腰に巻きつけ、ダキバット、ライダーパス、エターナルメモリをベルトに装着した。

「变身！！」

『行くぞ!!』

『ストライク、フォーム』

『エターナル！』

ダークキバ、NEW電王、エターナルにそれぞれ変身した3人は、近くにいた少女を抱き寄せてハッチを開く。

ダークキバはアインハルトを、エターナルはリオとコロナをそれぞれマントで覆い隠して飛び降り、NEW電王はヴィヴィオを背負い、深呼吸を3回してから飛び降りた。

彼らが地面に倒れ変身が解けると同時にデンライナーが爆破……上から赤い物体が一つ落ちてきてデンライナーは粉々に砕け散った。

「オーナー!!! ナオミiiiiiiii!!!!!!」

「モモタロス!!! ウラタロス!!! キンタロス!!! リュウタロスううううう!!!!!!」

オーナーとナオミ、それから過去で共に戦ったイマジン達が脱出が間に合わず、デンライナー共々爆破。

幸太郎とオトヤが必死に空中へと呼びかけるが…それでも返事はなかった…。

ただ1人を除いて…、

「いって…死ぬかと思っただけ…。」

「!!! モモタロス!!!」

「ん? おお天井! 元気そうじゃねえか……ってあああああ!!!
!!! 亀!!! 熊!!! 小僧おおお!!!!!!」

どうやらモモタロスだけは助かったらしい。
尊い犠牲を払ったオトヤ達…しかし、これでようやく大ショックが消える。

消える……はずだった…。

しかし…、

「……嘘……だろ……？」

目の前には、ズタズタに引き裂かれた元アジト。

積み重なる魔導士達の死体……破壊されたデバイス……。

あたり一面に広がる鮮血の海……そして散らばったセルメダル。

きっとここで激しい戦いがあり……そして負けたのだろう……。

つまり……、

『歴史の修復の失敗』

海東とクウガ、そして栄光の7人ライダー達が力を合わせても大シヨッカーには勝てなかったという事だ……。

それに、幸太郎は絶望し、克己は言葉を失い、オトヤはその場で力が抜け、アインハルトは泣き叫んだ。

「なんだよコレ………どういう事なんだよ……！！海東どうなったんだよ……！！海東は……！！！」

「お、落ち着け幸太郎！」

「これが落ち着けるか……！！海東が命を懸けて俺たちを逃がしてくれたのに………これじゃあいつ、無駄死にじゃ無いか……！！！」

『まさか………クッ！』

「そんな………海東さん………！！！」

「……………もう……………嫌だ…。」

「アイン？」

思わず隣を見る。

そこには、涙を滝のように流しながら地面に手をつくアインハルトの姿が。

彼女は泣きながら、『嫌』という言葉を連呼している…。

「もう嫌だよ……………こんなの…帰りたいよ…！」

「アイン…。」

「何でこんな事になったの…？ 私達は…ただ、この町を守りたかっただけなのに…どうして…？」

「アイン。」

「デンライナーが壊れて……………仲間も殺されて……………海東さんも……………もう嫌だこんなの！！帰りたい！！！！元の世界に帰りたいよお！！！！」

「アイン！！！！」

パチンっ！という音が耳元に響くと、徐々に右頬に痛みが広がってきた。

オトヤが、彼女を叩いたのだ。

何が起きたのかよくわからずに彼を見ると、オトヤはアインハルトの肩を掴んで彼女を揺さぶる。

「しっかりしろよ！！そんな言葉君らしくない！！元の世界に戻りたいのはみんな同じだ：君だけじゃない！！海東さんの犠牲を無駄にしちゃいけない：今からでもいい、大ショッカーを倒すんだ！！」

「そんな事できる保証がどこにあるの！！！！あの：『ショッカーレジェンドルガ』とかいう怪人に：海東さんも他のライダーも全員やられて：：私達だけで勝てるわけ無いじゃないですか！！！！」

「だからそれが君らしく無いっていうんだよ！！いつもの君はどこに行ったんだ！？あの：霸王流が最強である事を証明する為に戦っていた『霸王イングヴァルト』は何処へ行ったんだよ！！！！」

『オトヤの言うとおりだアイン嬢、それに幸太郎殿。今は危機的状況だからこそ：冷静さが必要なんじゃ無いのか？ティオにすらそれが理解できているというのに：何と情けないのだ貴様らは！！』

オトヤとダキバットに言われ、2人ともはっとした。

そうだ：確かにこんな状況だからこそ、もっと冷静に：クールにならなければならない：。

本当にダキバットの言うとおり、情けない。

2人がシュンとしてしていると、オトヤが怯えているリオやコロナに気付き、彼女らにやさしく笑いかけて頭を撫でた。

その表情は、アインハルトもよく見る日常での心の底からの笑顔だった。

「大丈夫だよ皆…海東さんの犠牲は無駄にはしない…必ず、この世界に光を取り戻して見せるから。ね？」

『安心しろ、こう見えて…本気を出したこいつは強い。』

「「……は、はい！」」

少し元気を取り戻したコロナとりオを見て、オトヤもダキバットもホッとした。

やはり彼女らには年相応の無邪気な笑顔の方がよく似合う。2人に笑顔が戻り、ヴィヴィオも少し元気になったようだ。彼女はオトヤの下まで歩み寄り、頭を下げる。

「？」

「……ありがとう…2人を元気にしてくれて…。」

「ヴィヴィオ…うん、どういたしまして。でも、元気づけようと思ったわけじゃない。だって…絶対に大ショッカーは倒すんだから。」

「……うん。」

「おい、お前ら。」

その時、少しの間姿を消していた克己が姿を見せた。
彼は右手の親指でオトヤ達に『来い』というジェスチャーをすると、そのまま再び奥の方へと姿を消していく。

それを追いかけてオトヤ達が案内されたのは……土が固められて作られた墓標だった。

そこには一丁のシアン色の錆びた銃とカードケースが突き立てられており、更に立札まであった。

立札にはこう記されている…、

『我が英雄仮面ライダーディエンド、ここに眠る』

…と。

その文字を見てアインハルトと幸太郎は顔が真っ青になり、思わず墓を掘り返そうと手を伸ばした。

しかしそれをアインハルトはオトヤに、幸太郎は克己に止められ、墓から引き離される。

「そんな……海東さん……海東さぁん!!」

「何でだよ……海東…返事しろよおい!! 海東!! 海東おぉ!!」

「お前らまだ理解してないのか!! ここでこいつの墓なんぞ掘り返して何になる!! それで大ショッカーは消えるのか!? 消えないだろ!! 死者を愚弄する真似は二度と止めろ!!! わかったか!!!」

「……………海東さん…。」

彼の名を呟き、オトヤは墓からディエンドライバーを抜き取った。
一瞬克己が怖い顔をするがすぐにオトヤの意図に気付き、何も言わない。

オトヤはディエンドライバーをアインハルトに渡すと、彼女のカバンの中にそっとそれをしまわせた。

「お…ひつく…オトヤ君…。」

「海東さんも一緒に戦うんだ…：僕らと一緒に…：。奴らと…：!!」

「海東さんも…？」

「ああ…：あんな奴らに、負けるはずが無い…：仮面ライダーは、『正義の味方』なんだから!!」

鞆の中に入れたディエンドライバーを見つめるアインハルト。

錆びついているが、それには確かに温もりがあった。

海東の…：それに、オトヤの…。

ようやく彼女は、海東が何故残ったのかを理解し、涙を拭いてそれを抱きしめた。

幸太郎もようやく冷静さを取り戻し、涙をぬぐう。

準備は整った…：そうしてオトヤ達が立ち上がると…、

「ならば戦ってもらおうか!!!!」

「「「!!!!!!」」」

突然後ろから声が聞こえ、全員で振り返る。

そこには血まみれの伊達やなのは、ユウジに歩をひつとらえたバースにフォーゼ、それにクウガと……バスターの姿もあった。

確かバスターは伊達が変身していたはず……それなのに何故……?

「バスター……!? ヤマトさんじゃ無い……誰だ!?!」

「成程なあ……オトヤ、あの見慣れないライダー……大ショッカーの怪人の気配がする。確か……そう、アポロガイストだったか?」

「ほう、さすがはエターナル察しがいいのだ。」

確かに、ヤマトとは似ても似つかぬ口調で喋っている。

まさかバスターまで敵だとは……しかし、それでもオトヤ達は諦めない。

全員でベルトを巻き付け、大ショッカーのライダー達めがけて走り出した。

「「へんs、」」」

『ス・モ・ー・ク／オ・ン』

変身しようとするといきなりフォーゼが『スモークレッグ』で目暗ましし、変身を妨害。

その隙にバースとバスター、そしてクウガが3人からベルトとダキバットを奪い取り、縄で拘束。

勿論アインハルトも拘束し、全員を拘束し終わるとその縄をクウガが呼びつけたショッカー戦闘員達が掴んだ。

「くっ……離せ!!」

「ダメだ、お前らはこの屑どもと共に広場で処刑する。」

「くっ……クウガ!! お前それでいいのか!! お前と一緒に戦った海東さんの気持ちはどうなるんだ!!」

「海東……? ……かい……とう……。」

「クウガ、余計な考えを持つな。行くぞ。」

「あ……ああ、すまないバース。この子供たちはどうする?」

「放っておけ。どうせ何もできやしない。」

やはり洗脳が強すぎる……これしきの言葉じゃ通用しない……。

広場……という事は公開処刑だろう…。

諦めたくはない……しかし、打開策が見つからない…。
唇を噛みながら、オトヤ達は広場へと連れて行かれた。

(……海東さん……貴方の想い……無駄にしたくない……!!)

連れられながらアインハルトはそう思い、カバンが奪われる前にと
っさに服の中に入れたディエンドライバーに手を当てた。

広場

「聞けえええー……い!!! おろかな人間共おおお!!!」
「!!!」

公開処刑の開会の挨拶は、大首領であるシャドームーンではなく、
その側近であるブラック將軍により行われた。

彼の隣にはシャドームーン、そしてショッカーレジェンドルガが並
んでおり、その周りを幹部級の怪人達と平成主役ライダー達とバー
ス、バスターで囲い込む。

どうやらディケイドと電王も帰還したようで、電王はカブトとキバ
の間に、ディケイドはキバとダブルの間に立っていた。

サブライダー達もこの会場を囲んでおり、おそらくは見張り。

何でも『ディケイド達が遭遇した謎の敵』に備えているらしい。

その時は何とかディケイドがインビジブルとクロックアップのカー

ドで電王ごと逃げたが……いつまた襲ってくるかわからない。

この国に生き残っている人々を全員集め、高らかにそう宣言するブルック將軍。

これは見せしめなのだ、『大シヨツカーによる世界の完全制圧』の民衆の中で怯えるリオとコロナ、それにオトヤから預かったザンバットソードを抱きしめるヴィヴィオ。

「さあ、まず最初に殺してほしいライダーは誰だ……？ んん……？」

必死に電王へ呼びかけるモモタロス。

しかし電王は一切反応せず、振り向こうともしない。

「はい。」

デングァッシャーをソードモードに組み立てると、それをモモタロスの首に突きつける。

（ダメ……。）

「良太郎やめろ！！俺だ！！モモタロスだよ！！！！どうしちゃったんだよお前！！！！りようたろおおおお！！！！！！」

「じいちゃん！！！！じいいちゃん！！！！！！」

（こんな事……。ダメ……。だって……。だって仮面ライダーは……。！！）

「仮面ライダーは……。正義の味方……。」

「……！！」

アインハルトがそう呟いたと同時に、電王の動きが止まった。
続いて彼はデンガツシャーを落とし、ワナワナと震えだし頭を抱える。

それを見ていたブラック將軍は何が起きたのかわからずに困惑し始めた。

「馬鹿な…どうなっている…!？」

「無理……仮面ライダーに、人を殺すなんてできるはずが無い…!」

「こ……小娘え!! 貴様…貴様電王に何を!!!!」

そうだ……自分は今まで、オトヤに散々教えられたではないか…。
仮面ライダーは大ショッカーの仲間なんかじゃない…仮面ライダーは…、

「私達が未来へ伝える思い……それはライダー…!! 仮面ライダーは…仮面ライダーは正義の味方…!! 絶対に貴方達なんかには屈しない…!! そうですよね皆…!!」

「…ライダー…?」

「らい…だ…?」

「正義…!？」

アインハルトの言葉を聞き、徐々に平成ライダー達の様子がおかし
なってくる。

これにはさすがに黙ってみていたシャドームーンも困惑し、何が起
きたのか理解不能。

しかし原因は十中八九、アインハルトにあるに違いない。

「仮面ライダーは…正義の味方!!!! 仮面ライダーは正義の味方!
!!!!」

「ブラック將軍…その耳障りな声を黙らせろ…!!」

「目を覚ましてくださいライダー!!!! ライダーあああああああ!
!!!!!!」

「ライダー」！！！！！！！！！！

その時、民衆の方からも小さい声が3つなった。
それはリオ、コロナ、そしてヴィヴィオに違いなかった。

彼女達は民衆の一番前に出てき、目の前の平成13ライダー達へと必死に呼びかけ続ける。

「ライダー……私達は、あの人達を見てわかった……！仮面ライダーは悪い奴らじゃない……悪いのは大ショッカー……！仮面ライダーは正義の味方……！だから……だから一緒に戦って……！！」

「私達には貴方達の力が必要なんです……！ライダー……！」

「ライダー ああああああ……！！！！！！！！」

「ライダー……！」

「ライダー……!!」

「仮面ライダー……!!」

「頑張れ仮面ライダー……!!」

「大ショッカーの洗脳なんかには負けるな!!ライダー……!!」

彼女らの呼びかけと同時に、民衆からもチラホラと声上がり始めた。

それは間違いなく、仮面ライダーへの応援メッセージ。

本当は彼らも心の底では信じていたはずだ……『仮面ライダーは正義の味方』。

彼らと呼ぶ声は徐々に増え続け、とうとう……

「仮面ライダー……!!」

「仮面ライダー……!!」

「頑張って仮面ライダー……!!」

「ライダー……!!」

「くわああああめんるあいだあああああ……!!」

「負けないで……!!ライダー……!!ライダー……!!」

この世界の住人全員が仮面ライダーへ呼びかけ始めた。

それを見かね、とうとう怒りが臨界点に到達したシャドームーンは自らサタンサーベルを握り、アインハルトの下に。

「ええい黙れ黙れ!!そいつらはもう我々の忠実な僕!!貴様らが懇願するライダーはこの瞬間を持ってすべて消える……!!まず……、

」

「……………!!」

「この小娘から消えてもらおうかああああああ!!!!!!!!」

サタンサーベルがアインハルトへと振り下ろされた。

一瞬…本当に一瞬世界が止まる。

これが『死』……アインハルトがそう思った瞬間……、

「「ライダああああああ!!!!!!キイイイイイイイイイ
イイック!!!!!!!!!!!!!!!!!!」」

「ぐあっ!!?」

突然空から2つの影が現れ、シャドームーンを蹴り飛ばした。

影は地面に華麗に着地すると、バスターとブラック將軍を殴り飛ばし、アインハルトが礫になっていた杭を破壊。

彼女を救出すると、彼らは大シヨツカー、そして平成ライダーの前

に立った。

「貴様ら……！！！！」

「「仮面ライダー1号、2号！！！！」」

そう、彼らは1号と2号。

伝説の仮面ライダーと呼ばれた仮面ライダー。

だが、昭和ライダー達はショットカーレジェンドルガにやぶれたはず……なのに何故……？

「い……1号さん……2号さん……どうして……！！」

「12年ぶりだねアインハルトさん。確かに我々は、あの時ショットカーレジェンドルガに敗れた。」

「だが、ディエンドが自らの命を懸けてまで我々を救ってくれたのだ……『未来を頼む』……彼は最期にそう言った……。」

つまりこういう事だ。

前の時代では昭和ライダーは平成ライダーに敗れ、全員死亡し消滅。だが、この時代は違う……戦う相手は平成ライダーからショットカーレジェンドルガに代わり、そしてそれをディエンド……海東が命を懸けて救ったのだ。

つまり、海東は成功したのだ……『未来の改変』、そして仲間を守る事に。

そして、1号と2号がアインハルトを後ろに下がらせた瞬間、彼ら

の背に大きな銀色のオーロラと、黒いオーロラが出現。
そこから出てきたのは…………、

「「うおおおおおおお!!!!!!!!!!」」

「何だと!?!」

何と、オーロラを突き破り…あの時敗れたはずの昭和ライダー達が次々と姿を現し始めた。

V3、ライダーマン、X、アマゾン、ストロンガー……しかもそれだけではない。

更にそこから新たなライダー達も姿を見せ始め、全員で7人ライダーの隣に並ぶ。

スカイライダー、スーパー1、ZX、ブラック、ブラックRX、シン、ZO、J

昭和の時代を守ってきた、すべての仮面ライダー達。

彼らはオトヤ達を拘束している杭を全て破壊すると、周りを囲んでいる戦闘員達を一撃で倒していく。

しかも、それだけでは終わらない…。

続いては黒いオーロラ…そこから更に数名のライダーが姿を見せる。

「あれは……!!!!」

アナザーアギト、歌舞鬼、コーカサス、そして超巨大なライダー…
コア

平成全ての世界のダークライダー達だった。

自由を取り戻したオトや達も何が起きているのか理解できず、戸惑うばかり。

すると……今度は空に一本の亀裂が……。

そこを突き破ると……続いて信じられない物が目に飛び込んできた。

プ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
ン
!
!
!
!
!
!
!
!
!

「「「デンライナー!？」」」」

そう、先ほど破壊されたはずのデンライナーだ。

それは停車すると、中から3人の人間が姿を見せた。

「登！！ストラトス！！」

「皆無事かい!？」

「ヤマトさん……ハジメ!？」

何と、それは自分たちの元の世界での仲間……剣立ハジメと加藤ヤマト。

改變されたこの時代では絶対に会う事の無い仲間達だった。

どうして彼らまでも…？

謎は深まるばかり…すると、デンライナーから出てきた3人目、オーナーが民衆の中心でこう言った。

「ライダーの歴史…それは、人々の自由と平和と正義の歴史…。たとえ、ライダーの心や時間を変えられたとしても、あなた方では『ライダーへの想い』を変える事は出来ない…！！ライダーが死ぬ時は人々の記憶からライダーが忘れられた時のみ、裏を返せば…人々がライダーを思い続ける限り、仮面ライダーは不死身なのです…！！！！！！」

「「うおおおおおおお！！！！！！ラ・イ・ダー！！！！ラ・イ・ダー！！！！ラ・イ・ダー！！！！」」」

「小癪なあゝ…！！行け！！平成ライダー共よ！！あの目障りな奴らを葬り去れ！！！！」

シャドームーンの命令が平成ライダー達に。

この至近距離だ、聞こえていないわけがない。

だが何故だ…誰一人として動こうとはしていない……。

「ええい!! 聞こえぬのか!!!! 早く奴らを……!!」

「てめえ、誰に向かって命令してやがる……!!!!」

「何……!？」

『アタックライド ブラスト』

その電子音と共に、シャドームーンの足元に無数の銃弾が放たれた。驚きのあまり言葉の出ないシャドームーン…その間に、平成ライダー達は次々に昭和ライダーやダークライダー達の下へ。

今の攻撃を放ったライダー…ディケイドはシャドームーンを鼻で笑うと、ライドブッカーを腰に戻した。

「……今ので目え覚めたぜ……。感謝する、オトヤ。」

「士さん……!」

「皆もそうだろ……!! ユウスケ……!! ショウイチ……!! シンジ……!! 尾上……!! カズマ……!! アスム……!! ソウジ……!! 野上……!! ワタル……!!」

「「「おう……!!」」」

「それと左とフィリップ、火野と後藤と弦太朗もな！！！」

「「「ああ！！！」」」

これはつまり……アインハルトの言葉が、全ての平成ライダーを救ったのだ…。

あまりにも予想外、そして嬉しい出来事に、彼女は涙を隠す事無く泣いた。

そんな彼女の隣にオトヤが立ち、彼女の手を握る。

「アインありがとう…君のおかげだ…！！！」

「……私も戦います…海東さんの魂と共に…貴方や、ライダー達と共に！！！」

そう言って、アインハルトは鞆からディエンドライバーを抜き取った。

カードケースを腰に下げ、『カメンライド ディエンド』のカードを手にとると、それを胸に押し当てる。

同時にヴィヴィオがオトヤに駆け寄り、ザンバットソードを彼に渡す。

「ヴィヴィオ…？」

「はい、信じたら返す…そういう約束でしょ？ちゃんと約束守ったよ、『オト兄』！」

「ッ…お前…！」

「何でだろ…なんか、そう呼びたくなっちゃった…♪」

「ああ、ありがとう!!」

ザンバットソードを受け取ると、バースがダキバットや幸太郎達のベルトがしまわれたゲージを破壊してベルトを元の持ち主の下へ。その間に伊達がバスターに襲われ、バースは伊達の盾となるべく彼等の間に。

バスターのセイバーハンドをもろに受けてしまい、バースは変身者『後藤慎太郎』の姿に戻って地面に倒れた。

「ご、後藤ちゃん!!」

「だ……伊達さん……!! 今ですいません……俺の……俺の代わりに……火野達を……!!」

そう言い残し、気絶する後藤。

伊達は思わず流れた涙を堪えて拭い取り、後藤が残したバースドライバーを手を取った。

「ああ、わかったぜ後藤ちゃん……オトヤや火野達は絶対に守る。だから……今日だけは……」

それを腰に巻きつけると、伊達はミルク缶を用意。

セルメダルを右手ではじくと、それを左手でキャッチした。

「俺がバースだ。」

「行こう皆!!!!」

「」「おう!!!!」

「はい!!」

「クライマックスだぜえ!!!!」

『ガブリ!!』

『カメンライド』

『エターナル!』

『0:0:0:スタンディング・バイ』

『バスターフェッスル セット』

「」「」「変身!!!!!!」

『絶滅大サービスだ!!!!』

『ディエンド』

『チェンジ』

『ストライク、フォーム』

『ソード、フォーム』

『エターナル!』

『コンプリート』

『バスターモード トランスフォーム』

『カポーンッ!』

様々な色の光がオトヤ達を包み込んだ。

オトヤはダークキバへ、アインハルトはディエンドへ、幸太郎はNEW電王へ、モモタロスは電王SFへ、伊達はバースへ。

更に他のメンバーもそれぞれの仮面ライダーの姿に変わって行き…
…大ショッカーの前に、全ての世界全ての仮面ライダー達が姿を見せた。

彼らの瞳に映るのは『正義』……仮面ライダーは…正義の味方。

「ライダーが必要とされる限り…俺たちは不死身だ!!俺は仮面ライダー1号!!!!!!」

「そしてライダーがいる限り…大ショッカーの思い通りにはさせん!!!俺は仮面ライダー2号!!!!!!」

「唸るダブルタイフーン！！！仮面ライダー…V3 ああああああ！！！！」

「命ある限り戦う…ライダーマン！！！！」

「セタツプ、ライドル！！！俺は、仮面ライダー、X！！！！」

「アアアアマアアアゾオオオン！！！！」

「天が呼ぶ地が呼ぶ人が呼ぶ…悪を倒せと俺を呼ぶ…仮面ライダー
ストロンガーアアア！！！！」

「空はこの俺が守る！！スカイライダー！！！！」

「赤心少林拳は正義の拳！！コードネーム、仮面ライダースーパー
1！！！！」

「俺はライダー10号！！仮面ライダーZX！！！！」

「キングストーンは王者の証！！仮面ライダー、ブラアアック！
！！！！」

「俺は太陽の子！！仮面ライダーブラック！！RX！！！！」

「うがあああああああ！！！！！！カメン…ライダー……シイ
イイイイン！！！！」

「この力は大切なものを守るために…仮面ライダーZO！！！！」

「Jパワーは地球の生命!!!!仮面ライダーJ!!!!」

「俺は戦う…みんなの笑顔の為に!!!!仮面ライダークウガ!!!!」

「目覚めろその魂!!仮面ライダーアギト!!!!」

「この力は…間違いは正す事ができる…!仮面ライダー、アナザーアギト!!!!」

「戦いを終わらせる!!その為のチームだ!!!!仮面ライダー龍騎!!!!」

「絆は決して途切れない…どんなに離れていても!!!!仮面ライダーリュウガ!!!!」

「疾走するのは夢を守る想い!!仮面ライダーファイズ!!!!」

「友を信じ、己を信じる!!仮面ライダーオーガ!!!!」

「運命の切り札を掴みとれ!!仮面ライダーブレイド!!!!」

「俺は人として生きる…家族や仲間の為に!!!!カリス!!!!」

「清めの音を叩き込む!!!!仮面ライダー響鬼!!!!」

「わが魂は響鬼流と共に!!!!仮面ライダー歌舞鬼!!!!」

「天の道を行き…総てを司る…仮面ライダー…カブト!!!!」

「この戦いを大ショックの血で彩りましょう…仮面ライダーコーカサス！！！！！」

「時を超えて、俺、参上！！！！仮面ライダー電王ソードフォーム！！！！！」

「今、僕にできる事を！！！！仮面ライダー電王ライナーフォーム！！！！！！！！！！」

「仮面ライダーキバ！！王の判決を言い渡す……死だ！！！！！！」

「全てを破壊し全てを繋ぐ！！世界の破壊者、仮面ライダーディケイド！！！！！！！！」

「仮面ライダーダブル！！さあ、お前の罪を数えろ！！！！！！」

「仮面ライダーエターナル！！さあ、地獄を楽しみな！！！！！！」

「この腕…どこまでも届かせてみせる！！仮面ライダー、オーズ！！！！！！」

『暗黒の力思い知れ！！わが名は…仮面ライダー…コア！！！！！！』

「青春スイッチオンで宇宙キターーーーー！！！！！！！！仮面ライダーフオーゼ！！！！！！！！」

全ての仲間のライダーが揃った。
どいつもこいつも頼もしいライダーばかり…。
そして、彼らも立ち上がる……！！

「さて、お仕事お仕事!!!!仮面ライダーバース!!!!!!」

「本当の戦いはカウントゼロから始まる!!!!仮面ライダー、NEW
電王!!!!!!」

「私の戦う理由は私だけが決める……!覇王の弾丸!!!!仮面ライダー
ディエンド!!!!!!」

「仮面ライダーダークキバ!!!!大ショッカー共、光栄に思え……、
」

全員の中心に立つダークキバ。
彼は大ショッカー達に手を向けると、鋭い眼光を光らせながら叫んだ。

「絶滅タイムだ!!!!!!」

10部：科学の光が落とす影（前書き）

今回は別作者さん三名からゲストキャラが計五名来てくれました！
何処に出るかは…読めば普通にわかります。

10部：科学の光が落とす影

「光栄に思え……絶滅タイムだ!!!!!!!!!!!!!!」

ダークキバを中心に、全ての昭和、平成、そしてダークライダー達が一斉に構えた。

ある者を拳を、ある者は剣を、ある者は銃を。

十人十色：それぞれが個性的な構えを取り、目の前に広がる大ショッカー達と対峙。

それに歓声を上げる人々やヴィヴィオ達。

グググと歯を食い締めたシャドームーンがサタンサーベルを手にする：それが上に振り上げられたのが開戦の合図。

シャドームーンが剣を上げると同時に、ライダーと怪人：その2大勢力が勢いよくぶつかり合った。

「「「うおおおおおおおおおおおおおおおお
おお!!!!!!!!!!!!!!」」」」

「「「イーーーーー」」」
「!!!!!!!!!!!!!!」」」

昭和も平成も、正も悪も無い純粹な『ライダー対怪人』

ショッカー戦闘員を何体も引き連れていた紫色の怪人：『ギル』は空中に巨大な生物兵器『メダルの器』を浮かび上がらせると、そこから何体もの屑ヤミーを発生。

屑ヤミーに人々を襲わせている間にライダーを仕留めてしまおうという作戦らしいが：そうは問屋が卸さない。

『ライオン！トラ！チーター！ラッタ！ラッタ！ラトラッタ！ラトラッタ！』

「せいやあああああああああ！！！！！！！！！！」

「うおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

タトバコンボから黄色のメダルを使い変身したオーズの高速形態『ラトラーターコンボ』と昭和唯一の飛行能力保持者 スカイライダー。

歴代ライダーの中でもトップクラスの速度を誇るこの2人の前ではどんなに数多くて関係ない：動く前に仕留めてしまうのだ。

メダジャリバーとライダーパンチ&キックで屑ヤミーを一掃すると、次に待ち構えていたのは巨大な炎影。

『行け！！勇ましき仮面ライダー共よ！！！！』

「「おう！！！！」」

仮面ライダーコアだ。

しかもその手の上には仮面ライダーブレイドと仮面ライダーキバの

姿が。

2人は飛び上がると、必殺技である『ライトニングブラスト』と『ダークネスムーンブレイク』がギルに炸裂。

ギルが地面に落ちると同時に、彼の下に今度はバットファンガイアとシュバリアン、フィロセキラワームが。

【キバ】、【カブト】、そして『RXの世界』の最強の怪人3体に加えて『オーズの世界』最強の怪人ギルと『メダルの器』かなりの強敵ぞろいだ…しかし、ライダー達は怯まない。

オーズ、スカイライダー、ブレイド、キバで並び立つと、その後ろにコアが聳え立つ。

全員再び拳や武器を構え、怪人達へ向けて走り出した。

「「「うおおおおお！……！！」」」

『コブラ！カメ！ワニ！ブラカ！ワニツ！！』

一方でこちらはクウガ&アギト&ディケイド&電王チーム対ン・ダグバ・ゼバ。

やはり全世界でも最強クラスの実力を持つだけあり、その力は計り知れず、ディケイドとクウガのベテランペアでも押されてしまう。

「くっ……ユウスケ！！ショウイチ！それとモモタロス！！一気に決めるぞ……！！」

「あ…ああ……！！」

倒れたアギトと電王も引き起こし、ディケイドが構えたのは『FF

R』のカード。

それも四枚もだ。

ディケイドライバーへカードを装填すると、勢いよくバックルを閉じるディケイド。

彼が狙いをつけたのはクウガ、アギト、電王SF……それとアナザーアギトだ。

『ファイナルフォームライド ク・ク・ク・クウガ ア・ア・ア・アギト デ・デ・デ・デンオウ アナザーア・ア・ア・アギト』

「確かお前…カオルだったか？ ちよつとくすぐったいぞ…！」

「おふうっ!？」

アナザーアギトの背中に手を突っ込むディケイド。

すると彼の姿は見る見るうちに変わっていき、まるでアギトの『マシントルネイダー』の様な姿に。

しかしところどころが生物的であり、先端にはギョロリとした目が。これがアナザーアギトのFFR形態『アナザートルネイダー』
それに合わせてクウガはクウガゴウラム、アギトはアギトトルネイダー、電王はモモタロスへと超絶変形。

「ディケイド!! 俺が力を貸そう!!」

「ああ、頼むぜ10号ライダー、ZX!!」

バタンの戦闘員の群れを倒したZXはディケイドに合図をすると、勢いよくアナザートルネイダーへと飛び乗った。

モモタロスはデンガッシャーをクウガゴウラムの尾に突き刺すと、それをぶんぶん振り回す。

それと同時にアナザートルネイダーが不規則な動きで動き回りだし、ダグバは相手を捉える事が出来ない。

「必殺!! 散乱爆雨!!!!!!」

アナザートルネイダーの不規則な動きから繰り出されたZXの『衝撃集中爆弾』

どこから来るかわからない爆撃の雨に、ダグバは対応しきれない。

戸惑うダグバ：そこへ、アギートルネイダーに乗ったディケイドと、モモタロスの振り回すクウガゴウラムが突っ込んできた。

『ファイナルアタックライド ア・ア・ア・ギト』

「『はああああああああ!!!!!!』」

「必殺!! 俺の必殺技ケツゴウラムバージョン!!!!!!」

『ぬおおおおおおお!!!!!!』

クウガのアルティメットフォームとほぼ同等のスペックを持つダグバは、クウガゴウラムとアギートルネイダーを間一髪で受け止めた。勢いに押されて少しずつ後ろへ下がっていくが、耐え切れない程の威力でも無い…。

これなら勝てる、彼がそう思った瞬間だった。

「アサルトライダーキック!!!!!!」

「ZXキーーーーック!!!!」

『なっ：!?!?』

何と、元の姿に戻ったアナザーアギトとそれに乗っていたZXがデイクイド達の上から飛び出し、それぞれの必殺キックを放ってきた。勿論それだけではダグバを倒すほどの威力は無い。

しかしそれを喰らう事によりダグバはバランスを崩し、アギトトルネイダーとクウガゴウラムは自由になるのだ。

『アサルトライダーキック』と『ZX』キックに加え、『ディケイドトルネード』と『俺の必殺技ケツゴウラムバージョン』がダグバへと炸裂。

それもベルトを正確に捉え、ダグバの体は完膚なきまでに粉々に碎け散った。

龍騎&リュウガとファイズ&オーガの2組が共闘するのはこれで二度目。

一度目は【ファイズの世界】で：その時に見せた抜群のコンビネーションは今でも健在。

更にこれに？3とライダーマンも加わる事で、巨大怪人『エラスモテリウムオルフェノク』を圧倒している。

ドラグレッダーとドラグブラッカーが主に戦闘を担当し、それを援護する形でファイズ・オーガはフォンブラスター、龍騎・リュウガはストライクベントで。

？3はダブルタイフーンで風を纏った蹴りを何発も繰り出し、ライ

ダーマンはドリルアームで攻撃。

エラスモテリウムオルフェノクはそれに悲痛な叫びをあげながら苦しもうにもがき回る…もがいた時、腕が龍騎とファイズを弾き飛ばしてしまった。

「兄ちゃん!!」

「タクミ!!」

リュウガとオーガの集中が一瞬途切れ、すぐに彼らはエラスモテリウムオルフェノクに捕まってしまった。

何度も脱出を試みるがあまりにも力が強く、脱出できない。

ドラグブラッカーとドラグレッダーも火炎弾を仕掛けるが、勢いを取り戻したエラスモテリウムオルフェノクにそんな攻撃通るはずも無く、あっという間に弾かれてしまった。

「あ……歩……!!」

「ユウジ……どうすれば……」

「龍騎! ファイズ! 諦めるな!!」

「君達には我々が知っている!! リュウガとオーガは俺達が助ける、そしたら全員で必殺技を放つんだ!!」

「「りよ、了解です!!」」

何とも頼もしい昭和の先輩方の言葉…その言葉通り、?3とライダーマンは勢いよくエラスモテリウムオルフェノクへと飛びかかった。

「アタッチメント!!! ロープアーム!!!」

ライダーマンは右手のアタッチメントをドリルアームから捕縛用の『ロープアーム』へと変更。

それでリュウガ達を掴んでいるエラスモテリウムオルフェノクの右手の親指を掴むと、それを思いっきり引っ張った。

徐々に親指が開き…そこにはほんのわずかな隙間が生まれる。

そこへ?3得意の回転キックを叩き込み、エラスモテリウムオルフェノクの手が開きリュウガとオーガは脱出。

『『ファイナルベント』』

『『エクシードチャージ』』

「行きましようシンジさん!!! ユウジ!!!」

「ああ、タクミ!!! 歩!!!」

ファイズとオーガはそれぞれのポインターを脚に、龍騎とリュウガは独特の構えを取り空中へジャンプ。

必殺用マーカ―をエラスモテリウムオルフェノクにぶつけると、それを目掛けてファイズが『クリムゾンスマッシュ』を、オーガが『ストラングスマッシュ』を放つ。

それと同時に空中からは龍騎とリュウガの『ダブルドラゴンライダーキック』がエラスモテリウムオルフェノクの顔面に向けて放たれ、4人のライダーの攻撃はまっすぐと命中。

数秒耐えるエラスモテリウムオルフェノクだが…すぐに体から青い炎が燃え上がり、巨大な肉片を灰としてぶちまけながら豪快に消滅した。

『ギシャアアアアアアアア！！！！！！！！！！！』

「フハハハハ！！！！どうだライダー共！！！！これが私の真の力だ！！！！」

そう言うのは『アマゾンの世界』の怪人である『十面鬼ゴルゴス』しかもその姿は怪人作りの名人『死神博士』により【響鬼の世界】の怪人『手長足長』と融合した異形の物。

ゴルゴスとしての原型を留めていながら3メートルを超える脚と2メートルを超える腕を持ち、下半身には手長足長の2つの顔が覗いておりそこから奇声が発せられていた。

これと戦うのは響鬼&歌舞鬼、アマゾン、そして真だ。野性味あふれる戦法で戦うアマゾンと真に対し、響鬼と歌舞鬼は慎重派。

無駄な攻撃は仕掛けず、もっとも音撃を叩き込みやすそうな場所を探っている。

「どうします師匠…奴め、隙が無い…！！」

「焦りなさんなカブキ。いずれ隙が生まれます…その為に、アマゾンさんと真さんが僕らを庇ってくれているのですから…。」

そう、アマゾンと真は囷だ。

この作戦の立案者は真…彼は元々頭が良い。

自分達が隙だらけな攻撃を仕掛けるから、敵に隙が生まれ次第2人で叩く…という作戦だ。

しかしさすがは『アマゾンの世界』を恐怖に陥れていた張本人…簡

単には隙を見せない。

さすがにアマゾンと真にも疲れが見え始め、2人とも肩で呼吸している。

「真…どうする…？」

「グルルル…：クソ…：ナラバアマゾン、ヤツガスキヲツクラナイ
ナラバオレタチデヤツヲトラエヨウ…：アトハヒビキタチガ…！！」

「アマゾン、わかった…！！」

そうして真はゴルゴスの腕に、アマゾンは脚へと飛びかかった。
力は相手の方が圧倒的に上だが、スピードはこちらが上。

逃げる間も無くゴルゴスは捉えられてしまい、身動きが取れない。
この状態だとアマゾンも真も少々危険だが背に腹は代えられない。
今がチャンス…：そう感じ取った響鬼は歌舞鬼を引き連れ、2人は腰
の音撃鼓をゴルゴスに張り付けた。

「グっ…：は、離せ…！！グウ…：！！」

「行きますよ歌舞鬼…：師弟二代…！！音撃打『双焰の舞』…！！」

「音撃打『乱れ吹雪の型』…！！」

響鬼と歌舞鬼の2人同時音撃の専用技。

真とアマゾンが必死にゴルゴスを抑え付ける中、『響鬼流』師弟二
代に渡る大演奏会が幕を開けた。

『Jの世界』のフォッグマザーの巨体は、見る者を唾然とさせていた。

それに怯まずに立ち向かうのはJ、ZO、ストロンガー、カブト、コーカサス。

巨大化出来るJを除き、これ程の相手に太刀打ちできるのはクロックアップ能力を持つ『マスクドライダーシステム』を持ったカブトとコーカサス、ブレイド以上に巨大な電流を放つ事の出来るストロンガー、そして強力な身体能力を持ったZOを置いて他にいないだろう。

しかしJはJパワーを発動させる為のエネルギーが溜まっておらず、巨大化は出来ない。

何とか今はZOの力とストロンガーの電撃でフォッグマザーの拳を受け止めてはいるが：長くは持たないだろう。

「くっ……一旦引くぞZO!!」

「わかった!!」

拳をエレクトリックファイヤーで弾き飛ばし、引き下がるストロンガーとZO。

これ程の相手を倒すには相当なパワーがいる：強力なパワーだ。

「芦河でも連れてくるか？」

「カブト、あまりアギトに負担をかけてやるなよ？」

「ん？」

Jのツツコミを華麗にスルー出来るのが我らが天の道を行く男だ。

そうしているとコーカサスが何かを思いついた様に全員の前に立ち、青いバラを口元まで持って来た。

「ならばこうしましょう。私とカブトの2人のクロックアップでヤツの体内に侵入し、ヤツの体内機器を破壊します。弱ったヤツに：あなた方でとどめを。」

「なあコーカサス、そのバラどこのだ？ 良い色だな。」

「カブト、少しの間黙っていただけますでしょうか？」

それでも黙らないのが我らが天の道を行く男だ。

何はともあれ、全員承諾した辺りでカブトとコーカサスは昭和ライダーの前に。

カブトはベルトを、コーカサスは腰のハイパーゼクターを叩き、2人は光速の世界へと消えた。

「クロックアップ！！」

『クロックアップ』

「ハイパー：クロックアップ。」

『ハイパークロックアップ』

電子音声と共に姿を消す2人のライダー。

その瞬間、急にフォッグマザーの顔が苦痛にゆがみ始め、腹の辺りから物凄い音が鳴り響いている。

きっとカブトとコーカサスが何かしているのだろう：何をしているのかはあまり考えたくないが…。

フォッグマザーが弱ったところで、J、ZO、ストロンガーは飛び上がり、それぞれのライダーキックをフォッグマザーへと叩き込んだ。

「Jライダーキック！！！」

「ライダーアアア……キイイイック！！！！！」

「電ドリルキック！！！」

漲るJパワー、深緑の力、電撃。

この3つのパワーに加え……さらに体内からも電子音声が。

『ライダー・キック』

『マキシマム……ライダー……パワー……』

「「ライダーキック！！！」」

ドンッッ！！！！！！

あまりにも拍子抜けしてしまうような間抜けな音が響き、フォッグマザーの体が突き破れた。

それと同時に倒れこむフォッグマザー……その中からはカブトとコーカサスが。

何故かコーカサスがカブトを怒っている（カブトは聞いちゃいないが）……腹の中で何があったのだろうか……というかカブトは何をしたのだろうか……？

「リボルケイン!!!!」

RXとブラック、そして電王ライナーフォームの相手はジャーク將軍。

RXにとってはまさに宿敵と言えよう。

剣を交じ合わせる2人：その間にブラックと電王が攻撃を仕掛ける。

だがジャーク將軍の力は強大であり、RXの強化前であるブラックと戦闘が苦手な電王では手も足も出ない。

対等に戦っているかのように見えるRXですら少しずつ圧されている：負けてしまうのも時間の問題であろう。

余裕の笑みを崩さないジャーク將軍、彼はとうとうRXを弾き飛ばし、ブラックと電王へと投げつけた。

ぶつかり合い転げる3人：しかしすぐさまブラックが立ち上がり、ジャーク將軍へと殴りかかる。

当然力は敵わない、簡単に弾かれてしまう。

「まずいぞ!!!このままでは!!!」

「諦めるなブラック!!!俺たちライダーが負けるわけにはいかないのだ!!!」

「ど…どうしようどうしよう…あわわわわ…。」

闘志を燃え上がらせるブラックとRXに対し、怯えきっている電王。デнкаメンソードを手放さないだけでしたが、精神的にはかなりま

ずい状態に陥っていた。

どうしよう…そう思った…、

その時、奇跡が起こった！！

「諦めちゃダメだよ、良太郎♪」

「俺らがついとるで！！」

「僕らも一緒に戦っちゃうもんね！！」

「クライマックスだぜーーーー！！！！！！」

電王の上を、4つの人影が飛び越えていった。

それは紛れもなく、彼の最高の仲間達…、

「モモタロス…ウラタロス！キンタロス！！リュウタロス！！！！」

電王L Fの前に現れたのは、先のディケイド達との戦いを終えてきた電王S F、それとウラ・キン・リュウタロスの4人。

確かウラタロス達はデンライナーの爆破と共に死んだはず…いや、

デンライナーが元に戻っているのだ、きっと彼らも無事だったのだろう。

電王S Fはへへッと笑うと電王L Fの胸をこんこんと叩く。

「行こうぜ、親友！」

「モモタロス……うん、皆……！ てんこ盛り行くよ……！」

「……よしきたー……！！」

電王S Fは変身を解除し、モモタロスの姿に。

続いて彼ら全員が電王L Fの中に吸い込まれるように入っていくと、電王はデンカメンソードを地面に突き立ててパスを握る。

ケータロスが嵌め込まれたベルトにパスをセタッチすると、電王はその姿を最強形態へと変形させた。

『クライマックス、フォーム』

ライナーフォームのデンカメンが剥がれ落ち、その姿は新たな素体へと変化。

右肩にロッド、左肩にアックス、胸にガン、そして顔面にソードフォームのデンカメンを装着すると、地面に突き立てたライナーの剣を握る。

電王の最強形態……『仮面ライダー電王 クライマックスフォーム』だ。

「……『俺（僕）達……！ 参上……！！』」

「よし！！行くぞ電王！！ブラック！！」

「ああ！！RX！！」

「ヘッヘッヘ：クライマックスに決めさせてもらうぜ！！」

リボルケインを構えるRX、拳を握るブラック、そして絆の剣を手に取る電王。
デンカメンソード

目の前にいるジャーク将軍へ向けて、まずはRXとブラックが攻め込んだ。

リボルケインと素手による力押しで取り押さえられると、彼の脳天目掛け：電王が真上からデンカメンソードを振り下ろした。

「必殺！！」

「「俺たちの必殺技！！」」

「「「『『『オールライダーファイナルアターーーーーック！！！！！！！！！！』』』」」」

ズバッ！！！！！！という音と共に、真つ二つに切り裂かれたジャーク将軍。

彼の体は一刀両断されると同時に、爆炎に巻き込まれて消滅。
ジャーク将軍の完全消滅を確認すると、ブラックとRXは腕をクロ

スさせ、電王は両腕を突き上げて勝利を喜んだ。

ユニコーンゾディアーツには一度勝利しているというフォーゼの油断から生まれたピンチ。

対抗すべく、スーパー1はファイブハンドを『エレキハンド』に変え、ユニコーンゾディアーツの攻撃を受け止めていた。

凄い力だが対抗でないほどでもなく、電撃を右手から放ち、いったん退ける。

「どうしたフォーゼ！立て！！」

「わりいわりい…ちょっと油断しちまった。へへっ、こんなんじゃない、賢吾やほむらに馬鹿にされちまうな。」

「次の一撃で決めるぞ…用意はいいか！！」

「おう！ばっちりだぜ！！」

そう言うతోフォーゼは懷から金色のスイッチを取り出した。

『10』の番号が振られたそのスイッチを、元々ベルトの『○』にはめ込んでいた『ロケットスイッチ』を入れ替え、スイッチオン。

『エ・レ・キ／オ・ン』

するとまず、フォーゼの右腕が金色に染まる。

続いて彼の全身が金色に染まっていき…体の装甲は宇宙飛行士をイメージした物から発電所をイメージした物へと変化。

電撃を纏った2つのライダーキック。
それはユニコーンゾディアーツを仕留めるには十分すぎる威力を誇
っており：辺りに巨大な電流をまき散らし、ユニコーンゾディア
ーツをスイッチごと完全に破壊した。

『ドリルアーム』

『トルネード』

『セイバー・イグニッション』

「「「はあ！！！」」」

「ぐあっ！？」

こちらは何と、ライダー対ライダー。
そう、正義のライダー側であるバース・カリス・バスターと、敵の
アポロガイストが変身したバスターだ。
バスターとAバスターのスペックは同一、となれば数の多いバース
達が勝つ事は目に見えている。
ガイストカッターなど、バスターに本来無い力を使い戦ってはいる
が：それでもバースのCLAWSやカリスの多彩なネオカードによ
る猛攻の前にはほぼ無意味。
最期の悪あがきとして、Aバスターはバックルにフェッスルをセッ

ト。

『プロテクトフェッスル セット プロテクト・イグニッション』

胸部に銀色の鎧『プロテクトアーマー』が出現。

その中心にある窪みにバスタードライバーをセットすると、プロテクトアーマーはバスター自身を砲台とする大砲『バスターバスター』に。

銃口をこちらのバスターに合わせて、仮面の下で叫び、Aバスターはそれを放った。

『セルバースト』

バアアアアアアアン!!!!!!!!!!

「な……!?!」

「へっ…わりいね?」

しかし、それを放つのとほぼ同時に、バースが『ブレストキャノン』で相殺。

その隣に立つバスターとカリス…ここでAバスターは確信した…勝ち目なんてあるはずが無いと。

こうなれば残された手段はただ一つ……それは…

「に……逃げるのだあ!!」

逃げる事だ。

それを追いかけようとするバースとカリス……しかしその2人の肩を
ヤマトが変身しているバスターが止め、首を横に振った。

「ヤマトさん、何を？」

「早くしねえとあいつ逃げちまうぞ!？」

「忘れたのかハジメ君？オーナーが言ってたじゃ無いか？……『世
界を救うのはライダーだけじゃ無い』……ってね♪」

「はあ……はあ……ここまで来れば大丈夫なのだあ……。」

オールライダー対大ショッカーからかなり離れた所まで逃げおおせ
たAバスター。

これで勝てる……そもそもシャドームーンにオールライダー達が勝て

少女と2人の少年の姿が。

1人はピンク色の花の様な服装をした少女。

1人は青い海の様な服装をした少女。

1人は白い装甲を半身に纏った少女。

1人は隣の少女とは対照的に黒い鎧を半身に装備した少年。

そして最後に、何処かの学校の制服姿で、片手でしか持てないぐらい短い柄の大剣を手にくら下げた少年。

どう見ても、ライダーとは程遠い姿を持つ彼女達…もちろん、Aバスターは彼女達に見覚えなど全くない。

「な…何者なのだ…!?!」

「大地に咲く1輪の花!!! キュアブロッサム!!!!」

「海風に揺れる1輪の花!!! キュアマリン!!!!」

「えっと……IS学園1年の音梨楓といいます…この子は私の愛機の『エターナルムーン』です…よろしくお願いします…!」

「何改まってんだお前? 俺は黒谷終、相棒のIS『ブラックファング』だ。」

「俺はレイジ。俺の愛剣の吸血鬼^{ブルート・ザオガー}、お前を倒すために呼ばれた。」

「よ…呼ばれたと…!?!? は…ハハッ! 残念なのだ!?! ライダーの力を手に入れた吾輩が、ライダーでも無い貴様らに負けるはずが無

いのだ!!!」

「なら試してみる? いくよつぼみ!!」

「はい!!」

そう言った瞬間、キュアブロッサムとキュアマリンの2人がAバスターの下に瞬時にやってきた。

彼はそれに対応しきれず、一瞬のうちに彼女達に殴り飛ばされ…宙を舞う。

「行くぞ。」

「はい、終さん。」

それに狙いをつけたのはI Sインストロイドを駆る楓と終。

それぞれの愛機で宙へ飛び上がると、拳を振り上げてAバスターを思いつきり地面へと叩きつける。

「グハッ…!?! な…何なのだこいつらは…!?!」

「まだ俺がいるぜ!!!」

最後にレイジの吸血鬼による一撃がAバスターを捉えた。

それによりとうとう変身が解け、彼はアポロガイストの姿に戻る。体中から溢れ出る大量の血を抑えながらも何とか立ち上がる彼…キュアブロッサム達を憎々しげに睨みつけながら、アポロガイストは最後の力でガイストカッターを握った。

「何なのだ…何なのだ何なのだ!!! 何故ライダーでも無い奴らにこの吾輩が… 一体奴らは何なのだ ああああああ!!!」

「…僕が呼んだ…。」

「何!?!」

アポロガイストの叫びに応えるかのように、キュアマリンと楓の間に1人の黒い戦士が姿を見せた。

エターナルのロストドライバーのスロットが左右入れ替わった青いベルトに、黒い体に映える赤と白のライン。

真ん中に走っている鋼色のセントラルパーテーションは、あの仮面ライダーダブルを彷彿とさせる。

背中にはセントラルパーテーションと同じ色の剣が背負われており、

彼はツカツカとアポロガイストに迫っていく。

「な……何なのだ貴様は……？」

「僕が呼んだんだ……『別の次元で別々の物語を歩む、僕らと繋がった事のある、またはこれから繋がるはずのライダー以外の戦士達』を……。」

『正確には、『僕ら』だけだね♪』

右目が点滅し、男の声とは別に少女の声も聞こえる。

これ程までにダブルに似ているにも関わらず、ダブルとは比べ物にならない程の力を感じる。

「苦勞したよ……お前らを倒す為にダークライダーや昭和ライダーを探したり……デンライナーを助けたり………改変前の時代からカリス達を連れてくるのは……。」

「な……何……！？貴様は……！？」

「僕？『僕ら』もライダーさ。」

「う、嘘なのだあ……！貴様の様なライダー……見た事無い……！見た事無いのだあ……！！……！！」

『まあ、私ら一応はダークライダーになるから無理もないかもね？

じゃあ…トモ!!」

「ああ操緒……アポロガイスト……!! さあ……!!」

『クロガネ!!』

「『科学の光に沈め!!!!!!』」

『マキシマムドライブ!!』

その音声と共に、黒いライダーは背負った剣を一気に引き抜いた。時空が振れ、重力がねじ曲がる…それは時や歴史さえも切り裂く一撃。

アポロガイストは次の言葉を言い終わらないうちに真っ二つに切り裂かれ…そのまま時空の狭間へと消滅していく…。

剣を振るって血を払うと、黒いライダーは再び剣を背に戻した。

アポロガイストが消滅した事で、彼の持っていたバスターツールは黒いライダーの下に。

彼はそれを隣にいたキュアマリンに渡すと、自身のベルトに手を掛ける。

「マリンさん、それを…あるべき所に返しておいてくれないかな？」

「え…？ トモ…じゃない…クロガネどっか行くの！？」

『うん…私たちの役目はここまでだし…それをあの人に渡しす為に貴方達を呼んだんだしね。』

「操緒さん……。」

黒いライダーの言葉に悲しそうな顔を見せるキュアブロッサムとキュアマリン。

それを見ていた終はぼりぼりと頭を掻くと、変身解除しようとする黒いライダーの手を掴んだ。

何事かと思い黒いライダーは思わず彼の方を見る…すると楓もレイジも終の手の上に自分の手を乗せた。

「本当は行きたいんだろ？ 翔太郎やフィリップ達のところへ。」

「『…………。』」

「いいんですよ無理しなくても。これは私達^{バスター}がちゃんと届けます。」

「久々の感動の再会って奴？ 行って来いよ、2人とも！」

「終…レイジ…。」

『楓ちゃん…。』

「そうですよ！ 翔太郎さん達もきつと会いたがってます！」

「行ってきたよ!!」

「『でも……、』」

「グズグズやってねえでさっさと行けよ馬鹿!! ダチなんだろう!? 大切なんだろ!? だったら行って助けてやるのが筋じゃねえのかよ!!! 智春!!! 操緒!!!」

終の言葉で…黒いライダーはベルトに掛けた手を降ろした。

数歩下がって仮面の下の涙を拭うように目をこすると、コクリと頷き、背中の剣で空間に等身大の穴を作る。

「ありがとう……皆……!!」

その空間を通り…黒いライダーはその場から姿を消した。

『グロオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!』

ダブル・エターナル、そして1号と2号が戦っていたのはテラー・ドラゴン。

それも極限まで力を高められた『テラー・ドラゴンエクストリーム』だ。

ダブルやエターナルはおろか、1号と2号すら押され気味になっており、4人は地面を転がって崖に激突。

攻撃パターンがめっちゃくちゃすぎて、全く動きが読めない。

エターナルのマキシマムを使おうにも、そんな事をすればダブルの変身が解ける……それ以前に奴が本当に『テラーメモリ』の産物なのかどうかすら怪しい。

「まじいなフィリップ……大道……どうする？」

「どうするもこうするもあるか……殺す、それだけだ……」

「諦めるな3人とも!!!まだ希望を潰えてない!!!」

「そうだとも!!!勝利を信じる者にしか、勝利は掴み取る事は出来ない!!!考えるんだ!!!奴に対抗する方法を!!!」

2号と1号もそうは言うが、はつきり言ってもう限界が近いだろう……。

そんな状態の4人に向かい、再び迫りくるテラー・ドラゴン。よける事は出来ない……真正面から打ち勝つしかない……。

そう思い、ダブルとエターナルが立ち上がったその時だった。

『クロガネ!!!マキシマムドライブ!!!』

ズオオオオオ!! という激しい音が鳴り響き、地面にたたき伏せられるテラー・ドラゴン。

まるで、見えない何か…いうなれば『重力』に押しつぶされているかのよう。

この現象をダブルは知っている…忘れないはずが無い…。

「…この力は…!!」

『まさか…!!』

「翔太朗さん!!」

『フィリップ君!! 大丈夫!?!』

空間を切り裂き、そこから黒いライダーが姿を現した。

彼はテラー・ドラゴンを左腕から放った『シユバルツシルトの闇』で弾き飛ばすと、背中に背負った剣を手に取り構える。

彼『ら』はかつてのダブルの盟友…忘れない…かけがえのない友…、

『闇より暗き深淵より出でし、其は科学の光が落とす影……仮面ライダークロガネ……!!』

「『智春!! 操緒（サオ）ちゃん!!』」

『ダブルクライン魔神双剋者』：仮面ライダークロガネは懐かしき友との再会を喜ぶ前に、愛剣を鈍く光らせた。

10部：科学の光が落とす影（後書き）

というわけでゲストは…、

キュアノアさん作『ハートキャッチプリキュアSTRIKERS』
からキュアブロッサムとキュアマリン。

ユートピアさん作『IS＞インフィニット・ストラトス＜黒き牙と
永遠の月』から音梨楓と黒谷終

ツリーさん作『仮面ライダーディケイド×電撃学園 Cross
of world』からレイジ。

の、計五名です！

ポジション的にはキカイダー的な役割で…。

元々はガタック一周年&DCDキバシリーズ通算100回記念作品
だったので、ずっと前から出す約束してました。

ようやく出せてマジハッピー。

というわけでキュアノアさん、ユートピアさん、ツリーさんありが
とうございました！！

今回は更に自分の別作品『ダブルクライン』から仮面ライダークロ
ガネも正式参戦しましたが…：次回はダキバ&ディエンドのターン
なので出番は重要人物からその他大勢にWW

あと2話で多分、完結！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1397x/>

キバ・電王・ディケイドfeat.バース オールライダーViVid

2011年11月4日03時04分発行